

一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書 IX

鳥取県米子市

O DAKA O TATE YAMA

尾高御建山遺跡Ⅱ
尾高古墳群Ⅱ
尾高1号横穴墓

1995

財團法人
建設省

鳥取県教育文化財団
倉吉工事事務所

序

鳥取県西部地域の米子市・淀江町周辺には、北に雄大な日本海、南に秀峰大山を控え、美しい自然環境に恵まれた地域であります。さらに、古くから遺跡の宝庫としても知られており、西日本では珍しい縄文時代の櫛が出土した井手脇遺跡、本州では唯一の出土であり九州との関連性が考えられる国重要文化財の「石馬」、切石積石室をもつ国指定史蹟の岩屋古墳、古墳時代後期の前方後円墳が集中する向山古墳群、彩色壁画や3基の塔心礎の出土で注目される上淀廃寺跡など、当時の活発な交流を物語る遺物・遺構が数多く存在しております。

当財団では、このような遺跡地帯一角を平成2年度より一般国道9号米子道路工事に伴い発掘調査を実施してまいりました。平成6年度も鳥取県教育委員会が建設省倉吉工事事務所と協議の上、財団法人鳥取県教育文化財団が委託を受け、西部埋蔵文化財調査事務所が尾高御建山遺跡の調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代の落し穴、弥生時代の溝状遺構、古墳、横穴墓等、たくさんの貴重な資料を得ることができました。これらの資料が今後の調査研究の一助となり、本報告書が多方面にわたって広く活用して頂ければ幸いであります。

最後になりましたが、今年度は平成2年度より実施してまいりました発掘調査の最終年度に当たります。この数年間の調査に際しまして、多大な御協力をいただきました地元の皆様はじめ、御指導いただきました方々、その他の関係各位に対し心から感謝申し上げます。

平成7年3月1日

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

序 文

建設省が管理する一般国道9号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までの76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに西伯郡淀江町及び米子市地内において、将来の国土開発幹線道路として、当面活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である米子道路の整備を進めています。

米子道路は米子市及びその周辺部における一般国道9号の交通混雑を緩和するために計画され、昭和47年から事業に着手し、現在までに米子市尾高～陰田町約8.1km（一部ランプ使用）を供用しています。

現在、西伯郡淀江町今津から米子市赤井手及び米子市陰田町から県境までの間を自動車専用道路として施工中です。

このルートには、多数の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い記録保存を行うことになりました。

このうち今年度は、「尾高所在遺跡」「百塚第7遺跡」「百塚第5遺跡」「泉上経前遺跡」「小波狭間谷遺跡」の5箇所について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査を行いました。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が文化財保護に深い关心をもち、記録保存に努力していることを理解いただけることを期待するものであります。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成7年3月1日

建設省倉吉工事事務所

濱 谷 武 治

例　　言

1. 本報告書は、「一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査」に伴い1994年度に実施された米子市尾高に所在する尾高御建山遺跡（4区）、尾高15・16・37号墳、尾高1号横穴墓（これらは当初「尾高所在遺跡」と呼称した遺跡である）の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 今回の調査では、從来確認されていなかった古墳1基・横穴墓1基が確認された。それぞれ「尾高37号墳」・「尾高1号横穴墓」の名称を与えて報告する。
3. 発掘調査は、建設省倉吉工事事務所の委託により財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財調査事務所が行った。
4. 本報告書で使用した方位は真北、標高は海拔標高である。
5. 本報告書に記載の地形図は、國土地理院発行の5万分の1地形図「米子」の一部を使用した。
6. 本報告書の作成は、調査員の討議に基づいて執筆・編集を行った。担当調査員は山田・鬼頭である。
挿図の内、遺構実測は調査員が行った。
遺物の実測・浮写は鳥取県埋蔵文化財センター及び西部埋蔵文化財調査事務所で行った。
遺構・遺物写真は山田・鬼頭が行った。
7. 出土遺物・図面等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来米子市教育委員会へ移管する予定である。
8. 尾高1号横穴墓出土の人骨の鑑定は鳥取大学医学部教授の井上貴先先生にお願いした。
9. 尾高御建山遺跡のプランツ・オバール分析は古環境研究所にお願いした。
10. 現地調査及び報告書作成にあたって下記の方々に助言・指導を頂いた。（敬称略、五十音順）

井上　貴央　岩田　文章　遠藤　和子　北浦　弘人　熊谷　朗　志田　睦
下高　瑞哉　杉田千津子　塚田　文子　中原　齊　中山　寧人　西尾　克巳
西川　徹　松田　潔　松林　隆裕　松本　哲　山川　茂樹　山崎　裕子
湯村　功　米田　規人

会見町教育委員会　津市教育委員会　淀江町教育委員会　米子教育委員会

凡　　例

1. 調査区には、10m×10mグリッドを設定した。任意の基準点より南北・東西のラインで10m毎の割り付けを行い、南北ラインをアラビア数字、東西ラインをアルファベットで表し、該当グリッドの北西隅交点を、そのグリッド名とした。
2. 本報告書における遺構記号・遺物記号は下記のように表す。
S A : 柱列　S B : 挖立柱建物跡　S D : 溝状遺構　S K : 土坑　S X : 墓葬施設・埋葬関連遺構
P o : 土器・土製品　S : 石器　F : 鉄製品　E : 耳環
3. 遺構挿図中におけるセクション・エレベーションの基準線標高は「H =」の記号で表記する。
4. 遺構図中の破線で表現した輪郭線は推定線である。
5. 落し穴の遺構図においては、杭痕跡の輪郭線を赤色で表記する。
6. 土器実測図内の須恵器は断面黒塗で、それ以外のものは断面白抜きで表した。
7. 遺物観察表中の①～⑧は以下の数値を示す。なお、数値の後の△は復元値、△は残存値である。
①口径　②器高　③最大径　④底部径　⑤脚径　⑥長さ　⑦幅　⑧穴径
8. 遺物観察表の備考欄の略号は、実測担当者を示す。

目 次

序
序文
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯—	
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	2
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 尾高御建山造跡遺跡の調査	
第1節 土坑	10
第2節 清状造構・据立柱建物跡・棚状造構	14
第3節 北側谷部の調査	17
第4章 尾高古墳群	
第1節 尾高15号墳	18
第2節 尾高16号墳	19
第3節 尾高37号墳	21
第5章 尾高1号横穴墓	
第1節 尾高1号横穴墓	22
第2節 テラス状造構	25
第3節 SX-6	26
第6章 まとめ	27
遺物観察表	31
挿図 1 尾高御建山造跡位置図	9
挿図 2 尾高御建山造跡遺構全体図	10
挿図 3 周辺遺跡分布図	12
挿図 4 ~ 25 遺構図	38
挿図 16 ~ 33 遺物実測図	63
図版 1 ~ 14 遺構	71
図版 15 ~ 22 遺物	86
遺構一覧表	95

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

鳥取県西部地域における一般国道9号米子道路工事に伴い、埋蔵文化財発掘調査が西部埋蔵文化財調査事務所によって平成2年度から開始された。平成2～4年度の西伯郡淀江町の福岡遺跡、平成3・4年度の西伯郡淀江町の井手跡遺跡、平成4年度の西伯郡淀江町の今津塚田遺跡、平成5年度の西伯郡淀江町の大下畠遺跡、米子市の泉中峰遺跡、泉前田遺跡、平成6年度の西伯郡淀江町の百塚第5遺跡、百塚第7遺跡(8区)、泉上経前遺跡、小波狭間谷遺跡の調査が実施されている。

一般国道9号米子道路のルートにあたる米子市尾高地内には周知の遺跡である尾高古墳群が含まれるうえ、平成2年度に米子市教育委員会が実施した試掘調査によって遺跡の存在が予想された。そのため、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所は鳥取県教育委員会文化課と協議し、財團法人鳥取県教育文化財団が記録保存のための発掘調査の委託を受け、西部埋蔵文化財調査事務所が調査を担当し、平成4年度に1・2区、平成5年度に3区の調査を行った。今年度は前2年の調査区から谷を狭んだ南側の丘陵にあたる4区を調査した。

第2節 調査の経緯と方法

今年度の調査対象面積は、5,666m²であり、平成5年4月より発掘調査に着手した。

まず、遺構の広がりと土層を確認するため北側谷部と台地平坦面、南側谷部に計23本のトレントを設定し掘り下げた。その後、北側谷部・南側谷部・台地平坦面は、重機による表土はぎを行った。一方、尾根斜面には、16号墳の墳頂から尾根の裾まで、東西にわたるベルトを設定し、それに直交する南北ベルトを5本設定、ベルトの脇をトレントとして掘り下げ、土層観察・遺構確認を行いつつ人力による表土はぎを進めていった。表土はぎ終了後に業者委託による、10m×10mグリッドの設定を行った。5月下旬から6月にかけて、尾根斜面に横穴墓及び横穴墓に伴うテラス状遺構が存在することを確認し、横穴墓前部の調査後、7月に開口した。

以後、横穴墓の調査と並行しつつ、台地平坦面の精査・遺構検出を行う。横穴墓に関しては、周囲にも存在する可能性を考え尾根北側及び南側斜面を精査したが、結局1基しか存在しなかった。

11月頃から尾高16号墳の調査を開始し、最終的に調査が終了したのは12月27日である。

また、現地説明会は12月17日に実施し、約50人の参加を得た。

調査後、業者委託によって調査区全体の航空写真撮影と調査区全体の地形測量を行った。最終的に調査した面積は5,274m²である。

第3節 調査体制

○調査主体 財團法人鳥取県教育文化財団

理事長	西尾邑次(鳥取県知事)
副理事長兼常務理事	入江圭司
事務局長	若松良雄
財團法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター	
所長	大和谷朝(鳥取県教育委員会文化課課長)
次長	八木谷昇
庶務係	
係長	梅山昭美(鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長)
主任事務職員	木下利雄
事務	鷲村八重子
調査指導係	
係長	田中弘道(鳥取県埋蔵文化財センター次長)
文化財主事	久保穰二朗(" 職員)
"	長岡充展(")
"	山桜雅美(")

○調査担当 財團法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財調査事務所

所長	松尾忠一
主任調査員	原田雅弘
調査員	谷村憲一 山田真一 仲田信一 家塙英詞 鬼頭紀子
調査補助員	橋口友枝
測量補助	左藤博

○整理作業参加者

石橋公子 稲垣美智江 植木恵子 表明美 金川知恵 猪野仁女 黒見まゆみ 小山菜穂子 佐竹裕子
塙谷和子 清水房子 武永裕美 田中和子 田中園子 中原千恵 南壽孝子 西村薰子 野崎悦子
福田努千代 松岡朋子 松本みどり 山添美喜 山本清子 山本久美恵 山本博子 米澤しのぶ 米山麻紀

○調査指導 鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 米子市 米子市教育委員会

○下記の方々に発掘調査作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。

秋里登志子 石門安定 宇那手章 小川哲 加藤智恵子 門田正美 川口比佐夫 木下恒代 佐伯進
佐藤公子 清水積三 下本愛子 田中セキ子 鹿児無克子 中本貞子 野口希八郎 東都枝 千村澄子
平井節子 松下和枝 三宅武 安田貞則 山崎博 山根謙 米原美恵子

(敬称略 五十音順)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

鳥取県

鳥取県は本州の西部、中国地方の北東部に位置し、北は日本海、東は兵庫県、西は島根県、南は岡山県・広島県と接する。中国地方は標高1,200mを越える中国山地を境として、日本海に面する山陰地方と、瀬戸内海に面する山陽地方に分けられる。両者の違いは特に冬に顕著である。冬でも比較的晴れて温暖な山陽地方に対して、山陰地方では曇り空が続き雪がかなり積もる。鳥取県はこのような山陰地方に属している。鳥取県は、古代東部は因幡国（現在の鳥取市・気高郡・八頭郡・岩美郡）、西部は伯耆国（現在の倉吉市・東伯郡・西伯郡・米子市・境港市・日野郡）の二国に分かれていた。現在は、鳥取市を中心とする東部、倉吉市を中心とする中部、米子市・境港市などからなる西部に分けられる。各地域とも地勢は山がちで、林野が県総面積の80%近くを占める。それぞれの地域には、千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）の県下を代表する河川が流れ、その下流域には、全国的に有名な鳥取砂丘をはじめとして、河川によって運ばれた多量の砂により大小の砂丘・砂州が発達している。

現在、鳥取県は4市を含めた39市町村により構成されており、人口615,660人（平成6年12月1日現在）、東西126km、南北61.85km、面積3506.96km²である。

淀江町

淀江町は、中国山地最高峰を誇る大山（標高1,711m）の北西麓に広がる淀江平野を中心とした日本海に面した町であり、東を大山町、西を米子市に接している。地形を見ると大山町との境界に孝堂山（標高751.4m）、町西部の平野中に壺瓶山（標高113.7m）があり、宇田川水系の作用によりこれらの山麓には段丘が発達している。また、環境庁名水100選に指定された「天の真名井」、因伯の名水「本宮の泉」などの天然の湧き水が豊富なことも淀江町の特質の一つになっている。淀江町は、人口9,230人（平成6年12月1日現在）、東西8.2km、南北6.1km、面積25.74km²である。

米子市

米子市は、鳥取県の西部に位置している。地形は、中国山地より流れ出た日野川によって形成された米子平野、日野川と合流する法勝寺川流域に形成された法勝寺平野などの沖積平野が基本となっているが、東方には大山から続く台地状の山麓が広がっている。海岸部は、弓ヶ浜半島のような砂州が広がり、特徴ある地形を形成している。米子市は、人口133,607人（平成6年12月1日現在）、面積99.46km²である。

調査地域

調査地域の米子市尾高は、米子市と東側にある淀江町の境界近くに位置し、大山山麓からのびる台地が米子平野と接する地点に位置する。ここは平野部に広がる水田との比高差約20mの台地となっており、遺跡の中心となる平坦面の標高は34m前後である。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

大山山麓一帯を中心としていくつかの旧石器が発見されている。泉中峰遺跡出土のナイフ形石器、淀江町小波出土の東山・杉久保型系統の黒曜石製ナイフ形石器、溝口町長山第1遺跡出土の細石刃（マイクロ・ブレイド）などが発見されている。旧石器時代～縄文時代草創期とされる有舌尖頭器は、黒曜石製が淀江町中西尾から、サヌカイト製のものが米子市奈良良遺跡、会見町諸木遺跡、岸本町貝田原遺跡をはじめ大山町の坊領や莊田地区、名和町の東坪、門前などでも発見されている。しかし、米子市、淀江町に限らず、鳥取県内には旧石器時代の遺構とされるものは発見されていない。

縄文時代

鳥取県内から草創期の土器は発見されていない。しかし、大山山麓で有舌尖頭器が出土していることを考えると、今後この時代の遺構・遺物が発見される可能性も高いであろう。

早期のものは、大山山麓を中心に押型文土器を伴う遺跡が発見されている。米子市の上福万遺跡では多くの土坑や配石墓と考えられる集石が発見されている。土器や石器もたくさん見つかっており、早期の拠点的な遺跡となっている。尾高御建山遺跡の1区・2区(1992年度調査)からも若干の押型文土器が出土している。

前期になると遺跡も増えてくる。前期から中期を中心とする米子市の目久美遺跡からはドングリを蓄えた貯蔵穴がたくさん検出されている。陰田遺跡からは人為的な痕跡の残るたくさんの獸骨が見つかっている。淀江町の附ケ口遺跡⁽¹⁾からは、爪形文土器、条痕文土器、九州の特徴的な曾畠式土器に類似するものなどが検出されており注目される。

中期に新たに始まる遺跡は、米子市、淀江町ともに見つかっていない。

後期から晩期のものとしては、200基以上の落し穴が発見された米子市の青木遺跡がある。また、淀江町の河原田遺跡からは、磨消縄文土器、沈稼文土器、無文土器などがたくさん検出された。井手駒遺跡⁽²⁾では、河川跡から西日本では珍しい朱漆塗りの結齒式櫛や木胎耳栓が出土し注目される。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡に比べると確認されているものが多い。

前期の遺跡には、米子市の目久美遺跡、口陰田遺跡、勝田遺跡や淀江町の今津岸の上遺跡⁽³⁾などがある。目久美遺跡は、前期から中期にかけての低湿地遺跡であり、3層の水田跡と多くの木製農具が見つかった。今津岸の上遺跡は、長径約135mと推定されるV字状の環濠をもつ集落跡であり、弥生時代の集落形成を知る上で重要な遺跡である。

中期の遺跡には、米子市の青木遺跡、福市遺跡、淀江町の坂田遺跡、角田遺跡⁽¹⁾、福岡遺跡などがある。青木遺跡、福市遺跡は後期以降も続く大規模集落跡である。角田遺跡では、太陽・舟・舟を漕ぐ人・建物2棟・樹木、鹿が描かれた線刻絵画土器が出土した。福岡遺跡では200基以上の粘土探掘坑が見つかった。

後期のものは、米子市の池ノ内遺跡、陰田第1遺跡、尾高浅山遺跡、淀江町の井手狭遺跡、坂ノ上遺跡などがある。池ノ内遺跡では古墳時代後期までの5面の水田跡が見つかった。尾高浅山遺跡は、一部3重の環濠がめぐる集落と四隅突出型埴丘墓が近接して存在する遺跡である。尾高浅山遺跡の近くには、四隅突出型埴丘墓を含む弥生時代から古墳時代にかけての埴丘群が出土した日下遺跡がある。井手狭遺跡、坂ノ上遺跡は集落跡である。

古墳時代

米子市、淀江町における前期古墳の様相は明確でない。

前期古墳は、米子市では石州府29号墳、日原6号墳などが存在する。数多く存在する方墳は前期のものが多いと考えられており、特徴的である。淀江町内では前期古墳は見つかっていない。

中期のものは、米子市の陰田41号墳、宗像41号墳などが知られている。淀江町では、中期後半の古墳として、上ノ山古墳、向山3号墳が知られているが、近年の発掘調査により井手挾3号墳もこの時期に属することが確認されている。この井手挾3号墳からは、円筒埴輪、形象埴輪が多数出土しており、なかでも形象埴輪の「盾持人」の出土例は西日本では比較的少なく、一括出土については群馬県の保渡田第3遺跡においてのみとされている。

後期になると、多くの群集墳が形成される。米子市の尾高古墳群、石州府古墳群、東宗像古墳群、宗像古墳群などの群集墳が米子平野を取り囲むように、淀江町の中間古墳群、百塚古墳群、向山古墳群などが淀江平野を取り囲むように形成され、向山4号墳、長者ヶ平古墳、岩屋古墳、小桜山12号墳、石馬谷古墳といった大型前方後円墳が築かれている。向山古墳群は独立丘陵上にあり前方後円墳8基と方墳1基からなり、このうち、岩屋古墳は切石積の横穴式石室をもち、人物や水鳥などの形象埴輪が出土した。長者ヶ平古墳⁽⁴⁾は割石小口積みで両袖式を呈し全長10.3mの横穴式石室をもつ。付随する箱式石棺からは県内唯一の金銅製冠が出土している。これらの古墳は6～7世紀にかけて築かれたとされている。

石馬谷古墳出土といわれている石馬は本州で唯一の例であり、福岡県の岩戸山古墳例との関連性が考えられているものである。終末期の曉田山31号墳では舟形の線刻がある扉石が発見された。

古墳時代の集落跡としては、弥生時代後期から古墳時代前期にわたる百塚第1遺跡⁽⁵⁾、井手挾遺跡があり、中期には百塚第1遺跡、百塚第4遺跡、百塚第5遺跡、百塚第6遺跡がある。この時期の百塚第1遺跡は、堅穴住居間に掘立柱建物をもつ集落であることが発掘調査により確認されている。また、後期には、福輪遺跡、百塚第1遺跡、百塚第4遺跡、百塚第5遺跡等がある。

歴史時代

律令制の施行により、現在の鳥取県域は、西側の伯耆国と東側の因幡国という二つの国に編成される。伯耆国は6郡よりなるが、現在の米子市、淀江町は会見郡から汎入郡にかけて該当する。会見郡衙は、圃場整備とともに調査が行われ、掘立柱建物と焼米が見つかった岸本町の長者屋敷遺跡であろうと考えられている。汎入郡の郡衙と思われる遺跡は見つかっていない。

白鳳時代になると、寺院の建立が始まる。代表する遺跡としては上淀庵寺⁽⁶⁾をあげることができる。上淀庵寺からは、最近の調査により彩色壁画が出土した。白鳳期彩色仏教壁画は法隆寺金堂壁画に次いで2例目であり、発掘調査によって出土したのは初めてである。さらに、伽藍配置では南北に瓦積基壇が近接して2塔並び、その北側には基壇はないがもう一つの心礎が見つかり、三つの塔心礎が南北に並ぶ特異な伽藍配置をしていたことが明らかとなった。上淀庵寺の北側には慈利遺跡⁽¹⁾が存在する。この遺跡は銀冶場跡と考えられているが、布目瓦、鷗尾瓦、彩釉陶器、石帯などの破片が出土しており、上淀庵寺との関係が注目されている。

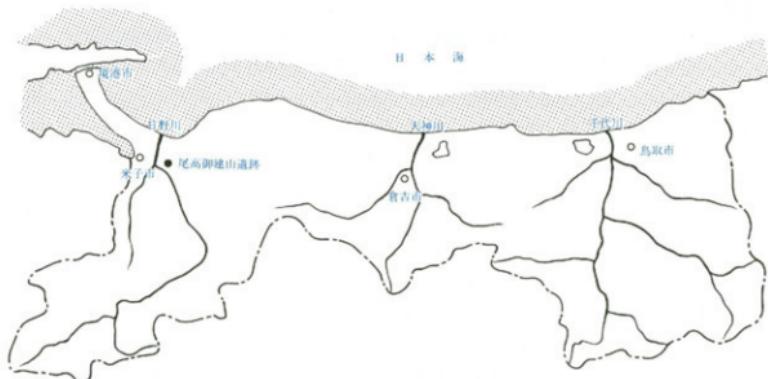
中世城館としては、米子市尾高城、河岡城、淀江町小波城、淀江城、福吉城、香原山城などが文献に現れる。米子市尾高地域は、山陰道と山陽道に抜ける日野道との分岐点に位置し、伯耆西部の交通・流通の要衝であったため、尾高城の争奪をかけて尼子・毛利両氏が幾度もの激戦を繰り広げた。尾高城は、大山山麓の入り組んだ谷と丘陵を巧みに利用し、空堀と土塁で守られた八つの主要な郭を連ねる構造である。これに対し、淀江町内にあったとされる城とは甚のようなものであったと考えられているが、未だ正確な位置は特定されておらず不明な点が多い。しかし、1333年の後醍醐天皇の體験脱出に関連する名和長年と隱岐国守護佐々木清高による小波城の攻防戦をはじめとして、「大永の五月崩れ」として知られる1524年の尼子経久の伯耆への侵入に際しては山名氏方であった淀江城が陥落、1569年には尼子氏と毛利氏による淀江城・福吉城を巡っての争いなどが起こったことなどが文献に残されている。

江戸時代になると、吉川広家によって築城が始まっていた米子城を中村一忠が完成させ、1601年、米子城に中村一忠が移ると尾高城は廃城となる。その後、米子城は鳥取藩の支城として存続したが、明治になって廃城となってしまった。

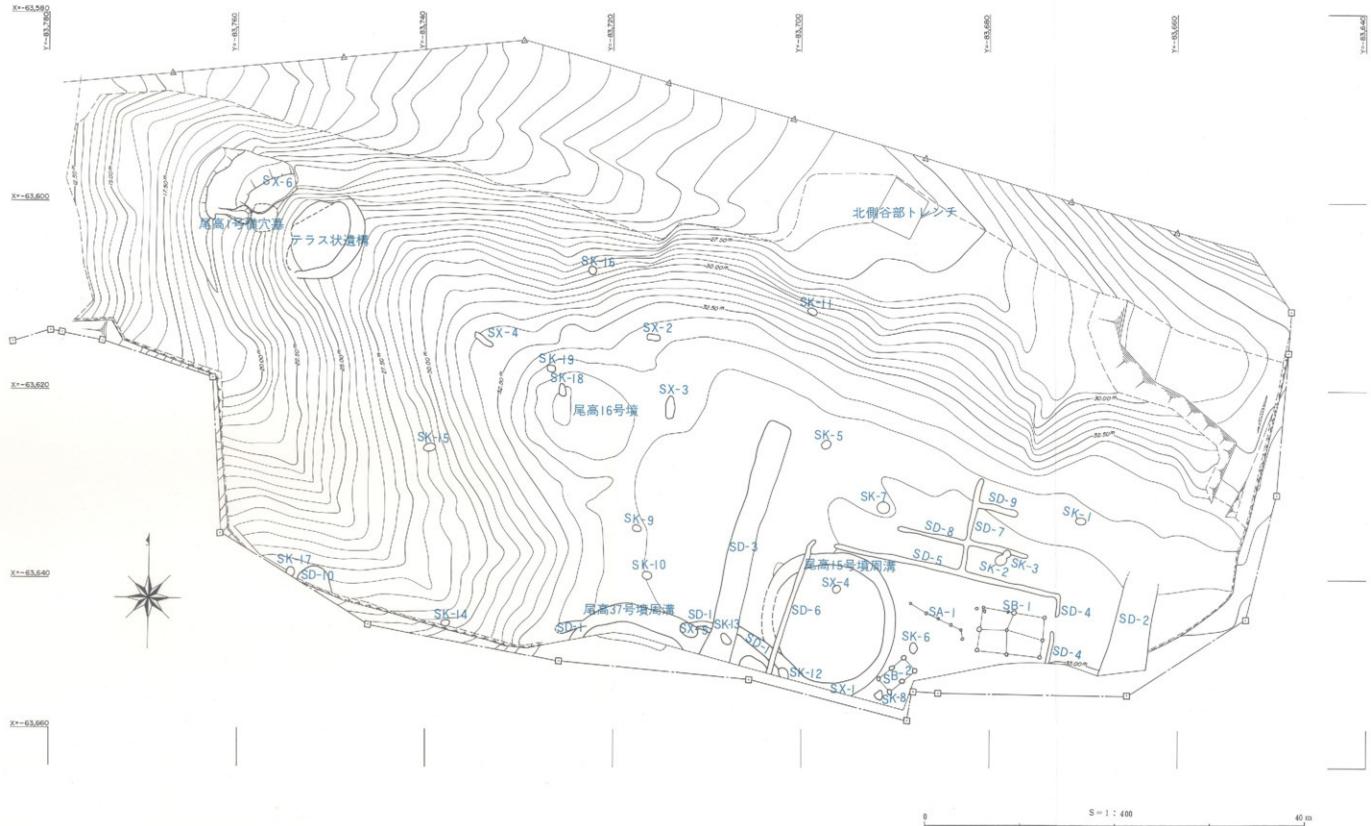
本地域周辺は、明治9年に島根県に編入されたが、明治14年に再編入されて現在に至っている。

註

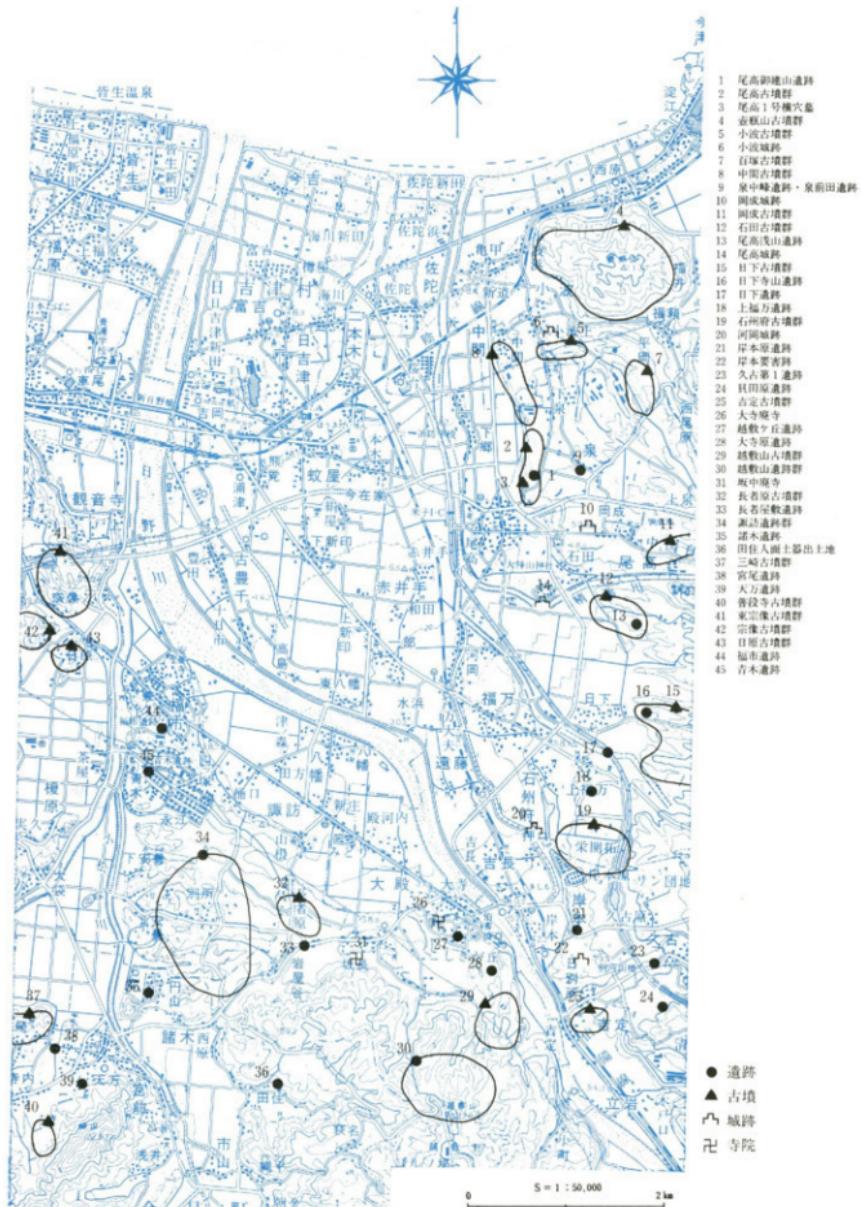
- (1) 『宇田川』 淀江町教育委員会 1981年
- (2) 『井手跡遺跡』 烏取県教育文化財団 1993年
- (3) 『淀江町内発掘調査報告書Ⅰ』 淀江町教育委員会 1990年
- (4) 『向山古墳群』 淀江町教育委員会 1990年
- (5) 『百塚53・105・106・107号墳、百塚第1遺跡、原田遺跡発掘調査報告書』 淀江町教育委員会 1981年
- (6) 『上淀庵寺Ⅲ』 淀江町教育委員会 1993年



挿図1 遺跡位置図



挿図2 尾高御建山遺跡（4区）遺構全体図



插図3 周辺遺跡分布図

第3章 尾高御建山遺跡の調査

第1節 土坑（挿図4～9）

今年度の調査区からは、土坑が総計19基検出された。以下、その内容について報告する。

S K - 1

位 置 台地平坦面に位置する。

形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸118cm・短軸64cm、底面で長軸107cm・短軸54cm、深さ30cmを測る。底面にはほぼ中央にピット（以下、底面ピットと称する）を持ち、その径は23cm・深さ20cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K - 2

位 置 台地平坦面に位置する。

形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸115cm・短軸86cm、底面で長軸79cm・短軸46cm、深さ108cmを測る。底面ピットを持ち、その径は19cm・深さ21cmを測る。SK-3と重複している。両者の形態及び埋土は、ほぼ同じであり、切り合い関係は明らかにできなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K - 3

位 置 台地平坦面に位置する。

形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸75cm・短軸60cm、底面で長軸59cm・短軸48cm、深さ93cmを測る。底面ピットを持ち、その径は19cm・深さ25cmを測る。SK-2と重複し、SD-8を切るかたちで検出された。SD-8との切り合い関係は、SD-8の項で述べる。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K - 4

位 置 台地平坦面に位置する。

形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸90cm・短軸72cm、底面で長軸68cm・短軸40cm、深さ135cmを測る。底面ピットを持ち、その径は21cm・深さ26cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K - 5

位 置 台地平坦面に位置する。

形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸88cm・短軸61cm、底面で長軸75cm・短軸30cm、深さ98cmを測る。底面ピットを持ち、その径は13cm・深さ11cmを測る。底面ピット上端部で礫を1個検出した。また、土坑底面付近で粘質土層（⑦・⑧・⑨層）を確認している。これらの疊及び粘質土は、杭の固定材として機能したものと考えられる。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K - 6

位 置 台地平坦面に位置する。

形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸 105 cm・短軸55cm、底面で長軸78cm・短軸41cm、深さ69cmを測る。底面ピットを持ち、その径は25cm、深さ22cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K - 7

位 置 台地平坦面に位置する。

形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸 116 cm・短軸88cm、底面で長軸 134 cm・短軸70cm、深さ 102 cmを測る。底面ピットを持たず、袋状を呈する。

性 格 埋土、形態より落し穴と考える。

S K - 8

位 置 台地平坦面に位置する。

形 態 平面形は歪んだ楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸 101 cm・短軸88cm、底面で長軸57cm・短軸30cm、深さ 104 cmを測る。底面ピットを持ち、その径13cm、深さ20cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K - 9

位 置 台地平坦面縁端部に位置する。

形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸90cm・短軸64cm、底面で長軸59cm・短軸40cm、深さ76cmを測る。底面ピットを持ち、その径は25cm、深さ10cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K - 10

位 置 台地平坦面縁端部に位置する。

形 態 平面形は円形を呈する。規模は検出面で最大径96cm、底面の最大径42cmを測る。底面ピットは持たない。

性 格 埋土、形態より落し穴と考える。

S K - 11

位 置 台地北側斜面に位置する。

形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸94cm・短軸65cm、底面で長軸59cm・短軸47cm、深さ 94cmを測る。底面ピットを持ち、その径は20cm、深さ 94cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K - 12

位 置 台地平坦面に位置する。S D - 1と一部重複し、1／3は調査区外にかかるため未検出である。

形 態 調査区内の形態より平面形は隅丸長方形と考えられる。規模は、検出面での推定長軸約 100 cm・短軸52

cm、底面の推定長軸約90cm・短軸42cm、深さ81cmを測る。底面ピットを持ち、その径26cm・深さ12cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K -13

位 置 台地平坦面に位置する。S D - 3 の床面から検出された。

形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸 104 cm・短軸66cm、底面で長軸84cm・短軸50cmを測る。底面ピットを持ち、その径は26cm、深さ35cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K -14

位 置 南側谷部に位置する。

形 態 土坑は堆積土から掘られており、地山面では底部付近しか検出できなかった。平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸 125 cm・短軸79cm、底面で長軸61cm・短軸33cm、深さ93cmを測る。底面ピットを持ち、その径23cm、深さ36cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K -15

位 置 南側谷部に位置する。

形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸90cm・短軸54cm、底面で長軸56cm・短軸28cm、深さ38cmを測る。底面ピットを持ち、その径18cm、深さ25cmを測る。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

S K -16

位 置 尾根北側斜面に位置する。

形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸92cm・短軸54cm、底面で長軸63cm・短軸42cm、深さ62cmを測る。不定形の底面ピットを持ち、その長軸は30cm、深さ47cmを測る。底面ピットは2段掘りになっている。下段の掘り込みは、径 4 cm、深さ27cmを測り、杭 1 本がちょうどはめ込まれる程度の規模である。底面ピットの上段からは 4 つの杭痕跡を確認した。各規模は、a 径 9 cm・深さ30cm、b 径 9 cm・深さ12cm、c 径 6 cm・深さ26cm、d 径 7 cm・深さ27cmである。下段のピットには直接杭を立て、上段には、杭を 4 本立てたのちに粘質土でピット内を埋めて杭を固定したものと考えられる。

性 格 底面ピット及び杭痕跡の存在より落し穴と考えられる。

S K -17

位 置 南側谷部に位置する。1/4は調査区外にかかるために未検出である。

形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で推定長軸約 100 cm・短軸約70cm、底面での推定長軸約80cm・短軸約50cm、深さ54cmを測る。底面ピットは持たない。

性 格 埋土、形態より落し穴と考える。

S K -18

- 位 置 台地平坦面縁端部に位置する。尾高16号墳の墳丘下より検出された。
- 形 態 平面形は長方形を呈する。規模は、検出面で長軸 126 cm・短軸52cm、底面で長軸 119 cm・短軸44cm、深さ 58cmを測る。
- 性 格 埋土、形態より落し穴と考える。

S K -19

- 位 置 台地平坦面縁端部に位置する。尾高16号墳の墳丘下より検出された。
- 形 態 平面形は長方形を呈する。規模は、検出面で長軸76cm・短軸59cm、底面で長軸58cm・短軸40cm、深さは 120 cmを測る。底面ピットを持ち、その径15cm、深さ33cmを測る。
- 性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

第2節 溝状遺構・掘立柱建物跡・柵状遺構

台地平坦面には、複数の溝状遺構が複雑に切り合うかたちで確認された。その多くは、時期・性格等を明瞭にする資料に欠けるものであったが、SD-1からは多数の弥生土器が検出されており、環濠の可能性の考えられる資料として注目できる。以下、各遺構について報告する。

溝状遺構 SD-1 (挿図10)

台地平坦面に位置する。調査区の南端にあたるため、遺構の北側の一部を検出したにとどまっている。また、SD-3・SD-6・尾高15号墳・同37号墳の周溝と一部重複している。特に、尾高37号墳周溝とは重複部分が多く、溝はこの周溝によって分断されている。

検出された部分は遺構全体のごく一部なので全体像は不明だが、平面形は緩やかな環を描くように調査区外へ広がってゆくものと推定する。検出された溝の長さは約30mほどである。溝の検出面での最大幅は調査区南端近くで1.6m、底面の最大幅0.4m、最小幅0.15m、深さは最深部で0.52mを測る。西側に向かって除々に浅くなり、台地平坦面の尖端で途切れている。断面は底の平らなV字形を呈している。遺構の上面はかなり削平を受けていると思われる。

土層断面観察から、SD-1は重複する他の遺構よりも古い時期に構築されたものであることがわかる。

遺物としては、弥生土器が出土している。特に溝の西側部分(台地平坦面突端付近)に遺存状況の比較的良好な壺・甕等が集中していた。壺(Po1)は赤橙茶褐色を呈し、頸部に3条の平行沈線を持つ。また、甕(Po2)は淡黄茶褐色を呈し肩部に4条の平行沈線を持つ。いずれも、床面近くからの出土であり、他の時代の遺物を含まないことから時代決定の資料とみなしえるものであり、これらの遺物からSD-1の時期を弥生時代前期末と考える。

溝の性格としては、その形態・出土遺物から弥生時代の環濠の可能性が考えられる。

溝状遺構 SD-2 (挿図11)

台地平坦面の調査区東端付近に位置する。ほぼ南北方向に主軸をとり、南側は調査区外までのびている。

検出された溝の規模は、南北方向の長さ10.0m、幅は検出面で3.5～4.0m・底面で3.3m、深さは最深部で0.4mを測る。断面形は逆台形を呈する。ほぼ同じ幅を保って南北にのびており、北へ向かって除々に浅くなり消えてゆく。溝の上部はかなり削平されたものと考えられる。

遺物は、多量の土器片(弥生時代後期前葉～古墳時代前期の弥生土器及び土師器片)が出土した。特に古墳時代前期の壺の複合口縁部を多量検出している。その他に石器1点が出土している。

遺物は床面近くからの出土もみられるが、時期幅が認められるため、流れ込みの可能性が高い。従って、これらの遺物が溝の構築された時期を直接示しているかどうかは不明である。

性格についてはSD-4～9の項で述べる。

溝状遺構 SD-3 (挿図12)

台地平坦面の西側に位置する。SD-2と平行して南北方向に走る。南側部分でSD-1・尾高37号墳の周溝と重複しており、調査区外へと続いている。

溝の規模は、南北方向の長さ26m、幅は検出面で3.0m・底面で2.6m、深さ0.1～0.2mである。断面形は逆台形を呈する。ほぼ同じ幅を保って南北にのび、北側で終している。

遺物は、SD-2とほぼ同時期である弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が出土しているが、SD-2に比

べかなり量は少ない。SD-2の項で述べたように、これらの遺物が溝の構築時期を直接示しているかは不明である。土層断面観察からは、SD-3はSD-1の構築された後に作られたものと判断できるが、37号埴周溝との切り合い関係は、両者の埋土が非常に似通っていたため、明確に識別できなかった。

溝の性格についてはSD-4~9の項で述べる。

溝状遺構 SD-4~9 (挿図13)

台地平坦面にめぐらされた複数の溝からなる遺構である。今回の調査では、6本の溝を確認したが、南側は調査地外にまで及んでおり、台地平坦部の広い範囲を占める遺構と考えられる。遺構は、平坦面をコの字状に囲むように位置する南北方向2本の溝（東側に位置するものがSD-4、西側のものがSD-6）と東西方向1本の溝（SD-5）、SD-5の中央近くから北に向かって延びる溝（SD-7）、SD-7に直交する2本の溝（南側に位置するものからSD-8・SD-9）とで構成される。以下、個々の溝について報告したのち、遺構全体についての記載を行う。

SD-4は、南側は調査地外に続いているために北側の部分を調査したのみであるが、調査した部分は長さ7.50m、幅0.40m、深さは南側で0.25mを測る。溝の北端から南に向かって2.40~4.00mの部分は、溝が途切れおり、この間1.60mにはもともと溝は掘られていないかったと思われる。溝の底面からは2基のビットが検出された。両者は掘り方・規模に違いがあり、南側のものは直径24cm・深さ6cm、北側のものは長径70cm・深さ40cmを測る。

SD-5は、SD-4の北端から西方に向かって延びる溝で、長さ24.80mにわたって検出された。SD-5の西端からSD-6の北端までは2.80mの距離があり、この部分は先のSD-4と同様に、溝が本来存在しなかったものと考えられる。幅は0.40~0.70m、深さは中央部分が最も深く掘られており、最深部で0.65mを測る。遺構を構成する6本の溝の中では最も深く掘られている。溝の底面からは、11基のビットが一列に並ぶ形で検出された。ビットは直径30cmの円形のものから長径75cmの楕円形のものまでみられるが、35~60cmの円形のものが一般的である。また、溝の西寄りの位置からは、12~25cmの礫7個からなる集石が確認された。溝との関連については即断はできないが、礫は溝の底面にほぼ接して置かれており、両者は関連するものである可能性がある。

SD-6は、南側が調査地外に及んでいるため、北側の14.80mを調査した。幅は0.60m、深さは0.20m程度であるが、これは上面が削平されているため、レベル的にみて、本来はSD-5とほぼ同じ深さに掘られていたものと思われる。底面からは3基のビットが検出された。小さいものは直径15cm・深さ15cm、大きいものは長径60cm・深さ20cmを測る。溝の北側で尾高15号埴周溝、南側で弥生溝SD-1と切り合っている。これらとの前後関係については後述する。

SD-7は、SD-5からさらに北に延びる溝で、9.60mの長さが検出されている。北側は地山が削平されているため、本来は台地平坦面の縁辺あたりまで存在していたと考えられる。幅は0.44m・深さ0.03mで、接続しているSD-5よりも0.40mも浅くなる。

SD-8は、SD-7に直交する溝で、長さ14.20m、幅0.24m、深さ0.10mを測る。周辺地形の削平を考えると、本来はいずれの数値もさらに大きくなると考えられる。溝の底部は、南側半分と北側半分で段差があり、南側の方が約4cm程高くなっている。この南側部分には、7基のビットが一列に並んで掘られている。ビットの規模は、直径20~36cm、深さ5~15cmである。また、遺構の東寄りの部分でSK-3と重複している。両者の前後関係については後述する。

SD-9は、SD-7の東側に長さ11.00m・幅0.80m・深さ0.05mを確認した。この辺りは周辺地形の削平が著しく、本来SD-7の西側にまで溝が存在していたかどうかは不明である。

以上、個々の溝について報告を行った。ここからは、SD-4~9をひとつの遺構と考えて、時期・性格につ

いて報告する。

遺物の出土は少なく、SD-5から土器片が数点出土したのみである。いずれも土師器の細片で、口縁部の残っているPo1・Po2は、ともに古墳時代前期に属するものと考えられる。しかし遺物はいずれも堆積埋土の中に流入した状態で出土しており、時期決定の資料には適さないと考える。

次に他の遺構との重複関係について記載する。SD-6は、弥生時代の溝SD-1、填丘を完全に失った尾高15号墳と重複している。SD-4～9の埋土は、黒灰褐色土に黄茶褐色粘質土ブロックを多く含むのが特徴で、他の遺構との埋土の識別は比較的容易である。その結果、SD-6は明らかにSD-1、尾高15号墳を切る形で掘り込まれており、このことからSD-6は、尾高15号墳の填丘が完全に消失した後に掘られたものと判断できる。次に、SD-8は土坑SK-3と重複しており、SK-3がSD-8を切って掘られている。SK-3は、底面にピットをもつ狩猟用の落し穴と考えられるものであり、一般にこの種の落し穴は繩文時代のものといわれている。従って、SD-8がSK-3よりも古くなることには疑問を感じるが、埋土の平面・断面観察からはこのような結果が得られた。

遺構の性格についてあるが、SD-1・5・6・8の底面には、柱穴と思われるピットが一列に並んで存在しているのが認められた。このことから、台地平坦面を囲むように築かれた柵状あるいは塀状の施設の存在が想定される。またSD-4・5には、溝が中断している部分があるが、この部分が出口として使用されていた可能性がある。ただし遺構は調査地外にまで広がっており、全容が明らかになっていない現時点では、その可能性を指摘するにとどめたい。

最後にSD-2・3との関係について触れておく。SD-2は、SD-4の東方5.8mに位置し、その走向方向はSD-4とはほぼ同じである。同様に、遺構西側のSD-3はSD-6とはほぼ同方向を向き、その間隔は約6.0mで、SD-2とSD-4の距離に極めて近い。このことから、SD-2・3はSD-4～9の遺構と関連する可能性が指摘できる。その場合、SD-2・3はその位置関係から、SD-4～9の外側を区画する溝といった性格が考えられるが、詳細は不明である。

掘立柱建物跡 SB-1 (挿図14)

台地平坦面、先のSD-4～6に囲まれた区域内に位置する、2間×2間の掘立柱建物跡である。柱穴の並ぶ方向は、SD-4～6の走向とはほぼ同じである。特に東側梁はSD-4と沿っており、その北端はSD-4の途切れている部分から1mほど中に入ったところにある。主柱穴は9基あり、最大のもので直径40cm、深さ25cmを測る。建物全体の規模は桁行2間7.0m・梁行2間4.4mである。

遺構から遺物の出土はみなかったが、上述したSD-4との位置関係から、SD-4～9と関連する施設である可能性が考えられる。しかし両遺構を直接関連づける証拠に乏しく、詳細は不明である。

掘立柱建物跡 SB-2 (挿図15)

SB-1と同様にSD-4～6によって囲まれた区域内に位置する。6基のピットからなる2間×1間の掘立柱建物跡である。SB-1からは西南西約8mの位置にある。方向は桁の主軸を北東～南西に置き、SB-1とはほぼ45度ずれる。ピットは直径約50cm・深さは約30～40cmで、SB-1よりも大型でしっかりと掘り込まれている。建物跡全体の規模は、桁行2間4.0m・梁行1間2.0mを測る。

遺物は、6基のピットの内の1基から、複合口縁の土師器片(Po1)、敲石状の磨製石器(S1)が出土しているが、その出土状況から遺構とは直接関連する資料ではないと考えられる。

位置的にSB-1やSD-2～9と関連する遺構の可能性があるが、詳細は不明である。

柵状遺構 S A - 1 (挿図14)

S B - 1 の西側に、5基のピットが全長6.2mにわたって一列に並んでいるのが認められ、柵状の遺構の存在を想定した。ピットの掘り方や埋土の状況が、S B - 1 のピットと似ており、S B - 1 と関連するものである可能性がある。遺物は出土しなかった。

溝状遺構 S D - 10 (挿図15)

調査区南端の尾根斜面に位置する。遺構の大部分は調査区外に広がっているものと考えられ、溝の北側一部を検出したにとどまっている。

楕円形の遺構で、規模は検出面で東西方向幅4.0m・南北方向幅2.0m、深さは最深部で0.8mを測る。調査区外へ延びていることから、その全体像は溝状を呈するものと推定される。東側には浅い土坑状の掘り込みが付随している。検出面上からは、長径30~40cmの礫が数個確認された。

性格は不明である。ただ、遺構周辺の地形を見ると、尾根の勾配がやや緩やかになっており、尾高1号横穴墓に伴うテラス遺構とほぼ同標高・同地形に位置することに気が付く。また、礫がテラス状遺構で見られたものとほぼ同じ大きさであること・溝の西側上層に集中していることなどの共通点が挙げられる。これらのことから、調査区外南側の尾根に未確認の横穴墓が存在し、今回調査したS D - 10が横穴墓に伴うテラス状遺構の周溝の一部である可能性も考えられよう。

第3節 北側谷部の調査 (挿図16)

今年度の調査地の北側谷部にトレンチを設定し、堆積土の分析を古環境研究所に依頼したところ、⑩層(挿図16参照)の中から、2,600~2,700個/gの密度でイネのプラント・オバールが検出され、基準値よりも低い値ではあるが、稲作が行われた可能性があるという分析結果が得られた。断面観察でも、⑩層が遺構の一部である可能性が考えられたため、水田跡を想定して検出を行った。しかし、⑩層は平面的にごく狭い範囲で消失してしまい、稲作を裏付ける遺構を検出することはできなかった。この辺りは、断面に表れているように、土砂の流入・堆積が著しく、今回の調査中でも大雨が降ると、調査地外東側から土砂が流入した。現在、調査地の東側には水田が広がっており、ここからイネのプラント・オバールを多量に含んだ土がこの谷に堆積することは十分に考えると考える。

第4章 尾高古墳群

今年度は、墳丘が残存していた尾高16号墳の他、墳丘は削平されていたが周溝の存在を確認した尾高15号墳・37号墳の調査を行った。このうち、尾高37号墳は今回の調査で初めて存在が明らかになったため、新たに命名したものである。以下、各古墳について報告する。

第1節 尾高15号墳

尾高15号墳（挿図17）

台地平坦面に位置する。周溝の南端は調査区外のため未検出である。周溝の南西側でSD-1と、西側は南北方向にのびるSD-6と重複している。

墳丘は削平を受けており、全く残っていない状態であった。周溝は円形にはば一周しており、直径12.6mの円墳と復元される。全体に削平を受け、非常に浅い残りとなっている。周溝の幅は、検出面で1.2～1.6m・底面で0.8～1.0m、深さは最深部で0.4mを測る。

埋葬主体は墳丘とともに破壊されてしまっており確認出来なかったが、石棺材と思われる厚さ2cm程度の割石の破片が、周溝検出面上部にみられた。また、周溝の南側で、周溝内埋葬の可能性が考えられる掘り込みと石を検出している（SX-1）。

遺物は、周溝の南西付近で須恵器の甕1個体分の破片を検出している（Po1）。出土遺物はこの1点のみであるが、古墳築造の時期は古墳時代後期と考えられる。

SX-1（挿図17）

尾高15号墳の周溝内に存在する。調査区の南端にあたるため、掘り込みの北側の一部を検出したにとどまっており、全体像は明らかでない。

尾高15号墳周溝の底部に、浅く掘り込まれている土壠状の遺構で、梢円形を呈するものと推定される。さらに、その縁には、幅0.1mで断面V字形を呈する溝状の掘り込みがめぐっている。規模は推定で長軸約1.5m・短軸約1.0m、検出された深さ0.04m、縁を巡る掘り込みの深さ0.08mを測る。また、東側の上端では、長径約20cmの石が検出された。遺物は出土しなかった。

性格は遺構の一部を調査しただけなので断定はできないが、その位置及び形態から、15号墳の周溝内埋葬の可能性が考えられる。

第2節 尾高16号墳

尾高16号墳（挿図18）

台地平坦面の突端に位置する。日野川下流に広がる米子平野が一望できる位置にあたる。尾根の南側・北側は急な谷地形となっており、両方の谷に狭まれた、尾根の頂上の平らな空間を余すところなく利用し、古墳を築造している。

直径15.4m、残存する埴丘の高さ3.1mを測る円墳である。調査開始の段階で、埴丘中央から東側部分は、かなり削平を受けていたものと考えられる。埴丘は、地山整形を行なったのちに、黒褐色系の土を盛って形成されている。葺石・埴輪は確認されなかった。

周溝は、古墳の東側と西側の一部で確認された。西側周溝は幅2.5m・深さ0.2m、東側周溝は深さ0.4mを測るが、北に向かうにつれて幅が広がり、消失する。しかし、周溝の途切れた地点よりも先の、周溝外周のラインの延長線上で箱式石棺が検出されており、本来は周溝が北側にもさらにのびていたことを示唆している。北側と南側は急斜面となっており、地山も台地平坦面と尾根の斜面との境で粘質土から堅い岩盤に変わることから、もともとこの部分には周溝は掘られなかったものと思われる。

埋葬主体は、削平によって失われていたが、東側周溝内からは、箱式石棺（SX-2）・集石を伴う土壙墓（SX-3）が確認されており、これらは周溝内埋葬と考えられる。また、西側の周溝の外周より1.3m程離れた地点では、岩盤を長方形に掘り込んだ遺構（SX-4）が確認されており、尾高16号墳に伴う周溝外埋葬の可能性が考えられる。

遺物は、周溝の南西部と東北部から土器片が出土している。器種は、土師器の高杯・直口壺、須恵器の蓋杯・壺等である。

遺物はすべて周溝内からの出土であるが、最も古いものと考えられる遺物は土師器高杯（Po6）で、5世紀末～6世紀前葉のものと考えられる。須恵器の蓋杯類は、それよりも時期的にやや下るものであり、2次的埋葬あるいは祭祀に伴うものである可能性がある。

SX-2（挿図19）

尾高16号墳の東側周溝外周の北端に存在する、組合せ式の箱式石棺である。石棺の身の直上近くまで削平が及んでいたために、蓋石は失われており、墓壙の掘り方も検出できなかった。

主軸はほぼ東西に置く。石材は、この種の石棺に一般的な板石ではなく、自然の礫を使用しており、地山を若干掘り込んで立てている。小口側は、主軸方向に石を2列に置いたもので、その内側の石を挟む形で側壁を配置する。側壁は、南北とも3枚ずつの石を基本とするが、南側には外側にもう1枚石を置いている。その他、隙間を補填する小礫がみられるが、粘土等による目張りは認められなかった。規模は内法で、長軸0.94m・短軸0.26～0.30m、深さ0.20mを測る。

石棺東寄りの床面には、6cm程度の小礫が2個小口に沿って置かれており、付近には灰白色の粘土塊が存在した。この礫は枕として使用されたものと思われ、東頭位の埋葬が想定される。また、規模的にみて小児を埋葬したものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

S X - 3 (挿図20)

尾高16号墳東側周溝内に存在する土壙墓である。周溝外周の掘り込みに沿って、南北方向を主軸としてつくりられており、S X - 2 との距離は約 6 m である。

規模は検出面で長さ 2.40m・幅 0.90m を測る。検出面から内側約 20~25cm までは緩やかな角度で、それより下部はほぼ垂直に掘られている。床面の規模は、長さ 1.90m、幅南側 0.40m・北側 0.26m で、周溝底面からの深さは 0.50m である。土壙の上面には、掘り方の変換点とほぼ同じ高さに、30~50cm の礫が 10 数個置かれている。

床面には、南壁に沿って 15~20cm の礫を 4 個「コ」の字状に並べている。そのうちほぼ中央に位置する礫は、約 45 度の角度をもって斜めに置かれている。また北端には、土壙の幅一杯に礫が 1 個置かれている。これらの礫は、遺体を安置するための施設と考えられ、南側の礫の配置が頭部を固定するのに適していることから、南頭位の埋葬であったと思われる。

遺物は底面近くからの出土ではなく、上面の集石中から須恵器片 2 個が出土した。ともに細片である。

S X - 4 (挿図21)

尾高16号墳の西側に位置する。16号墳より西側は平野に向かって延びる尾根地形になっており、この辺りには表土の堆積はほとんど無く、岩盤がほぼ露出している。S X - 4 はこの岩盤を直接長方形に掘り込んだ遺構で、形態的に埋葬施設と考えられる。16号墳周溝外周からは 1.3m の距離にあたる。遺構の西側は急斜面であり、墳丘を築造する地形的な余裕が無いことから、16号墳に付随するものと考えられる。

主軸は東南東 - 西北西に置く。斜面中に位置するため、遺構西端の地形の高さに合わせて掘り込まれており、遺構の西端は自然地形と一体化している。遺構のやや西寄りを横断する形で、岩盤の亀裂が入っている。規模は内法で長さ 2.00m、幅 0.30m を測り、S X - 3 の規模と酷似する。遺構の東端から 25cm のところまでは特に深く掘られており、深さは 0.40m を測る。

遺物は、埋土の上面と土壙外 40cm のところから、土師器の碗が 2 点出土した。ともに本遺構に伴うものと考えられる。時期は 5 世紀末 ~ 6 世紀前半頃のものと思われ、16号墳とは併行する時期にあたる。

第3節 尾高37号墳

尾高37号墳（拵図10）

台地平坦面縁端部に位置する。調査区の南端にあたるため、周溝の北側の一部を検出したにとどまっている。また、周溝の一部はSD-1・SD-3と重複している。

墳丘は削平をうけており、全く残っていない状態であった。

周溝は、全体の1/5ほどを確認した。15・16号墳と同様に上部はかなり削平を受けているため、溝はかなり浅い残りとなっている。検出面での周溝の幅は1.6～2.6m・底面の幅1.3～1.8m、深さは最深部で0.5mを測る。周溝の弧のカーブから、直径15m程度の円墳と推定される。また、周溝の内部には、北側外周の肩に沿って掘り込まれた土壙墓（SX-5）が確認されている。

遺物は、須恵器片・土師器片がわずかながら出土している。

SX-5（拵図21）

尾高37号墳の周溝内に位置する土壙墓である。周溝の北側にあたり、周溝外周の壁と土壙の北壁は共有する。平面形は梢円形を呈する。検出面での長さ長軸2.15m・短軸1.20m、底面の長さ長軸1.70m・短軸0.80m、深さは周溝の底面から0.34mを測る。

土壙内の東寄りの埋土の上面近くから、須恵器の蓋杯3セットがまとった状態で出土している（Po3～8）。検出状況より供獻用と考えられ、この蓋杯の置かれた側に頭部が位置したと思われる。この場合、頭位は東南東を向く。

蓋杯の形態から、時期は6世紀前半と考えられる。

第5章 尾高1号横穴墓

第1節 横穴墓（挿図22・23・24、付図）

（調査の概要）

調査地西側の尾根斜面中において、地山面まで掘り下げて検出を行ったところ、不定形の黒褐色土の面が検出された。地形的に横穴墓の可能性を考えられることから、トレーナーを入れて確認を試みたが、そのときには横穴墓の存在を確認することはできなかった。従って、不定形土坑として扱い調査を行っていたところ、義門らしき部分が認められたため、新たに横穴墓を想定したベルトを設定して調査を行った。また、遺構の性格上、他にも横穴墓が存在する可能性が考えられたため、周辺斜面の再精査を行ったが、他には検出されなかった。横穴墓背後にあるテラス状遺構についても、それまでは性格不明であったが、横穴墓の確認により、それに伴う可能性が高いものとして調査を行った。

尾高地区には、従来横穴墓の存在が確認されていなかったため、「尾高1号横穴墓」として報告する。

（立地）

尾高16号墳を最高点として、台地平坦面は尾根地形となって下っていく。その尾根の先端近くに横穴墓は築かれている。標高は約20mで、尾根の稜線と同方向に掘り込まれているため、ほぼ西に向かって開口し、米子平野を正面に見下ろす格好になる。

（基數）

横穴墓は、群構成をなすのが一般的で、単独で築かれることは少ないが、本年度調査した尾根からは1基しか検出されなかった。ただし、第3章第2節のSD-10の項で指摘したように、調査地外にも同地形の尾根はいくつも存在しており、また丘陵上の古墳の集中度を考えると、近くの尾根に横穴墓が築かれている可能性は十分に考えられる。

（前庭部前面のテラス状遺構）

前庭部の前面の標高約19.50m付近には、幅1.0～1.5mのテラスが南北約15mにわたって、通路状に存在している。横穴墓前庭部床面との比高差は約50cmであり、位置的に横穴墓と関連する施設と考えられる。可能性としては、横穴墓の掘削あるいは埋葬における際の通路・祭祀を行う空間といったことが挙げられる。

（前庭部）

前庭部は、長さ3.45mを測り、狭長の平面形を有する。北側壁は、先端から2.10mのところまではみられず、奥寄りの1.35mのみ存在する。床面は南側と同じように先端まで延びている。床面は、U字形の横断面形を呈し先端部の幅は0.60mを測る。幅はほとんど広がらず義道部に至るが、北側壁が存在する辺りから前庭部奥壁にかけてやや広がり、前庭部奥壁の幅は1.10m、壁高は約1.50mを測る。

北側壁が不完全な理由として、周辺地形の観察から、地質的にこの部分には岩盤が存在しなかったためと考えられる。北側壁の先端から北側は垂直に削り込まれており、これは横穴墓を掘削する前に、岩盤を加工して地形整形したものである可能性がある。同様のものが後述するSX-5でも確認されている。

遺物は、前庭部中央付近から奥寄りにかけて土器片が出土している。いずれも須恵器の破片で、Po1が高杯、

Po2～4・6～13は蓋杯である。完形品は無く、床面から離れた埋土中からの出土が多い。これらの中には、玄室内出土の土器片と接合する資料が含まれている点が注目される。

(閉 塞)

羨門部には、閉塞材を受ける割り込みは施されていなかったが、床部には長径約40cmの楕円形の礫が置いてあり、その20cm前面にも同様の礫が下に1個、上に2個と2段に積んであった。これは閉塞材を、基部を挟む形で固定するためのものと思われる。本横穴墓は未盗掘の可能性が高いものであり、付近には閉塞石らしきものは存在しなかったことから、閉塞は板状の木材で行っていたと考えられる。

(羨道部)

羨道部は、長さ0.70m、幅0.55m、高さ0.90mを測り、玄室規模に対して、羨道部が比較的短いのが特徴である。床面中央には、主軸に沿った方向で溝が掘られており、羨門部の閉塞用の礫の部分まで延びている。溝の上面には、25～35cmの礫が置いてあり、暗渠状になっている。

(玄 室)

玄室の平面形は、隅丸の正方形に近いものであるが、北側に比べて南側の隅が丸みを帯び、全体的にはややいびつになっている。横断面は半円形に近く、縦断面は高さのはほとんど変わらない薄鉢形である。規模は、奥行2.60m、幅は前壁側で2.90m・奥壁側で2.25m、高さは玄室中央で0.92mを測る。床面はほぼ平坦で、中央には幅約15cm、最大深約8cmの溝が走り、羨道部の溝へと続いているが、奥壁側へは、途中で不明瞭になり消失する。この溝の上部や中からは長径10～15cmの礫が並んで検出されており、本来は羨道部と同様に暗渠になっていたと思われる。また、溝は玄室床面の周囲にもめぐっているが、その掘り方は一様ではなく、奥壁北隅・前壁南側がしっかりしているに対し、奥壁中央・前壁北隅の辺りはかなり粗雑になっている。

玄室壁面の依存状況は極めて良く、壁面は非常に丁寧なつくりで、工具の加工痕がほぼ全面に明瞭に残っている。掘削の工具痕の幅は約5cmで、さらにそれとは別に、最終段階の調整痕と思われるものが認められる。奥壁・側壁は、基本的に上から下の方向で、下部約50cmは斜め及び横方向に削っている。また前壁の玄門上端から天井部にかけては、玄門上端のラインに沿って横方向に削っている。

(埋葬施設・出土遺物)

羨道部に流入した埋土を除去したところ、玄室床面に人骨・遺物が多数存在しているのが確認された。従って、この面が最終的な埋葬の面と判断した。また、その下方約3～5cmの位置からは、床一面に小礫を敷いた礫床が検出された。以下、礫床を第1埋葬面、玄室開口時の検出面を第2埋葬面として報告する。

第1埋葬面である礫床は、3～10cm程度の小礫を玄室床面に敷き詰めたものである。礫は、床面中央の溝の消失する玄室中央からやや奥寄りの位置に特に集中している。人骨は確認されなかつたが、付近には土が有機物によって黒く変色している部分が認められ、この辺りに遺体を安置したものと思われる。遺物は、須恵器片・耳環2点・鉄鎌1点・鉄製品1点が検出された。須恵器は蓋杯が中心で、少なくとも8個体分存在している。いずれも破片であり、そのうち3点(Po4・9・10)は前庭部出土の破片と接合した。耳環(E1・E2)は一対になると考えられるが、両者の出土位置の距離は85cmと、やや離れて出土した。ともに鋳化が進んでいるために鎌金の有無については不明である。鉄鎌(F1)と鉄製品(F2)は、耳環E1に比較的近い位置から出土した。F1には木質が依存している。F2は環状の製品の一部である。

第2埋葬面は、礫床の上面に3～5cm程度土を敷いた面で、玄室奥寄りの中央から北側にかけては、10～25cm

程度の襪がところどころに置いてある。この辺りに人骨が散在しており、上腕骨・大顎骨・下頬骨・奥歯等が確認されたが、原位置はとどめていなかった。玄室壁面には獸がひっかいた爪痕が各所に残っており、動物が侵入していたことを窺わせるが、そのことと関連するかもしれない。骨の依存状況は極めて悪く、被葬者の性別・年齢、埋葬体数等の情報は得られなかった。遺物は、須恵器の蓋杯の蓋4・身5、長頸瓶1を検出した。いずれも完形品である。また他に1点須恵器の蓋杯片(Po30)が出土したが、これは前庭部の破片と接合した。

(埋葬の時期)

前庭部出土の土器の大半は、蓋杯の形態から6世紀後半頃に位置付けられるが、蓋は口縁部内側に段あるいは沈線が残っており、また天井部と口縁部の境の形状からも、6世紀後半でも比較的古い段階のものと思われる。これらは、破片の接合状況から、第1埋葬面に関するものと考えられる。唯一、Po30は7世紀に下る形態を示しているが、これは第2埋葬面出土の破片と接合し、追葬時のものと判断できる。

第1埋葬面出土の土器は、上述のとおり前庭部出土土器と同時期のものと考えられ、6世紀の第3四半期頃に比定できる。

第2埋葬面出土の蓋杯の形態は、3つに大別できる。Po16・17・19・21は第1埋葬面出土の土器とはほぼ同形態のもので、6世紀第3四半期に位置付けられる。Po18・20・22は杯身であるが、口縁部の立ち上がりがやや短くなる点に若干後出的な要素が認められる。しかし両タイプとも床面に直接置かれた状況で検出されており、平面的にも混在していることから、同一埋葬面に関するものである可能性が考えられる。長頸瓶Po14もこの時期のものと考えられる。一方、Po15とPo27の蓋杯のセットは、先の土器とはやや離れて、玄門寄りから検出されており、形態的に7世紀中葉～後葉まで下るものである。従って、この時期まで追葬あるいは死者に対する祭祀が行われていたことを示している。

以上のことから、本横穴墓の埋葬については、①6世紀第3四半期における躍床での最初の埋葬、②比較的近い時期の追葬、③7世紀中葉～後葉の追葬（あるいは祭祀）の少なくとも3つの段階が存在したことが想定される。

第2節 テラス状遺構（挿図22・25）

（立地）

横穴墓の存在する尾根の標高約26.5m付近に築かれたテラス状の遺構である。横穴墓の背後にあたり、横穴墓床面との比高差は約6.5mである。

（構造）

丘陵をテラス状に整形した部分の東端近くに、周溝を半円形にめぐらして、ややいびつな円形の平坦面を形成している。溝は地山下の岩盤まで深く掘られている。底面幅は0.2～0.3mで、底面から約0.5mの高さまでは垂直に近く掘られているが、その上側約0.4mは斜面になるよう緩やかに削っている。このため上側部分は円形の墳丘の斜面のような印象を受ける。溝によって区画された円形のテラス部分の規模は、上面で東西5.3m・南北5.9m、周溝内周からは東西6.1m・南北9.8mを測る。

テラス部分は基本的に地山整形のみで形成され、上面に盛土は伴わない。しかし、上面から溝に至る間の斜面部分には、地山の上に地山土と黒褐色土の混合土（挿図25の②層）があり、この層の上面から遺構に伴う列石や遺物が検出された。従って、斜面部分には若干の盛土を施していたことが認められた。

周溝より内側（西側）の平坦部と斜面の境にあたる部分には、長径30～40cm程度の礫が並べて置かれ、列石となっている。同様の礫は、周溝よりも外側（東側）でも4個検出されており、外側にも若干置かれていた可能性がある。

また、周溝外周の壁面に沿った位置に、東西1.0m・南北1.0m、深さ0.8mの半円形に掘り込んだ遺構があり、列石と同様の礫が8個2段になって検出された。テラス状遺構と関連するものと考えられるが、遺物は出土せず、性格等は不明である。

（遺物）

遺物はテラスの斜面から土器が出土している。特に南側斜面と列石付近からの出土が多い。器種は土師器の甕・椀・高杯、須恵器の甕・把手付椀・高杯・蓋杯である。

（時期）

須恵器の蓋杯（Po7・Po10）は、横穴墓の第1埋葬面出土の蓋杯と同形態のもので、横穴墓の最初の埋葬と同時期の6世紀後半に位置付けられる。把手付直口甕（Po9）も同時期の形態を示している。土師器は退化した複合口縁を有する甕（Po1）・椀（Po6）・高杯（Po11）等があり、土師器と須恵器の出土状況に、平面的・立的な差はなく、両者は同時期のものと考える。

（性格）

周溝によって区画された円形の墳丘状のテラスや、列石の存在は古墳の墳丘を強く意識したものと思われ、その意図は、横穴墓の後背墳丘といわれるものに共通するものである。時期的にも、テラス状遺構と横穴墓の最初の埋葬はほぼ同時期にあたることから、本遺構は横穴墓に伴うものと判断される。

第3節 SX-6（挿図25）

横穴墓とテラス状造構の間の斜面に、岩盤を深さ110cm程垂直に掘削し、床面を南北約6m、東西最大約2m程度のテラス状に整形した部分が確認された。位置的に横穴墓に関連する可能性が考えられたため、SX-6として調査を行った。

埋土は、黒褐色系の土と黄褐色系の土が幾層にもわたって交互に重なっており、版築状となっている。従って、岩盤を掘削した後に人為的に埋め戻したものと判断される。

遺物は出土しなかったために、性格を特定することはできないが、横穴墓と関連するものと考えられる。横穴墓には、基盤岩の岩質等の事情から、未完成のまま掘削を放棄する例がよくみられるが、本造構もそれに類するものである可能性がある。

第6章　まとめ

1. 土坑（落し穴）

今年度の調査では、土坑19基を検出した。平面形は、隅丸長方形・椿円形・長方形・円形を示し、その内15基は、底面にピットを持っている。遺物は19基のいずれからも検出されなかった。

これらの土坑は、その形態・埋土から、狩猟に使われた落し穴と考えられる。前年度の調査で検出された落し穴とほぼ同形態を示す。一般に落し穴の底面ピットは、獲物殺傷用の杭を立てるためのものと考えられており、SK-5の底面ピット上端から検出された礫や土層⑦～⑧に見られる粘質土は杭固定用と思われる。また、SK-16では4つの杭痕跡と、更に直接底面ピットの床面に杭を差し込んだ痕跡が検出された。前年度の調査で報告したように、獲物殺傷用杭の立て方には、底面ピットを掘り込んで杭を立て、その基部を粘土・礫等で固定するものと、直接床面に杭を差し込むものの2通りに分けられる。

なお、今年度の調査では、落し穴の時代を決定付ける遺物を検出し得なかったが、前年度の調査では落し穴最下層中より杭と思われる炭化木が検出されており、放射性炭素年代測定の結果、B.P. 3250±25という値が得られている。のことから、尾高御建山遺跡の落し穴の形成・利用された時期は縄文時代と考えられる。

2. 弥生溝（SD-1）

尾高御建山遺跡で確認された溝状遺構（SD-1）は、台地平坦面に位置し、緩やかな弧を描きながら調査区外へと延びている。その形態・出土遺物等から弥生時代の環濠の可能性を考えられるので、ここでは県内の環濠例と比較し、検討してみたい。

鳥取県内で現在環濠と考えられているものは、西伯都会見町諸木遺跡・宮尾遺跡、西伯郡西側清水谷遺跡、西伯郡淀江町今津岸の上遺跡、倉吉市後中尾遺跡、米子市尾高浅山遺跡・日下寺山遺跡の7例である。時期は、諸木・宮尾・清水谷・今津岸の上が弥生時代前期末から中期初頭、後中尾は中期中葉、尾高浅山・日下寺山は後期前葉のものと考えられている。中でも、前期末の4例は、20cm前後の溝底面の幅・底面の平らなV字形を呈する断面形・環濠の描く弧の広がり様等の点において、尾高御建山遺跡のSD-1との共通点を持ち合わせている。また、これらのうち清水谷・宮尾とは、環濠内空間の面積は比較的近似するものと思われる。環濠の機能については、防衛用施設・集落の限界としての区画・防風や獣に対する障壁・首長の権威の象徴・宗教的意味をもつ施設等様々な説があるが、尾高御建山遺跡のSD-1がどのような役割を果たしていたのかは、今回の調査からは断言できない。ただ、調査区外も地形は変わらない標高35m前後の台地平坦面であることから、SD-1の内側に集落が存在した可能性は考えられる。

一方、尾高御建山遺跡SD-1との関連を考える上で興味深いのは、尾高浅山遺跡の環濠である。尾高浅山遺跡は、本遺跡と同じ大山山麓辺台地に位置し、両遺跡間の距離は約1.5kmである。尾高浅山遺跡からは弥生後期前葉の3条の環濠・竪穴住居跡・四隅突出型埴丘墓が、米子市教育委員会の試掘調査で確認されている。

環濠の規模や形態は異なるものの、溝を掘りめぐらせて空間を区画するという共通の概念をもつ遺構が、弥生時代前期末と後期前葉という時期差において、近接したところに存在する点が注目される。憶測にすぎないが、弥生時代の長い期間を通じて、同種の遺構がこの尾高周辺地域に存在した可能性も考えられる。いずれにしても、県内の良好な環濠例はいまだ少なく、今回の尾高御建山遺跡の調査でも、溝のごく一部しか検出できなかっただめ、充分な比較・検討をなし得なかった。今後の調査に期待し、これからの課題としたい。

3. SD-2~9

第3章第2節で、台地平坦面にめぐらされた溝状遺構SD-4~9について、方形にめぐらされた樋状（あるいは渠状）遺構の可能性を、SD-2・3については、その外部を区画する溝の可能性を指摘した。この溝の範囲内には、関係は不明だが擧立柱建物跡SB-1・2が存在する。これとよく似た平面配置をもつ遺構が、本遺跡から東南約750mに位置する尾高城址内で確認されている。米子市教育委員会による調査で、「古代SD02」として報告されている遺構は、本遺構と同様に日野川下流平野を見下ろす台地の縁端部に位置しており、平坦面を一辺31mの「コ」の字状に区画する幅2.4~2.7mの「外溝」と、その約2m内側に並行する幅約0.3mの「細溝」とで構成されている。遺構の性格については、外溝と樋をめぐらせた細溝からなる「居住区を囲む溝」とし、外溝内から多量に出土した土器から古墳時代前期前半の時期を比定している。

このように尾高御建山遺跡SD-2~9と尾高城址「古代SD02」は、溝の平面配置の状況が酷似しており、その規模も比較的近いものである。特に内側の溝は、一辺の長さについては前者が復元推定約28m、後者が23mと近い値を示す点や、底面にピットが一列に並ぶ部分がある点、溝が途切れる部分が認められる点など共通する要素が多い。これらのことから、両遺構は同じ性格を有する可能性があり、尾高周辺の日野川東岸段丘面には、何らかの生活空間を外溝と樋状（渠状）施設で2重に囲む施設が複数存在したことが想定される。

しかし、両遺構の時期については、尾高城址「古代SD02」が、外溝からの土器の出土状況・出土量やその時期幅が大差ないことから、これらが放棄による一括資料として、古墳時代前期前半と考えられているのに対し、尾高御建山遺跡SD-4~9は、内溝にあたるSD-6と尾高15号墳の重複関係から、少なくとも古墳時代後期以降のものと判断され、両者の時期は異なる。この点に関しては、外溝と内溝との関連の問題等と共に、今後の検討課題としたい。

最後に、確証はなく憶測にすぎないが、1524~1601年に築かれていた尾高城と関連する可能性も指摘しておきたい。

4. 尾高古墳群

(1) 群構成

今年度は、尾高15・16・37号墳の3基を検出・調査した。このうち、15・16号墳は、遺跡地図に掲載されている周知の古墳であったが、37号墳に関しては、今回の調査で初めてその存在が明らかになったものである。1992年度に調査された隣接する地域には、尾高17・18・19号墳が存在しており、この台地の縁端部には、多くの古墳がかなりの密度で築かれていたことがわかる。

(2) 墳丘外埋葬(SX-1~5)

今回調査した尾高15・16・37号墳は、いずれも中心主体となる埋葬施設は失われていたが、墳丘外からいくつかの埋葬施設及びその可能性のあるものを確認することができた。15号墳周溝内のSX-1については詳細不明であるが、16号墳からは、周溝内の箱式石棺(SX-2)・周溝内の集石を伴う土塙墓(SX-3)・周溝外の土塙墓(SX-4)、37号墳からは周溝内の土塙墓(SX-5)が確認された。周溝内に位置するものは、いずれも周溝外周の掘り込みに沿って築かれている点が注目される。遺物は、SX-4から鏡2点、SX-5から須恵器の蓋杯が3セット出土した。

このように、墳丘外の埋葬といっても、そのつくられた位置・種別・遺物の有無といった点には差異が認められる。これは中心主体の被葬者と墳丘外埋葬の被葬者との関係を考える上で、興味深い資料であり、今後の検討課題として挙げておきたい。

5. 尾高1号横穴墓

今回検出された横穴墓は、伯耆地方の横穴墓の研究をする上で貴重な資料といえる。ここでは、本横穴墓の特徴である、(1)横穴墓の形態と時期、(2)後背丘陵のテラス状遺構、(3)未完成横穴墓の埋め戻し跡の可能性のあるS-X-6について整理する。

(1) 横穴墓の形態と時期

本横穴墓の形態的な特徴として、①前庭部は狭長で、断面U字形の床面をもつ・②玄室の平面形は隅丸のややいびつな方形で、横断面は半円形を呈する点が挙げられる。同様の形態をもつ横穴墓は、伯耆地方では日野川下流平野の西端に位置する米子市陰田7号横穴墓・同15号横穴墓、日野川上流地域の日野郡江府町北谷ヒナ横穴墓群で確認されており、日野川下流に位置する本横穴墓は、空間的には両者の中間にあたることになる。

これらの中で形態的に最も古相を示しているのは、陰田7号横穴墓・北谷ヒナ3号横穴墓であり、これらに比べると、本横穴墓は玄室の平面形が方形に近くなっている点・縦断面形が蒲鉾形で、いわゆるドーム形よりもアーチ形に近くなっている点・玄室床面に設けられた溝に簡略化の傾向がみられる点に、後出的な要素が認められる。従って、本横穴墓の形態は陰田15号横穴墓と近いものである。

次に、遺物より導かれる築造時期は、本横穴墓は陰田7号横穴墓・15号横穴墓とほぼ同時期にあたる、6世紀後半の古い時期と判断される。陰田7号横穴墓と15号横穴墓は、古墳群に引き続いで築かれた、総数50基にも及ぶ陰田横穴墓群の中で最古に位置付けられるものであり、まさに横穴墓の導入期を示しているものと思われる。従って、本横穴墓も、日野川下流地域における横穴墓の導入期を示す例としてとらえられる。一方、日野川上流地域にあたる北谷ヒナ3号横穴墓はこれより1段階遅れる時期にあたり、現状では、日野川上流地域における横穴墓の受容については、日野川下流地域の影響を受けた可能性が指摘できる。ただし当地域における導入期横穴墓の系譜の問題については、現時点では資料数が不足しており、今後の資料の増加を待って、形態的な変遷や埋葬方法等も含めて検討すべき課題と考える。

(2) 後背丘陵のテラス状遺構

本横穴墓の背後の丘陵には、周溝によって区画されたテラス状の遺構が検出された。これは、近年各地で資料例が増加している、横穴墓の後背埴丘と共通する性格を有するものと考えられる。伯耆地方で同種の遺構として考えられるものは、米子市陰田横穴墓群・同大塔山横穴墓群・西伯郡西伯町マケン堀横穴墓群で確認されているが、その構造はそれぞれ若干異なっている。陰田横穴墓群例は、横穴墓の上面の尾根上に「匁」の字形に溝を掘り込み区画したもので、埴丘の有無については不明である。大裕山横穴墓群例は、深い溝で不整形な半円形に区画した後、上面に若干の盛土を施している。マケン堀横穴墓群例は、溝の平面形は大塔山横穴墓群例と良く似ているが、より明瞭な埴丘を有し、2号埴として報告されているものには1mの盛土が施されている。

これらの例に対し、本横穴墓のテラス状遺構の周溝は、他の例に比べてかなり深く掘り込まれており、平面形も比較的しっかりした半円形である。従って、テラス上面には盛土は施されていなかったが、視覚的には十分埴丘を意識したつくりとなっている。また、この溝に沿って列石が施されていることは、他に例をみない特徴であり、これも古墳を意識したものと考えられる。ただし、この横穴墓に先行する時期に築かれた、同一丘陵上の尾高16号墳や隣接する丘陵上の尾高17～19号墳（1992年度調査）からは、葺石・列石等は確認されておらず、本遺構の周溝の列石は、在地の古墳の影響ではなく、テラスの周溝と同時に導入されたものである可能性がある。

横穴墓玄室との位置関係については、陰田横穴墓群・大塔山横穴墓群では、埴丘部分のはば中央の真下に玄室が位置するのに対し、尾高1号横穴墓とマケン堀横穴墓群は、玄室と埴丘相当部分の中央の平面位置はずれてい る。

③ SX-6

横穴墓とテラス状遺構との間に位置するSX-6については、横穴墓掘削を放棄した跡の可能性を指摘した。この遺構で注目されるのは、岩盤を掘削した跡を互層状に意識的に埋め戻していることである。これと非常によく似た遺構が、先にテラス状遺構との関連で挙げた西伯郡西伯町マケン堀横穴墓群中で確認されている。マケン堀28号横穴墓は、前庭部を掘削した後、義道部の掘削途中で築造を放棄しているが、その前庭部がSX-6と同様に互層状に埋め戻してある。マケン堀では28号横穴墓の掘削を放棄した後、隣接する位置に、それに変わるものと思われる9号横穴墓と、それに伴う後背墳丘3号墳が築かれているが、この状況は尾高1号横穴墓における横穴墓とテラス状遺構の関係に酷似している。両遺跡の遺構が共通のものと断言することはできないか、その可能性は十分にあると思われる。また、互層状に埋め戻す行為自体に何らかの目的があったことも想定されるが、遺物の出土はなく詳細は不明である。

いずれにしても、今回確認されたSX-6は、未完成横穴墓の処理という問題を想起する興味深い資料といえる。

【参考文献】

- 『今津岸の上遺跡発掘調査報告書』 1991 淀江町教育委員会
- 『陰田』 1984 建設省中国地方建設局倉吉工事事務所・米子市教育委員会
- 『大裕山横穴墓群』 1987 財團法人鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所
- 『尾高浅山遺跡現地説明会資料』 1992 米子市教育委員会
- 『尾高御建山遺跡 尾高古墳群』 1994 財團法人鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所
- 『尾高城址』 1978 米子市教育委員会
- 『尾高城址Ⅱ』 1979 米子市教育委員会
- 『北谷ヒナ横穴群発掘調査報告書』 1990 江府町教育委員会
- 『清水谷遺跡』 1992 西伯町教育委員会
- 『東宗像遺跡』 1985 財團法人鳥取県教育文化財団
- 『マケン堀古墳群 北福王寺遺跡』 1990 西伯町教育委員会
- 『宮尾遺跡 天万遺跡発掘調査報告書』 1982 会見町教育委員会
- 『諸木遺跡発掘調査概報』 1975 会見町教育委員会

插表 土器觀察表

出土位置	遺物番号 辨別番号 区分番号	取上番号	種器	類種	法量 cm	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
SD-1	Po. 1 26	470	弥生土器	口縁は外反し、端部は丸みをもつ。腹部は口縁よりやや外側にはり出し、頸部には3条のへら書き平行弦線をもつ。底部はしっかりとした平底。	① 11.3 ② 15.9 ③ 12.4 ④ 6.8	内面はナデ、外面はナデ及びミガキ（ミガキの単位は平行ににより不明）。内面肩部～腹部に粗く2～5mmの大砂粒を多く含む。	粗く2～5mmの大砂粒を多く含む。	やや不良	内面浅黄 外面部にぶい 褐色	胸部スス 少量付着 清水 - 3	
	Po. 2 26	488	弥生土器 壺	口縁部は短く外反し、端部は丸みをもつ。腹部から底部にかけてすぼまってゆく。肩部に4条のへら書き平行弦線をもつ。	① 26.6 ♪ ② 19.2 △	内外面ともナデ。外面は風化のため調整不明。	粗く1～4mmの大石英を多量に含む。	やや不良	内面にぶい 黄褐色 外面部にぶい 褐色	胸部にスス 付着 YH - 5	
	Po. 3 26	473	弥生土器 底盤	しっかりとした平底。	② 6.2△ ④ 9.1	風化のため調整不明。 指頭圧痕がみられる。	やや粗く 1mm～4 mmの大石英を多量に含む。	良好	内面にぶい 黄褐色 外面部にぶい 褐色	YH - 4	
	Po. 4 26	477、 481～486 490	弥生土器 壺	口縁は外反し、端部はやや平坦。刻み目をもつ。脇部ははり出す。しっかりとした平底。 胸腹部中位に2条のへら書き平行弦線。	① 14.6 ♪ ② 5.4△ ③ 20.3 ④ 6.8	内面外ナデ後。ヨコハケ、ナサハケ（ハケ幅1.5mm程度）その後ナデ消し。底部内面に指頭圧痕あり。内面頸部に指頭圧痕。	やや密く 1～4mm の大石英を含む。	良	内面にぶい 黄褐色	1/2残存 胴～底盤にスス付 着 清水 - 6	
	Po. 5 26	370	弥生土器	部位不明、2本の凹線の間に刺突文を均等に施す。		内面外ともナデ。	密	良好	内面黄 外面部	YH - 3	
	Po. 6 26	376	弥生土器 底盤	しっかりとした底盤、やや内面気味に立ちあがる。	② 7.2 ④ 8.3	風化のためはっきりとしないが、外面部下位にタテハケ、その他、内外面にはナデ。	粗 0.5mm以下 の石英を多く含む。	良好	内面浅黄 外面部にぶい 褐色	T - 1	
	Po. 7 26	313、321 322、342 370	弥生土器 底盤	しっかりとした底盤。	③ 5.3 ♪ ④ 10.2 △	内面外ともナデ。一部風化のため調整不明。 底部に指頭圧痕あり。	粗 1～2mm の石英を多く含む。	やや不良	内面浅黄 外面部にぶい 褐色	小山 - 4	
	Po. 8 26	312	弥生土器 甕口縁	口縁部は短く外反。端部は平底。底に向けてすぼまってゆく。	① 20.0 ♪ ② 6.2 △	内面外に不規則なハケ目（風化により不明瞭）。その他、内外面ともナデ。	やや粗く 1～2mm の石英を多く含む。	やや不良	内面浅黄 外面部にぶい 褐色	小山 - 5	
SD-2	Po. 1 27	106	土器 高杯	柱状部は内縁気味にのび、端部は「へ」の字形となりくらべ。縁部は角張る。	② 6.6△ ④ 7.9	内面外ナデ、内画柱状 溝絞り目。	密 砂粒を含む	良好	内面にぶい 黄褐色 外面部にぶい 褐色	Ku - 4	
	Po. 2 27	107	土器 甕	外反気味に立ちあがる複合口縁で、端部は丸くおどめる。口縁部下端は上方へ突出、内面の段は明瞭。頸部は、「く」の字形に屈曲する。	① 12.2 ♪ ② 5.0 △	内面外ナデ。頸部内面 へラケグリ。	密	良好	内面灰白色 外面部灰白色	4 - 5	
	Po. 3 27	110	土器 甕	① 19.4 ♪ ② 6.0 △	「く」の字状に屈曲する頸部。	風化の為、調整不明。	密 砂粒を含む	良好	浅黄褐色	YH - 5	
	Po. 4 27	128	土器 甕 颈部	「く」の字状に屈曲する頸部。	③ 2.9△	風化の為、調整不明。	密 砂粒を含む	良好	内面浅黄 褐色 外面部浅黄 褐色	O - 7	
	Po. 5 27	147	土器 甕	「く」の字状に屈曲する頸部。頸部～口縁にかけて立ちあがる部分は外方へ鋭く突出。	③ 2.0△	内面外ともナデ。	密 砂粒を含む	良好	内面明褐色	Ku - 3	

出土位置	遺物番号 種別番号 図版番号	取上番号	種類 類型	法量 (cm)	形態	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
S D - 2	Po 6 27	151	土 筋 器 甕	③ 5.55 △	外反気味に立ちあがる複合口縁。口縁部下端はやや外方へ突出。内面の段は段がつかない。	内外面ともナデ。	石英(1.5 ~ 0.5mm) 含む。	良好	内面淡黃 橙色 外面淡黃 橙色	Yz - 09
	Po 7 27	162	弥生土器 甕	① 15.0 ※ ② 2.2 △	外反気味に立ちあがる複合口縁。端部は丸くおさめる。内面に2条のクシ拂平行沈線を施す。	内外面ともナデ。	密 砂粒を含む。	良好	内面明褐色 外面灰白色	Ku - 1
	Po 8 27	168	弥生土器 甕	① 16.4 ※ ② 2.0 △	内面するくりあげ口縁。端部はややとがっていいる。外面に2条のクシ拂平行沈線。	内外面ともナデ。2条の平行沈線の上にはナデ消し。	密	良好	内面灰白色 外面灰白色	I - 7
	Po 9 27	169	土 筋 器 甕	① 13.0 ※ ② 3.9 △	外反気味に立ちあがる複合口縁。端部は平坦。口縁部下端は外方へ突出。内面の段はゆるやか。	内外面ともナデ。	密	良好	内面淡黃 色	KH - 4
	Po 10 27	183	土 筋 器 甕	① 15.0 ※ ② 5.0 △	外反気味に立ちあがる複合口縁。端部は丸くおさめる。内面に2条のクシ拂「く」の字状に屈曲する脛部。	内外面ともナデ。	密(0.5 ~ 1mmの砂 粒ウンモ を含む)	良好	内面にぶ い黄褐色 外面にぶ い黄褐色	YY - 03
	Po 11 27	171	土 筋 器 甕	④ 3.2 △	外反気味に立ちあがる複合口縁。端部は丸くおさめる。内面に2条のクシ拂「く」の字状に屈曲する脛部。	風化のため調整不規。	やや粗、 石英含む 0.1mm	良好	内面淡黃 色 外面淡黃 色	D - 8
	Po 12 27 191、193、 195、253、 254、261、 268、241、 243	191、193、 195、253、 254、261、 268、241、 243	土 筋 器 甕	① 16.2 ※ ② 3.2 △	外反気味に立ちあがる複合口縁。端部は先細り。口縁部下端はやや外方へ突出。内面の段は不明瞭。	内外面ともナデ。	やや粗、 石英含む 0.1mm	良好	内面淡黃 色	KH - 5
	Po 13 27	205	土 筋 器 甕	④ 3.4 △	複合口縁の頬～立ちあがる部分。立ちあがり部にはやや外方へ突出。内面の段はゆるやか。	風化のため調整不明。	密 石英含む 0.1mm	良好	内面淡黃 色 外面淡黃 色	O - 3
	Po 14 27	210	弥生土器 甕	① 11.4 ※ ② 2.4 △	やや内傾する複合口縁。端部は丸くおさめる。外面に2条のクシ拂平行沈線をもつ。	内外面ともにナデ。	密 砂粒を含む。	良好	内面明黃 色	Ku - 2
	Po 15 27	99	土 筋 器 甕	① 16.5 ※ ② 7.0 △	外反気味に立ちあがる複合口縁。端部は丸くおさめる。内面の段は明瞭。脣部に3本のナメ方向沈線がみられる。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内面淡黃 色 外面灰白色	YY - 08
S D - 3	S 1 28	135	石 石 器	⑥ 2.55 ⑦ 1.65 無茎	両面調整				サメカイ ト製	Ku - 7
	Po 1 28	411	土 筋 器 甕	① 22.6 ※ ② 6.2 △	外反気味に立ちあがる複合口縁。端部は平坦。口縁部下端は外方へ緩く突出。内面の段はやや不明瞭。	内外面ともナデ。	石英(3 mm ~ 0.5 mm) 含む	良好	内面淡黃 色 外面淡黃 色	Yz - 02
	Po 2 28	415	土 筋 器 甕	① 18.2 ※ ② 3.8 △	外反気味に立ちあがる複合口縁。端部は平坦でやや外側に向かって突出する。口縁部下端はやや外方へ突出。内面の段は明瞭。	内外面ともナデ。	密	良好	内面淡黃 色	KH - 3
	Po 3 28	410	土 筋 器 甕	① 15.6 ※ ② 5.2 △	内外面ともナデ。脣部内面ヘラケズリ。	内外面ともナデ。内面ヘラケズリ。	密 0.3 ~ 2.5 程度砂粒	良好	内面灰白 色 外面灰白 色	I - 6

出土位置	遺物番号 補足番号 既出品番号	取上番号	種類 器	法量 kg	形態	手法	胎士焼成	色調	備考	
SD-3	Po. 4 28	433	土師器 底部	② 2.5△ ④ 9.0	しっかりとした底部。 平底。	内外面ともナデ。	密	良好	内面黄 外面部	
	Po. 5 28	426	弥生土器 壺	① 15.0△ ③ 2.7△	外反する口縁で、端部 は丸くおさめる。口縁 部に刻み目をもつ。	内面にナデがみられる が、風化のため大半の 調整不明。	密 石英含む	良好	内面焼 外面部	
	Po. 6 28	444	須恵器 底部	② 2.9△ ④ 6.6	平底。	内面ヨコナデ。外面へ ラケズリ(右方向)	密	良好	内面灰 外面部	
	Po. 7 28	416	土師器 壺	② 4.3△	「く」の字状に屈曲す る頸部～肩部。口縁に かけて立ちあがる部分 は外方へ鋭く突出。	頸部は内外面ともナデ。 肩部はケズり後ナデ。 不明瞭ではあるがヨコ ハケが見られる。	密 (0.5~1mm 砂粒、ウ ンモを含 む)	良好	内面浅黄 外面部	
	S 1	409	石器 刀	⑥ 2.55 ⑦ 1.66	無茎。	表面調整。			サスカイ ト製	
SD-5	Po. 1 28	384	土師器 壺	① 19.0△ ③ 4.85△	口縁部は外傾する複合 口縁で、肩部は丸みを 帯びる。口縁下端は外 方に突出する。	内外面ともヨコナデで あるが、風化のため詳 細不明。	密	良好	内面浅黄 外面部	
	Po. 2 28	92	土師器 壺	② 4.5△	口縁部は外傾する複合 口縁。口縁下部は外方 に突出する。	外、内面とも横ナデで あるが、風化のため詳 細は不明。	密 2mm以内 の砂粒を含む。	良好	内面浅黄 外面部	
SB-2	Po. 1 28	220	土師器 壺	① 14.6△ ③ 7.0△	口縫部は外反する複合 口縁で、肩部は丸みを 帯びる。口縁下端はや や突出する。	外、内面ともヨコナデ。	石英含む	良好	内面浅黄 外面部	
	S 1 28	222	磨製石器	⑥ 19.6 ⑦ 6.9	蝶形を呈する。表面は 磨かれている。				小山13	
尾高 15号墳	Po. 1 29	276、277、 278、279、 280、281、	須恵器 壺	① 18.0 ② 30.15 ③ 27.6	口縫部は近く外反し、 口縁中位に角度が内傾す る。肩部に丸みをもた せておさめる。頸～肩 部の壺の壁に凸起による段 がみられる。肩部はや や張り、倒卵形をなす。 底は丸底。	頸部外面はタテ方向タ タキ。内面は青面波文 タタキ。その他ヨコナ デ。	密	良好	暗青灰色	小山6
尾高 16号墳	Po. 1 30	675	須恵器 壺	① 15.0△ ③ 3.0△	口縫部の立ちあがりは 内傾し、肩部は丸くお さめる。受部はやや上 向きにのびる。底部は平 底をなす。	外側、受部より下部は ラケズリ後ナデ。そ の他内外面ともナデ。	密	良好	内面灰色 外面部	
	Po. 2 30	711	須恵器 壺	① 10.8△ ③ 2.9△	口縫部の立ちあがりは 内傾し、肩部は丸くお さめる。受部はやや上 向きにのびる。底部は平 底をなす。	内外面とも横ナデ。底 部付近の外側はラケ ズリ(左方向)。	密	良好	内面灰色 外面部	
	Po. 3 30	712	須恵器 壺	① 12.2△ ③ 2.35△	肩部を丸くおさめた口 縫部。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内面灰色 外面部	
	Po. 4 30	713	須恵器 壺	② 3.6△ ③ 15.5△	天井部は平らで、口縫 部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。外 側は天井部に左方向の ラケズリ。	密	良好	内面灰色 外面部	
	Po. 5 30	714	須恵器 壺	① 14.9△ ② 2.1△	口縫部の立ちあがりは やや内傾し、肩部は丸 くおさめる。受部はほ ぼ水平にのびる。	内外面とも横ナデ。風 化が著しい。	密	良好	内面灰白色 外面部	
	Po. 6 30	666	土師器 壺	① 17.5△ ② 6.0△	やや外縁気味に立ちあ がる。杯部、肩部は丸 みをもつ。	内外面ともナデ。	密	良好	内面棕色 外面部	

出土位置	遺物番号 推定番号 図版番号	取上番号	種 類	法 量 (cm)	形 態	手 法	胎 土	燒 成	色 調	備 考
尾高 16号墳	Po 8 30	699	土師器 高杯脚	② 2.15△	内高気味に立ち上がり、底部は丸く杯底部。	内面ナデ。外面、風化の為調整不明。	密	良好	内面橙色 外面橙色	Yz-22
	Po 9 30	700	土師器 高杯脚	② 4.30△	柱状部は内傾気味にのび、底部はむかって内湾気味に立ちあがる。	内外面に絞り目がみられる。	密	良好	内面橙色 外面橙色	Yz-19
	Po 10 30	707	土師器 高杯	② 4.7△	柱状部は内傾気味にのびる。杯底部は平坦。	柱状部外面に絞り目。 内面は細から杯部へむかう方向にケズリ。	密	良好	内面橙色 外面橙色	Yz-20
	Po 11 30	709	土師器 高杯	② 3.8△	内傾気味に柱状部はのびる。	外面に絞り目。内面はナデ。	密	良好	内面橙色 外面橙色	Yz-21
	Po 12 30	715	土師器 壺	① 8.8△ ③ 3.6△	やや外傾気味に立ちあがり、底部は丸くおさめる。頸部は丸く「く」の字状に屈曲する。内面の段は明顯。	内外面とも横ナデ。	密 石英(1mm程度) 含む	良好	内面にぶく 黄橙色 外面にぶく 黄橙色	Yz-14
	Po 13 30	662、668、 673、682、 697、670	須恵器 平瓶	② 10.0△	頸部は「く」の字状に屈曲し、肩部が張り、底部に向かってぼまっている。	内外面とも横ナデ。内面は瓶内に指痕斑痕が多数見られる。	密	良好	内面灰色 外面灰色	Yz-01
	Po 14 30	672	須恵器	① 9.4△ ② 6.2△	外傾気味に立ちあがり、底部は丸くおさめる。中に2本の凸線を施し、その内部に波状文を施す。	内外面とも横ナデ。	密	良好	内面灰色 外面灰色	Yz-08
	Po 15 30	694	土師器 高杯脚	② 2.8△ ④ 12.6△	「八」の字状に開く。高脚部、底部は丸くおさめる。	外面は風化のため調整不明(わずかにケズリが見られる)。内面にはハケメル風化のため不明瞭。	石英(3~1mm) 含む	良好	内面浅黃 橙色 外面浅黃 橙色	Yz-11
	Po 16 30	685	土師器 壺	① 12.4△ ② 5.6	口縁底部を丸くおさめる壺。	内外面ともナデ(風化著しく調整不明瞭)。	石英(1.5~1mm) 含む	良好	内面黄褐色 外面黃褐色	Yz-12
	Po 17 30	716	土師器 直口壺	① 12.6△ ② 4.7△	外傾気味にのびる頭部。底部は丸くおさめる。	内外面ともナデ。	石英(2~1mm) 含む	良好	内面暗赤 赤褐色 外面暗赤 赤褐色	Yz-09
S X - 4	Po 1 30	10、18	土師器 壺	① 12.8△ ② 3.9△	体部から口縁部にかけて内凹する。口縁底部は丸くおさめる。	外、内面ともヨコナデ。	密	良好	内面明褐色	Yz-13
	Po 2	10、18	土師器 壺	① 10.6 ② 4.8	体部から口縁部にかけて内凹する。口縁底部は上方に軽く立ち上がる。	外、内面ともヨコナデ。	密	良好	内面橙色 外面橙色	YY-06
尾高 37号墳	Po 1 29	450	須恵器 高杯	① 1.4△ ④ 12.0△	「八」の字状にひらがな彫刻。底部は引き出すようにしておさめる。	内外面ともナデ。	密	良好	内面褐灰色 外面灰黃褐色	YH-15
S X - 5	Po 3 29	493	須恵器 壺	① 12.0 ② 4.9	口縁部の立ちあがりは内傾し、底部を丸くおさめる。受部はやや上向きにのびる。底部は平たくなす。	外、内面ともヨコナデ。	密	良好	内面灰色 外面灰色	KH-9
	Po 4 29	494	須恵器 壺	① 14.0 ② 4.4	やや内凹する口縁部で口縁内側には段がついて天井部と口縁部の境に花形がめぐる。	外、内面ともヨコナデ。	密	良好	内面灰色 外面灰色	KH-10
	Po 5 29	495	須恵器 壺	① 14.5 ② 4.2	やや内傾する口縁部。底部は丸くおさめ、口縁内側に段がついて天井部と口縁部との境には花形がめぐる。	外、内面ともヨコナデ。	密	良好	内面灰色 外面灰色	KH-7

出土位置	遺物番号 神岡番号	取上番号	種器	類形	法量 [cm]	形 態	手 法	胎 土	燒 成	色 調	備 考
S X - 5	Po. 6 29	496	須 恵 器 杯	身	①12.2 ② 4.3 △	口縁部の立ち上がりはやや内傾し、端部は丸くおさめる。口縁部内側には沈線がある。受部はほぼ水平にのびる。底部は平底。	外面部受部より下はヘラケズリ。その他回転横ナデ。	密	良好	内面青灰色 外面青灰褐色～明綠灰色	小山 1
	Po. 7 29	497	須 恵 器 蓋	杯	①14.5 ② 0.5	やや内窪する口縁部。端部は丸くおさめ。口縁部内側に段がつく。天井部と口縁部の境に長い段をもつ。	天井部外面 1/4 に右方向のヘラケズリ。その他内外面は横ナデ。	密	良好	内面灰色 外面灰色	T - 6
	Po. 8 29	498	須 恵 器 杯	身	①11.7 ② 5.4 △	口縁部の立ち上がりはやや内傾し、端部は丸くおさめる。口縁部内側に段がつく。受部はやや上向きに延びる。底部は平底。	外面部下部 1/3 に左方向のヘラケズリ。その他内外面回転横ナデ。	密	良好	内面青灰色 外面明綠灰色	小山 2
1 号 横 穴 窓	Po. 1 31	545 - 72, 44, 74, 9	須 恵 器 高 無 蓋	杯	①12.6 ② 5.5	口縁部の立ち上がりはやや内傾し、端部は丸くおさめる。受部はやや上向きに延びる。底部は平底をなし、腹部は外に向かって広がる。	内外面とも回転横ナデ。 砂粒を含む	密	良好	内面青灰色 外面浅黃褐色～青灰色	Ku - 5
	Po. 2 31	45	須 恵 器 杯	蓋	①13.2 ② 3.6 △	天井部と口縁部との境には 2 条の沈線がある。また天井付近にも浅い沈痕がある。口縁部の内側には、しっかりとした沈痕がめぐらされる。	外面部天井部から口縁部の境の沈線にかけてはナデ、それより下の口縁部は横ナデ。 内面…ナデ。	密	良好	内面灰白色 外面灰白色	I - 4
	Po. 3 31	46	須 恵 器 杯	身	①14.2 ② 2.7 △	口縁部の立ち上がりはやや内傾し、端部は丸くおさめる。受部は上方に延びる。	外、内面とも回転ヨコナデ。	密	良好	内面灰褐色 外面灰褐色	YY - 0.2
	Po. 4 31	47	須 恵 器 杯	身	①12.0 ② 2.9 △	口縁部の立ち上がりはやや内傾し、端部は丸くおさめる。受部は上向きに延びる。	外面部…立ち上がり部分は回転ヨコナデ。身の部分はナデ。 内面…回転横ナデ。	密	良好	内面灰褐色 外面褐灰白色	YY - 0.1
	Po. 5 31	46	須 恵 器 杯	身	①12.2 ② 3.1 △	体部は弧を描きながら上方へ立ち上がる。口縁部は外反し、この部分は厚さが厚くなる。	外面部…口縁部近くは横ナデ。体部はケズリ後焼ナデ。 内面…ナデ。	密	良好	内面暗灰白色 外面暗灰白色	I - 3
	Po. 6 31	48	須 恵 器 杯	身	①10.85 ② 1.5 △	口縁部の立ち上がりは強く内傾し、端部は先端にいく程、薄になり、内面には浅い窪みがある。受部はやや上方に延びる。	外、内面とも横ナデ。	密	良好	内面灰白色 外面オリーブ灰色	Yz - 1.6
	Po. 7 31	81	須 恵 器 杯	身	①16.8 ② 2.7	口縁部の立ち上がりは外反気味に強く内傾し、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平に延びる。	外、内面とも横ナデ。	密	良好	内面灰白色 外面灰白色	Yz - 0.4
	Po. 8 31	51	須 恵 器 杯	蓋	①13.2 ② 3.3 △	口縁部端部から天井部にかけて垂直に近い立ち上がる。天井部と口縁部の境には 1 条の沈線を描す。口縁部は丸くおさめ、その内側には 1 条の沈線をめぐらす。	外面部天井部はナデ、天井部と口縁部の境の沈痕より下部は横ナデ。 内面…ナデ。	密	良好	内面灰白色 外面灰色	I - 1
	Po. 9 31	52	須 恵 器 杯	身	①11.0 ② 3.7 △	口縁部端部の立ち上がりは弱く外反しながら内傾する。端部は丸くおさめ。受部はほぼ水平に延びる。身の部分の外側には 1 条の沈線が施される。	外、内面とも回転横ナデ。 2mm 以内の砂粒を含む	密	良好	内面青灰色 外面暗青灰色～青灰色	T - 4

出土位置	遺物番号 神奈川県立 国歴史博物館 所蔵品番号	取上番号	種器	類器	法量 [ml]	形 態	手 法	粘 土	模 或 色	表 考
1 横 穴 墓	Po 10 31	43、71、 532、548、	須 惠 器	杯	①12.3± ②4.0±5	口縁部の立ち上がりはやや内傾し、端部は丸くおさめる。受部は水平に近いが、やや上向きに延びる。	外、内面とも回転模ナ ド。	密	良好 内面青灰色 外面青灰色 暗青色	小山
	Po 11 31	53	須 惠 器	杯	② 2.65△	杯身の底部にあたり、平底をなす。受部はやや上向きに延びる。	外面…底部の周辺のみをヘラケツリし、その上側…横模ナド。 内面…横模ナド。	密	良好 内面灰色 外面灰色	YH - 17
	Po 12 31	55	須 惠 器	杯	①13.8± ②3.75△	天井部と口縁部の境には、1条の沈線を施す。口縁部端部の内側には段がある。	外、内面とも天井部と口縁部の境の沈線より上側はナデ、下側は横模ナド。	密	良好 内面淡灰色 外面淡灰色 白色	I - 2
	Po 13 31	67、68	須 惠 器	杯	①11.4 ②3.3△	口縁部の立ち上がりはやや内傾して延び、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平に延びる。	外、内面とも回転模ナ ド。	密	良好 内面灰黑色 外面绿灰色	KH - 1
	Po 14 32	500	須 惠 器	長 頸 瓶	① 7.2 ②17.0 ④ 5.6	体部は球形で平底をなす。体部中央には3条の沈線が施される。また断面部近くに本の脚が刻めに剥離している。瓶頸から口縁部にかけては外傾する。	外面…口縁部から瓶頸にかけては回転模ナド、瓶頸から3条の沈線までをナデ。3条の沈線より下部は左方向へのヘラケツリ。 外面…回転模ナド。	緻密	良好 内面暗茶 褐褐色 外面暗茶 褐褐色	清水 - 2
	Po 15 32	499	須 惠 器	杯	① 9.9 ③ 4.0	天井部はほぼ平坦で、口縁部にかけて広がっていくが、端部近くは垂直に近くなる。端部は丸くおさめる。厚さは天井部分が最も厚い。	外面…ヘラケツリ後、横模ナド。 内面…回転模ナド。	密	良好 内面灰色 外面灰色	KH - 8
	Po 16 32	501、647	須 惠 器	蓋	①14.7 ② 4.4	天井部と口縁部の境には1条の沈線を施す。口縁部の端部の内側には明瞭な段がある。	外面…天井部に左方向へのヘラケツリ。その下方は横模ナド。 内面…横模ナド。	やや粗 4mm～5 mm大の石 を含む	良好 内面内外 とも灰白 外面部内外 とも灰白	YH - 1
	Po 17 32	506	須 惠 器	杯	①12.4 ② 4.8	口縁部の立ち上がりは軽く外しならび内傾する。端部は丸くおさめる。受部はやや上向きに延びる。底面は平底をなす。	外面…口縁部から杯身の中间までを回転模ナド。底部近くを左方向へのヘラケツリ。底面はヘラ切り未調整である。	密	良好 内面灰白色 外面灰色	YH - 2
	Po 18 32	502	須 惠 器	杯	①11.4 ② 4.1	口縁部の立ち上がりは軽く外しならび内傾する。端部は丸くおさめる。受部はやや上向きに延びる。底の部分の面積はやや狭い。	外面…口縁部から身の中间までをナド。身の下半分近くをヘラケツリ。底面はヘラ切り後ナド。 内面…回転模ナド。	密	良好 内面青灰色 外面明緑灰～灰白色	小山 3
	Po 19 32	503	須 惠 器	杯	①14.6 ② 4.0	天井部と口縁部の境には沈線を施す。天井部は平底である。口縁部の端部の内側には段がある。	外面…天井部はヘラケツリ後の、ナデ調整。 口縁部にかけては横模ナド。 内面…不定方向のナド。	密 0.2mm以 内的砂粒 を少し含 む	良好 内面灰白色 外面灰白色	T - 5
2 号 室	Po 20 32	504	須 惠 器	杯	①14.0 ② 0.6	口縁部の立ち上がりは内傾する。端部は丸くおさめる。受部は上向きに延びる。底の部分の面積はやや狭い。	外面…口縁部から身の中间までを横模ナド。底部近くをヘラケツリ。 内面…横模ナド。	密	良好 内面绿灰色 外面绿灰色	KH - 11
	Po 21 32	506	須 惠 器	杯	①11.2 ② 3.9	口縁部の立ち上がりはやや内傾する。端部は丸くおさめる。受部は水平に延びる。底は平底である。	外面…口縁部から身の中间にかけては回転模ナド。身の底辺近くはヘラケツリ。 内面…横模ナド。	密 (1mm以 下の砂粒 を含む)	良好 内面灰白色 外面灰白色	清水 - 1
3 号 室	Po 22 32	507	須 惠 器	杯	①10.4 ② 4.1	口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。受部は上向きに延びる。	外面…口縁部から身の中间にかけては回転模ナド。底部近くはヘラケツリ。 内面…横模ナド。	密 (3mm以 下的砂粒 を含む)	良好 内面暗青 灰色 外面暗青 灰色	T - 7

出土位置	遺物番号 神奈川番号	取上番号	種類	頸部	法規 [cm]	形 唐	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1 号 横穴墓	Po. 23 31	529	須 惠 器 杯	身	①11.9△ ② 2.8△	口縁部の立ちあがりは内傾し、縁部は丸くおさめる。	外面部とも横ナデ。	密	良好	内面灰白色 外面灰白色	Yz-25
	Po. 24 31	530	須 惠 器 杯	身	② 2.8△ ④ 9.7△	口縁部は外方へ大きく広がり、形が伸びるが、縁部近くで角度が変わり、外反が弱くなる。縁部はやや外方に突出する。	外面部とも回転横ナデ	密	良好	内面灰白色 外面灰白色	小山 10
	Po. 25 31	545	須 惠 器 杯	身	①14.2△ ② 3.0△	体部内壁を搔きながら上方へ傾かう。口縁部は外反し、この部分は厚みが薄くなる。	外面部とも横ナデ。	密	良好	内面灰白色 外面灰白色	小山 16
	Po. 26 31	532, 546 581	須 惠 器 杯	身	①13.5△ ② 3.8△	口縁部の立ちあがりは内傾し、縁部は丸くおさめる。受部はほぼ水平に延びる。	内、外面部とも回転横ナデ。	密	良好	内面暗青 灰色 外面暗青 灰色	小山 8
	Po. 27 32	580	須 惠 器 杯	身	① 9.2 ② 3.7	口縁部の立ちあがりは内傾し、縁部は丸くおさめる。受部はほぼ水平に延びる。底部は平底である。	外面部…口縁部から身の中程にかけて回転ナデ。その下方の底部近くは「うおこ」し横ナデ。 内面部…回転横ナデ。	密	良好	内面灰白色 ~灰色 外面暗青 灰色	小山 9
	Po. 29 31	663	須 惠 器 口縁部		② 2.5△ ③ 13.0△	口縁部は外傾し、縁部は丸くおさめる。口縁下部には浅い弦線を施し、腹になっている。	外面部…横ナデ。 内面部…回転横ナデ。	密	良好	内面青灰 色 外面青灰 色	小山 17
	E 1 32	637	耳 環		⑥ 2.25 ⑦ 3.15	環状を呈し、断面は円形をなす。					銅環 渡金の有無不明 Yz-23
	E 2 32	649	耳 環		⑥ 2.20 ⑦ 3.00	環状を呈し、断面は円形をなす。					銅環 渡金の有無不明 Yz-24
	F 1 32	638	鉄 鍋		⑧11.9△ ⑨ 3.2△	丸二刃柳の葉状の形態を示す。	基部に木質残る。				O - 9
	F 2 32	660	鉄 器		⑥ 2.8 △ ⑦ 0.96△	半円形を呈し、断面は四角形をなす。					O - 10
チラス遺構	Po. 1 33	563, 572, 555, 643	土 器 甕		①16.6△ ③ 17.3△	口縁部は退化した楕円形で、内側は直線的で、縁部は平面をもつ。口縁下端の突起は出られない。肩部は卵形をなす。	外面部…口縁部～颈部はナデ。肩部～脚部はハケ調整。 内面部…口縁部～颈部はナデ。肩部～脚部はヘタケズリ。	密（1~4 mmの大砂粒を含む）	良好	内面浅黄色 ~白色 表面全体にぶい暗灰白色	YH-10
	Po. 2 33	616	土 器 高	杯	② 2.1△ ④ 9.0△	高杯側の横断面で、筒部は直線的で、縁部は大きく広がる。	外、内面部ともナデ。	密	良好	内面橙色 外面橙色	YH-12
	Po. 3 33	25, 589	土 器 高	杯	③ 3.1△ ④ 11.2△	高杯側の横断面で、筒部は直線的で、縁部で大きくなっている。	外面部…ナデ。 内面部…ケズリ後ナデ。	密	良好	内面橙色 外面橙色	YH-7
	Po. 4 33	540, 542, 642	須 惠 器 高	杯	⑥ 6.0△ ④ 12.8△	高杯の脚部分で、筒部は大きくなっている。縁部では平坦となる。	外、内面部とも回転ナデ。	やや粗（0.5 mm ~1 mmの大砂粒を多く含む）	良好	内面暗灰 色～オリ ーブ灰色 外面暗灰 色～オリ ーブ灰色	清水-21
	Po. 5 33	540, 547, 557, 607, 611	土 器 甕		①10.4△ ② 4.6	体部は内窓し口縁部に至る。口縁部は丸くおさめる。底部はわずかに平底をなす。	風化のため調整不明。	密	良好	内面橙色 外面橙色	YH-8

出土位置	遺物番号 発掘品番 記入番号	取上番号	種類 器	法量 (㎤)	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
テラス遺構	Po 6 33	539	須恵器 杯	① 3.3△ ② 12.8△	天井部と口縁部の間に 捻拂を2条有する。 口縁部内側には浅い 段がある。	外、内面とも横ナデ。	密	良好	内面にぶ い褐色 外面にぶ い褐色	小山 1 9
	Po 7 33	19、582、 583、587、 561、627、 630、632、	須恵器 兜	① 19.2 ② 6.9	口縁部は外傾する。口 縁端部には2段の口拂 帶を有する。上段の中 程はやや突出している。 口縁部の下方には比較 的施し、その間には波 状文がみられる。	外、内面とも横ナデ。 外面にはその上に自然 施が施される。	密	良好	内面灰褐色 外面灰褐色 ~浅黄色	Y H - 9
	Po 8 33	534、591、 588、626、	須恵器 把手付直 口壺	① 7.9△ ② 6.5△	体部は球形に近く、口 縁部はやや外傾する。 肩部には把手の跡が残 っている。	外面・口縁部から体部 の上側にかけて回転横 ナデ。 内面・回転横ナデ。	密	良好	内面青灰 外面暗青 灰色	小山 1 2
	Po 9 33	604	須恵器 杯	① 12.0△ ② 2.9△	口縁部の立ち上がりは やや内傾気味であるが 垂直に近く、底部は丸く おさめる。受部は頗 く、水平に延びる。	外面…立ち上がりから 受部にかけては横ナデ、 身の下方にはヘラケズ りがみられる。 内面…回転横ナデ。	密	良好	内面灰白 色 外面明綠 灰色	小山 1 8
	Po 10 33	645、547	土師器 高杯	① 15.7 ② 5.4△	高杯の杯部で、頗く内 窓気味であるが、口縁 部附近で大きく広がる。 口縁部底は丸くおさ める。	外面…ナデ後ハケメ調 整。その後赤彩を施す。 内面…ナデ後ハケメ調 整。その後底部に赤彩 を施す。	密	内外とも 赤彩有り	内面橙 外面橙	Y H - 6
	Po 11 33	24	土師器 高杯	① 17.3△ ② 3.7△	口縁部は外反し、雄部 は平坦、杯底部は平ら	内外面に赤色塗彩。外 面は略文風ヘラミガキ の後施ナデ。 内面は輪文を施す。	密 砂粒。石 英含む	良好	内面赤褐色 外面赤褐色	O - 1 1

挿 図

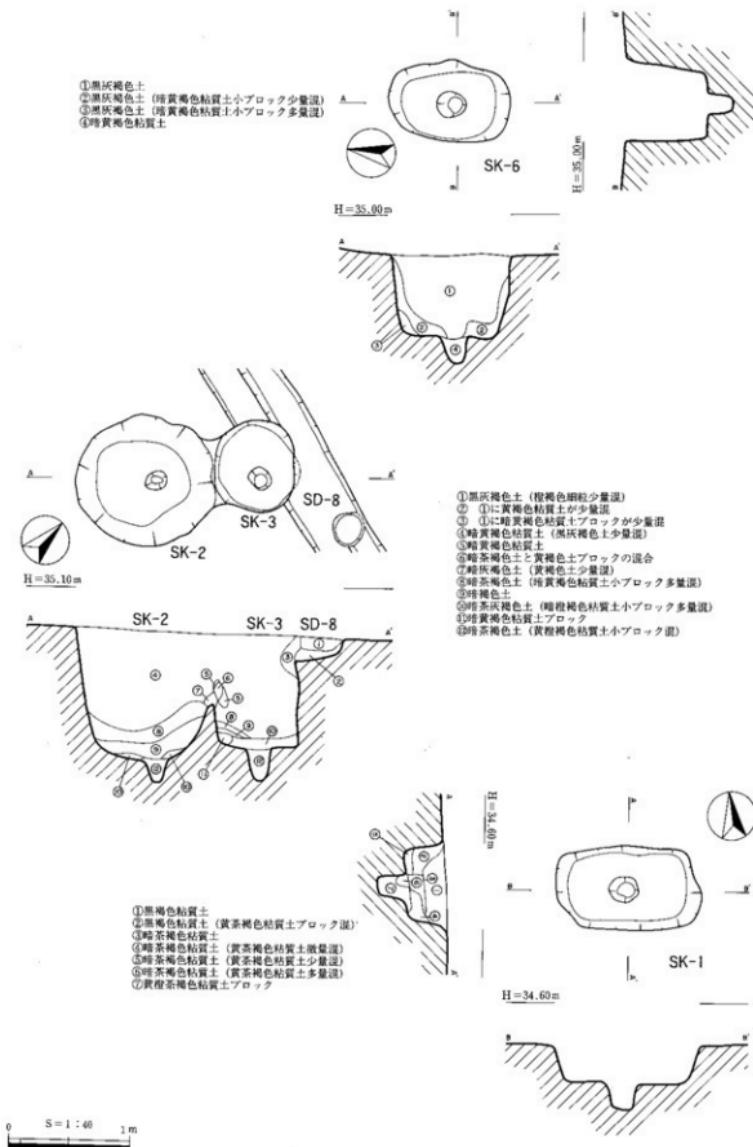
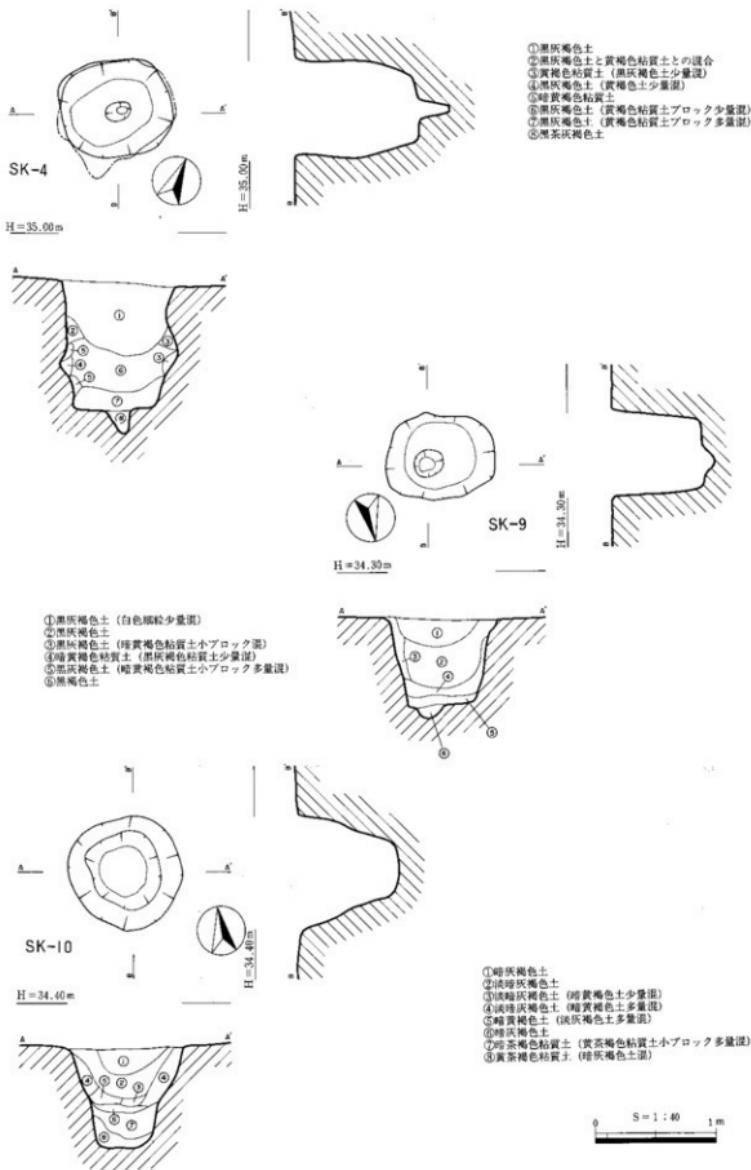
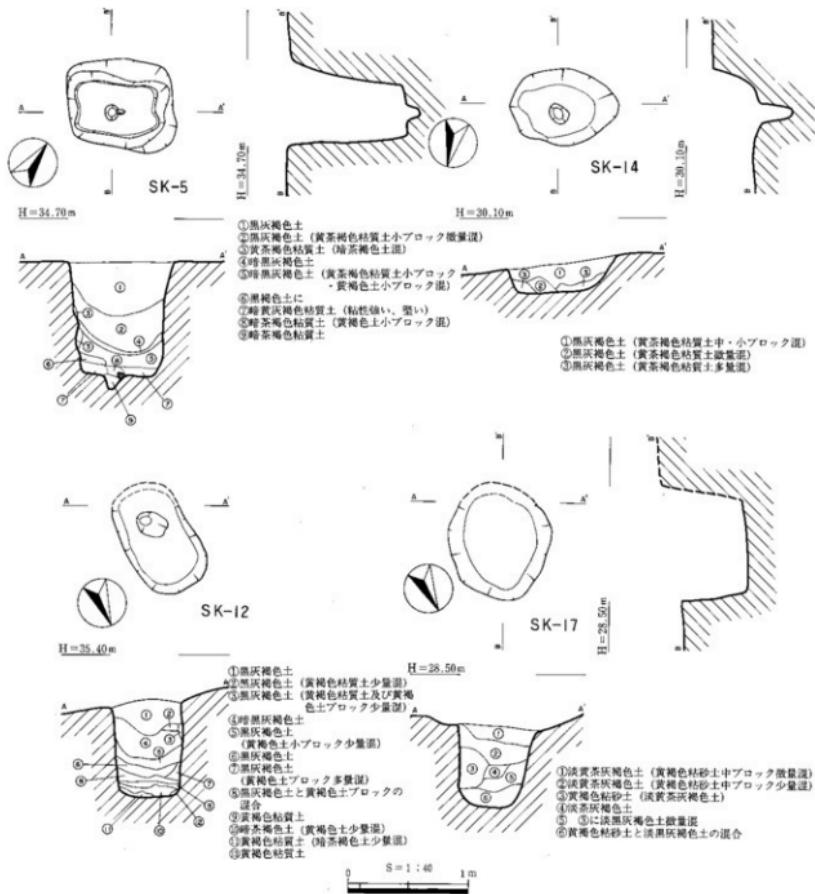


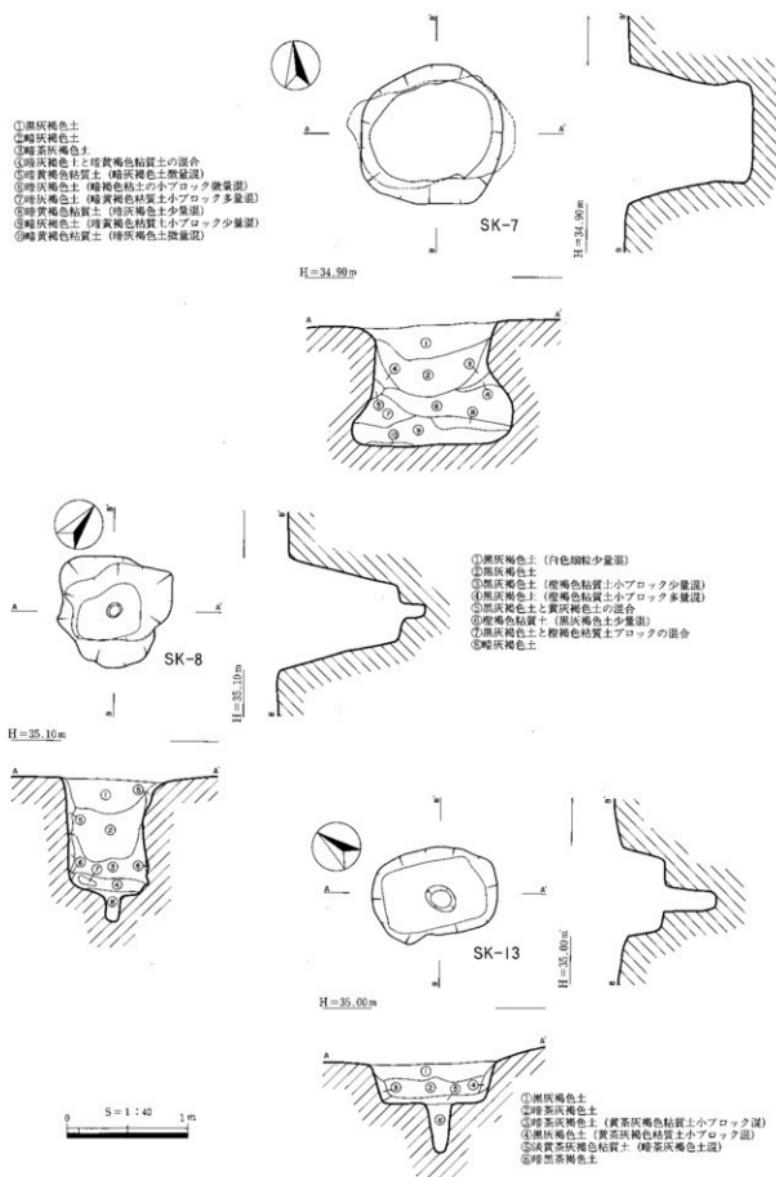
図4 SK-6 SK-2・3 SK-1 遺構図



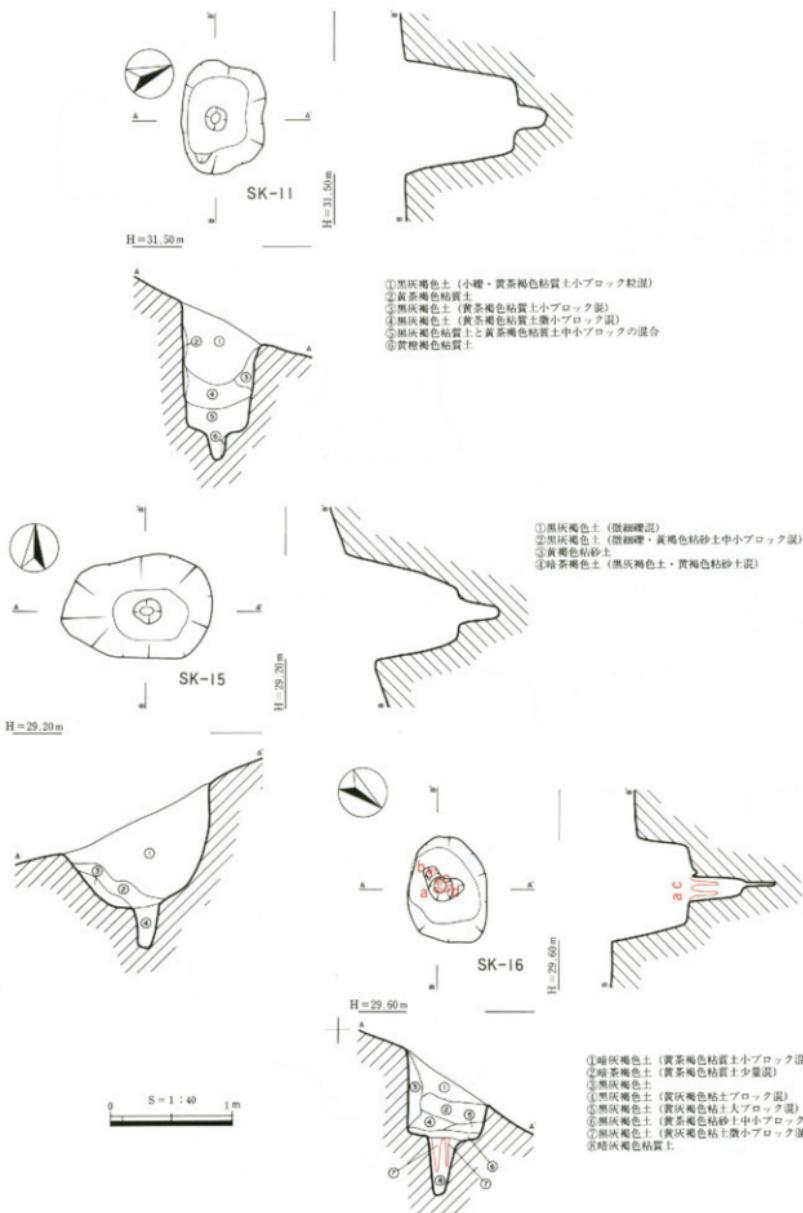
挿図5 SK-4 SK-9 SK-10 造構図



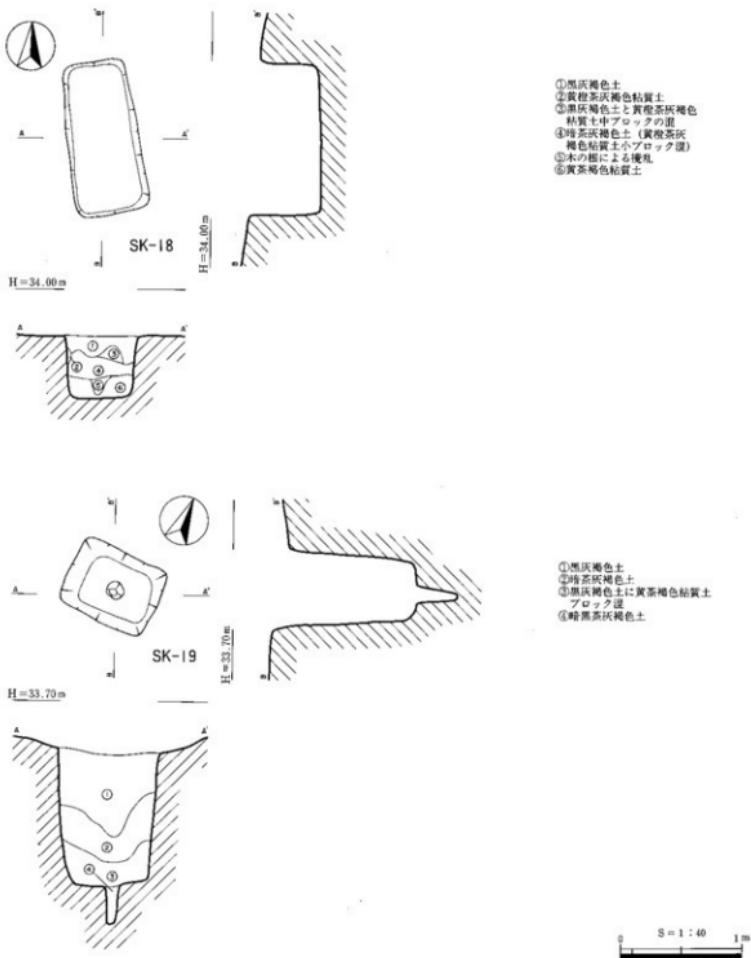
挿図 6 SK-5 SK-14 SK-12 SK-17 遺構図



挿図 7 SK-7 SK-8 SK-13 遺構図



插図 8 SK-11 SK-15 SK-16 遺構図



插図9 SK-18 SK-19 造構図

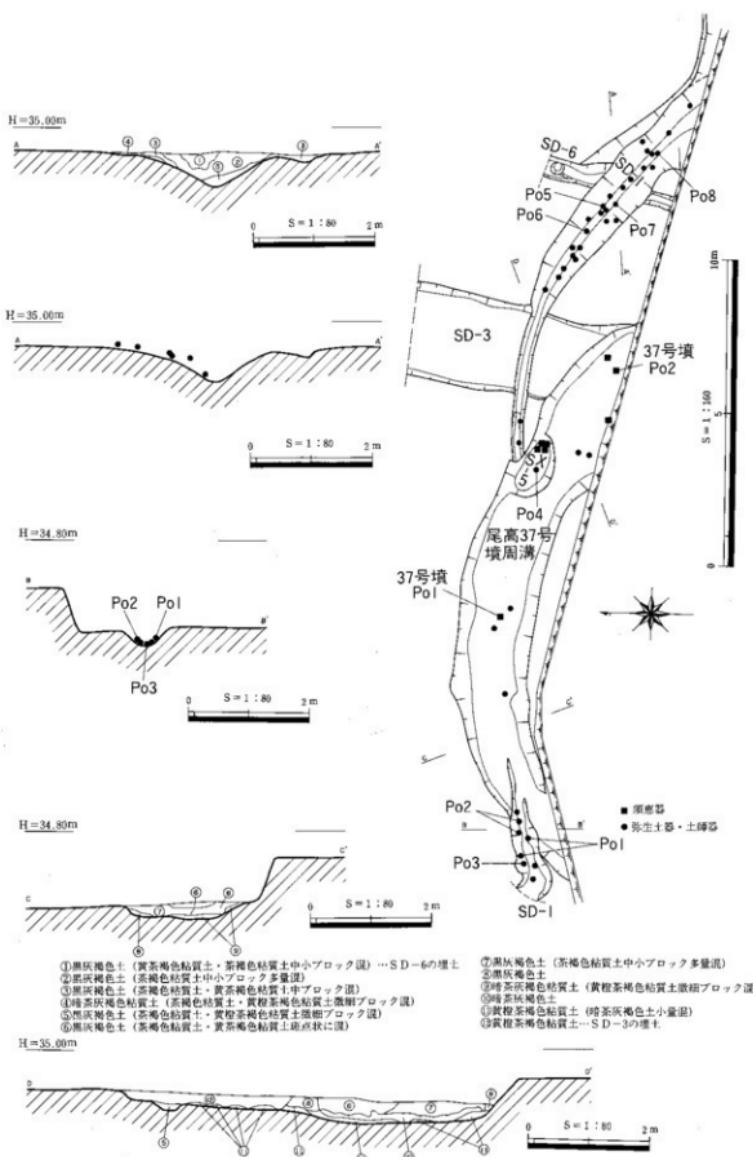
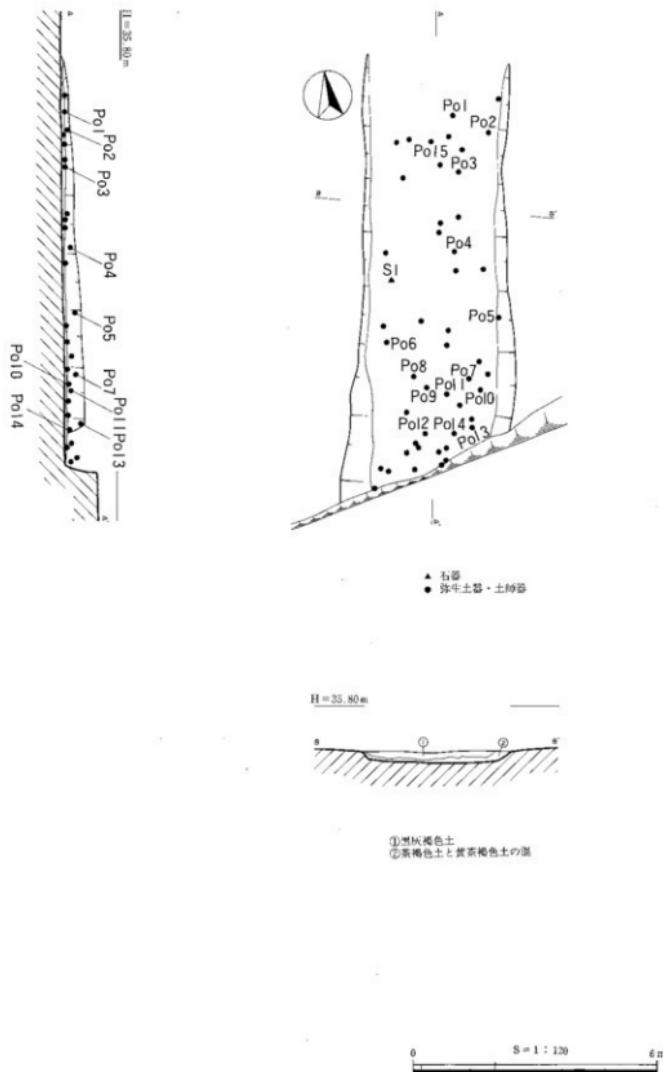


図10 SD-1 尾高37号墳 遺構図



插図11 SD-2 遺構図

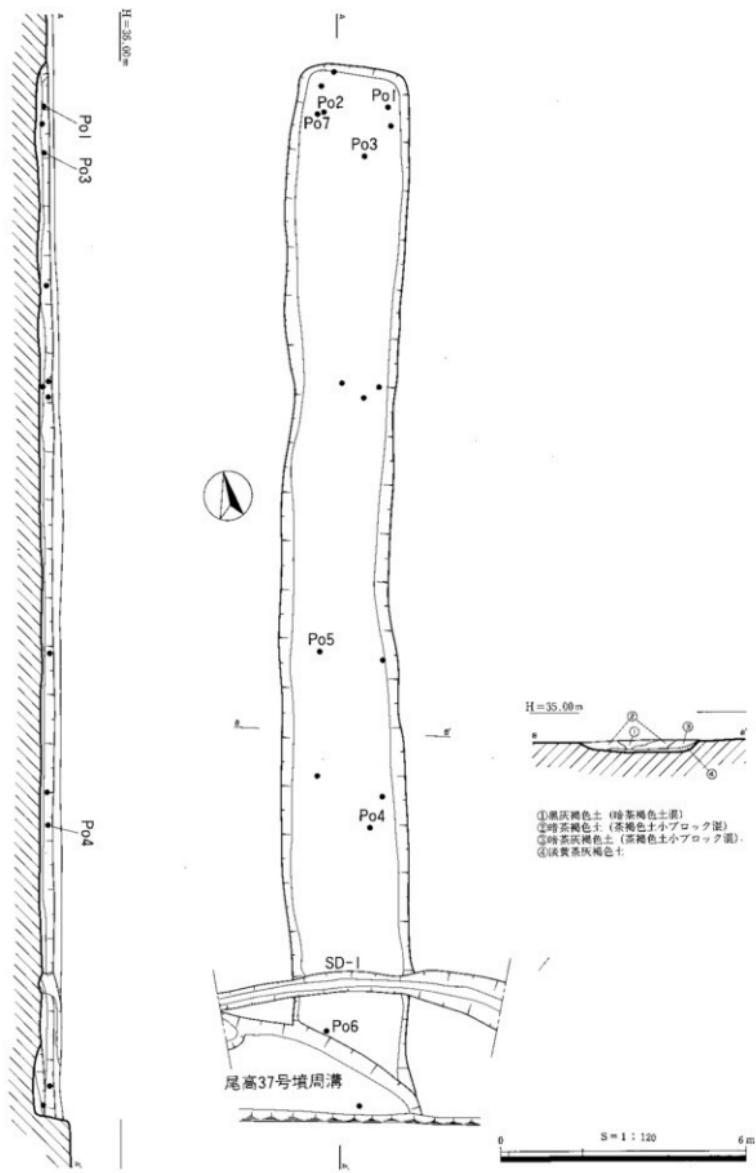
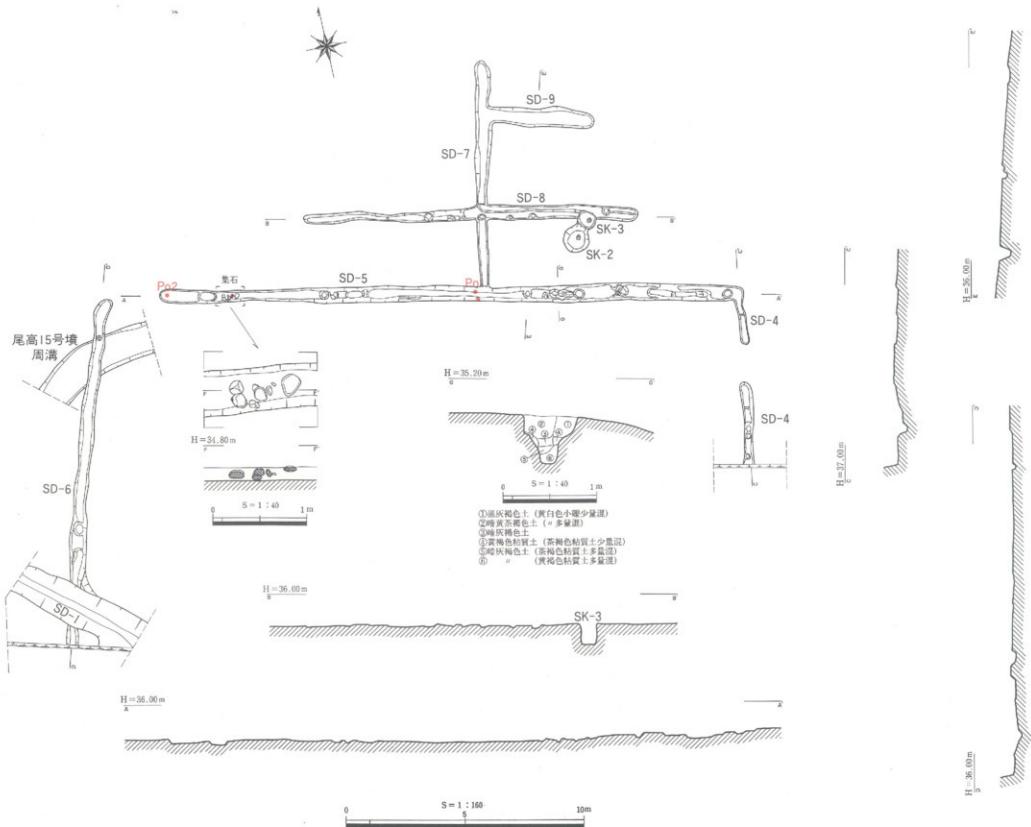
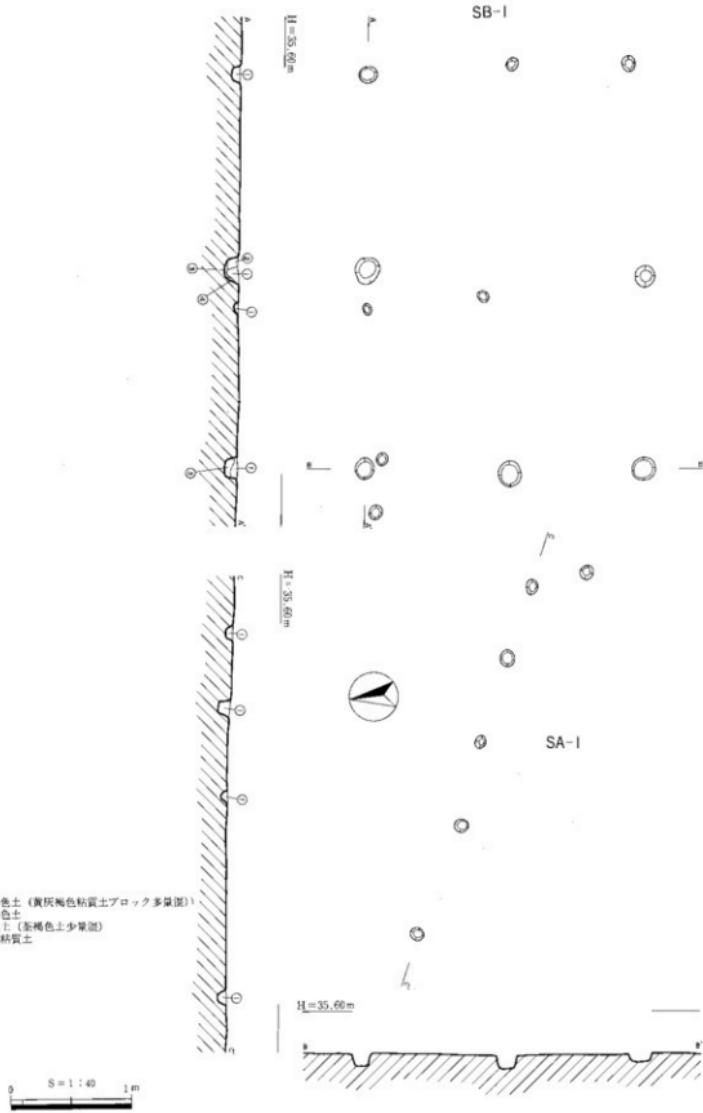


図12 SD-3 造構図

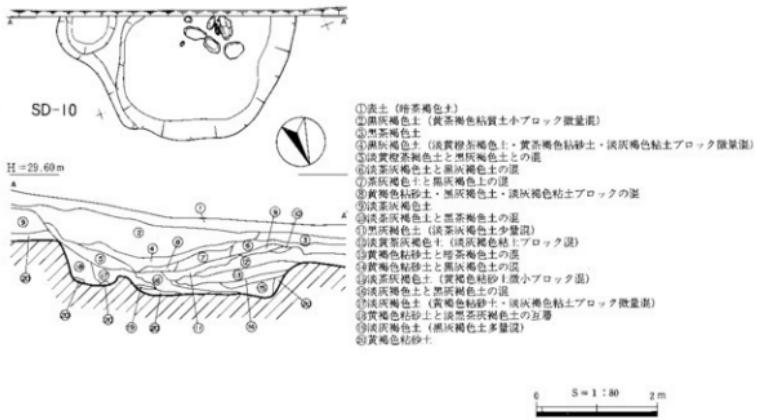
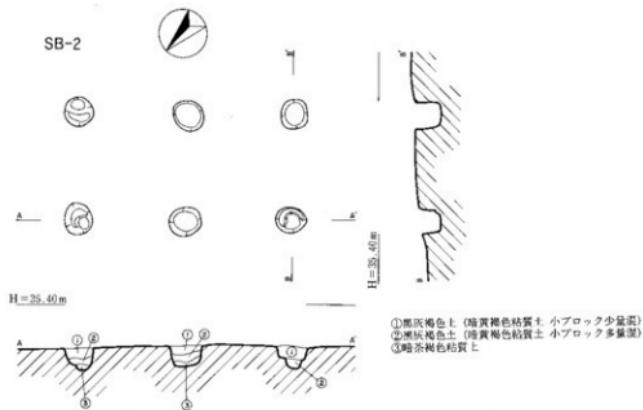


挿図13 SD-4～9 遺構図

- ① 黒灰褐色土（黄灰褐色粘質土ブロック多量図）
 ② 黒灰褐色土
 ③ 黑褐色土（茶褐色土少量図）
 ④ 茶褐色粘質土

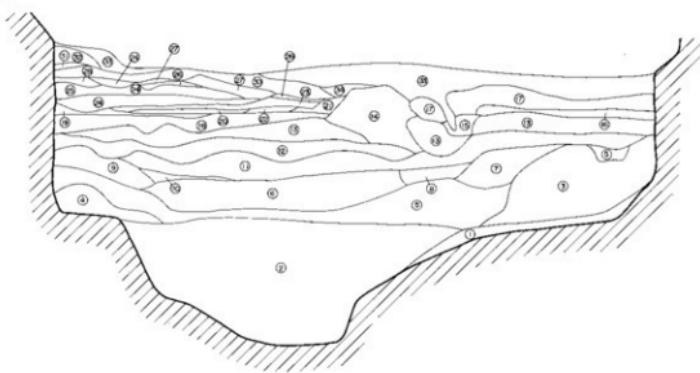


挿図14 SB-1 SA-1 遺構図



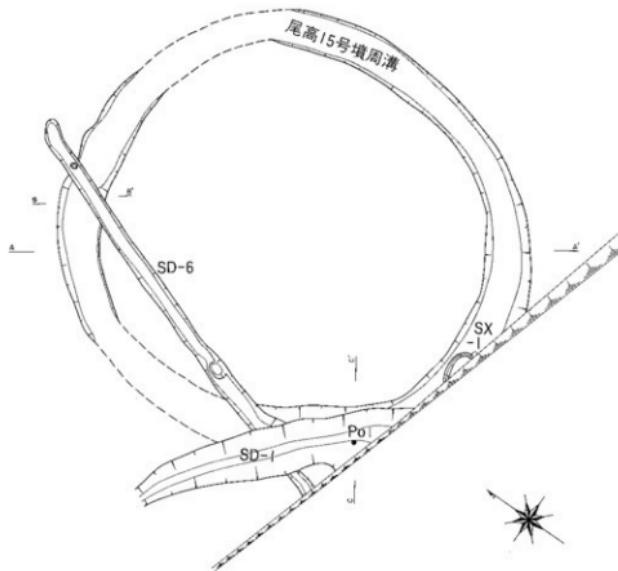
挿図15 SB-2 SD-10 造構図

H = 28.00 m



$S = 1 : 40$

挿図16 北側谷部トレンチ西壁 断面図



H = 36.00m



H = 36.00m



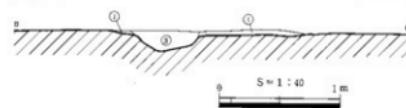
①黒灰褐色土

②黒灰褐色土（黄茶褐色粘質土・茶褐色粘質土ブロック混）

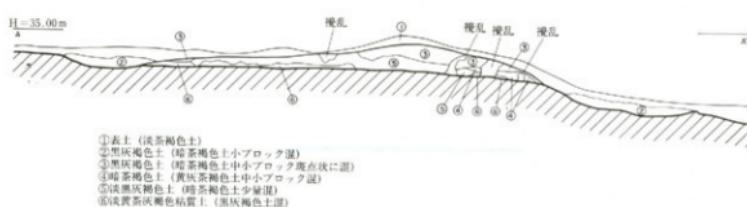
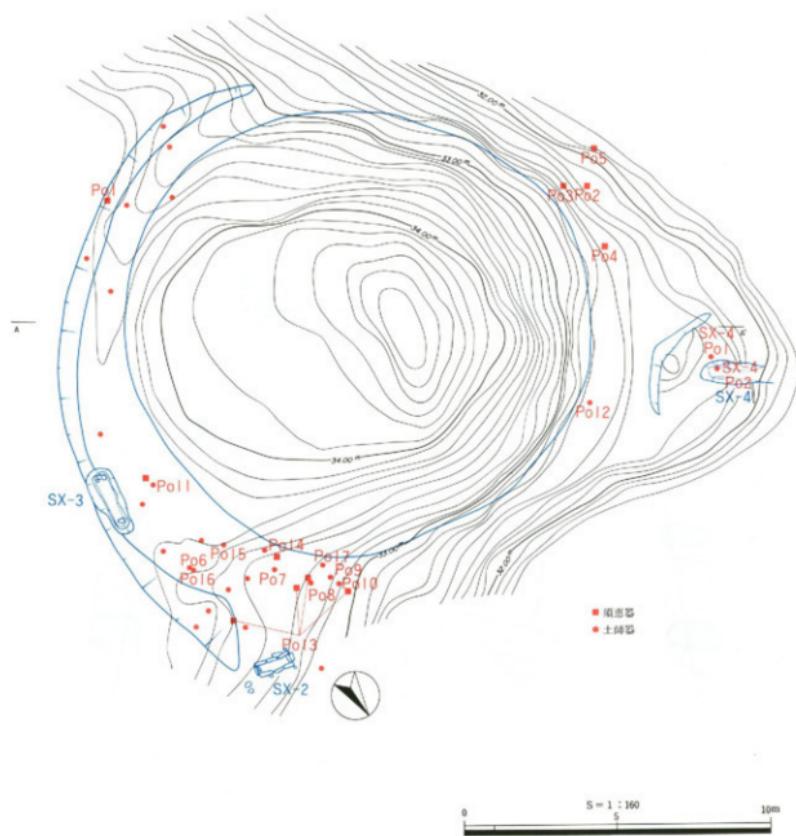
③黒灰褐色土（黄茶褐色粘質土・茶褐色粘質土中小ブロック多発混）SD-6の堆土

④黒灰褐色土（黄茶褐色粘質土微細ブロック混）SD-1の堆土

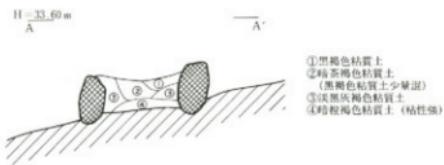
H = 34.80m



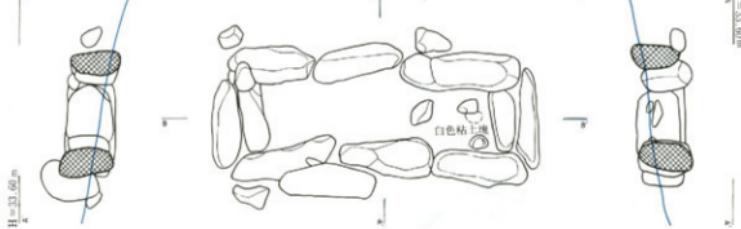
插図17 尾高15号墳遺構図



插図18 尾高16号填塗丘測量図 遺物出土位置図

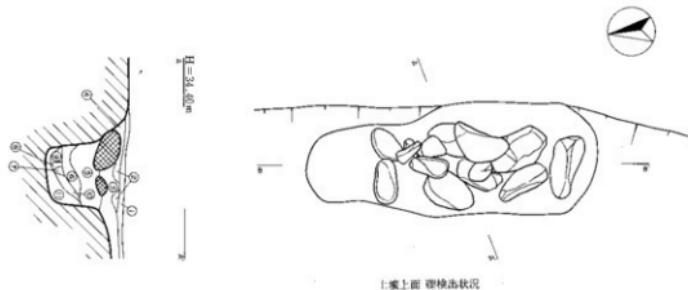


$$\frac{H = 33.60 \text{ m}}{8}$$



$S = 1 : 20$

挿図19 SX-2 遺構実測図



- ①暗黑色褐色土
- ②黑灰褐色土
- ③暗黄褐色粘质土
- ④浅灰褐色粘质土
- ⑤浅黄褐色粘质土
- ⑥深灰褐色粘质土
- ⑦深灰褐色粘质土 (粘性土)
- ⑧浅灰褐色粘质土 (")
- ⑨暗黄褐色粘质土 (")
- ⑩浅黄褐色粘质土 (")

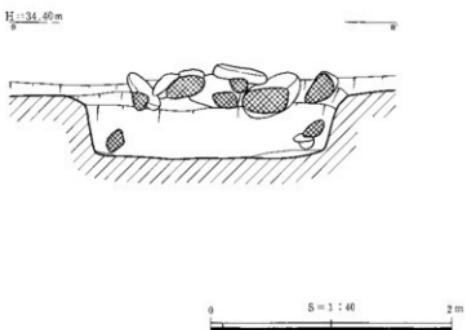
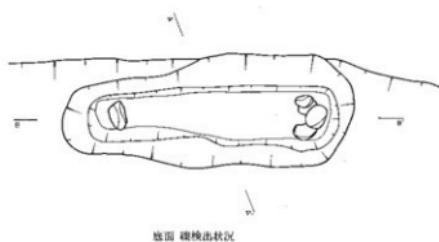
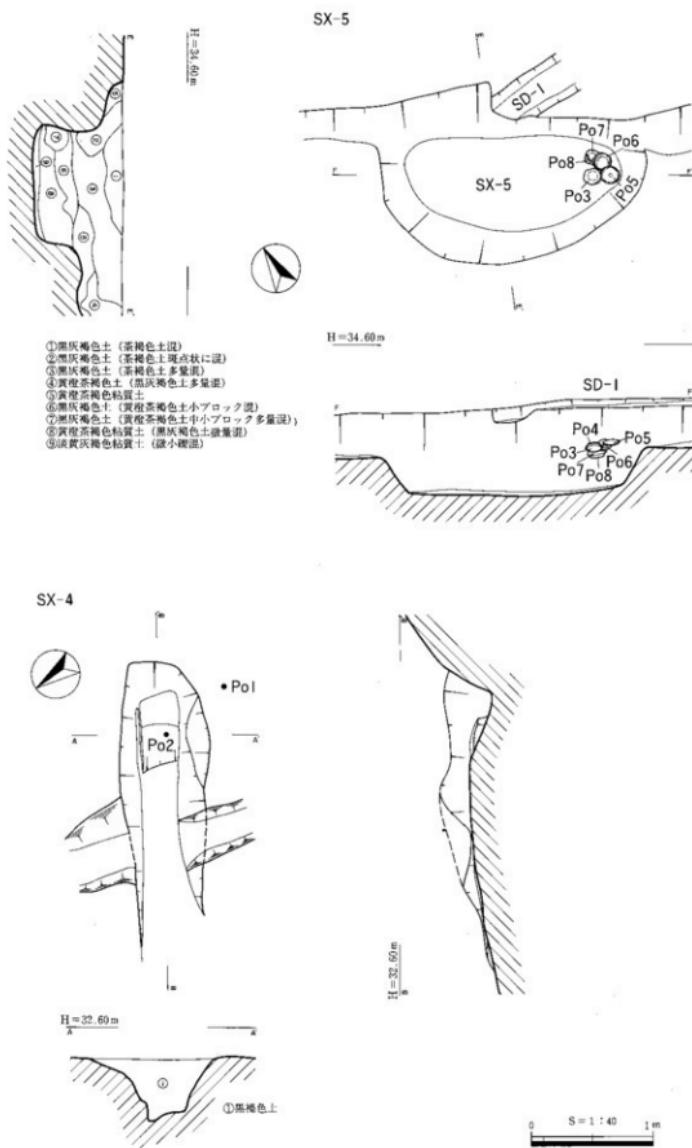
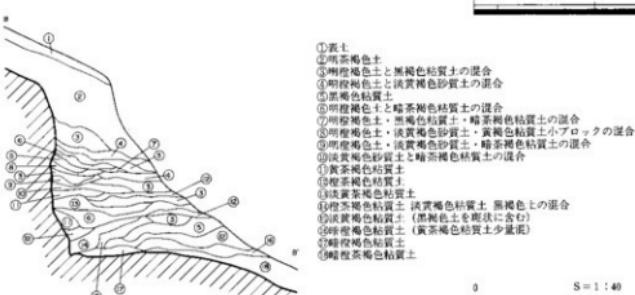
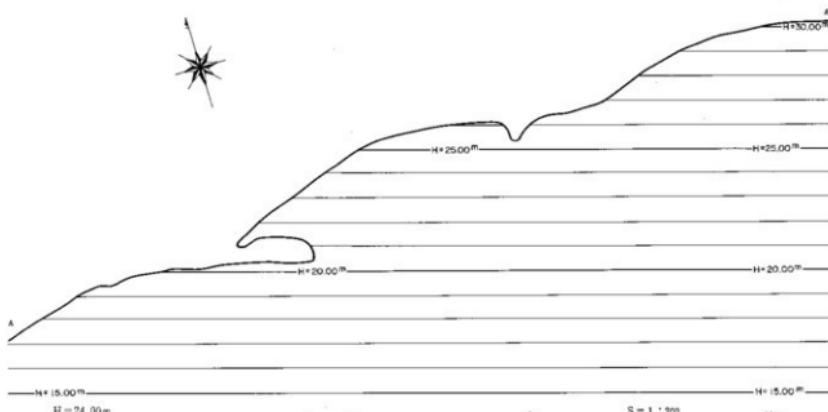
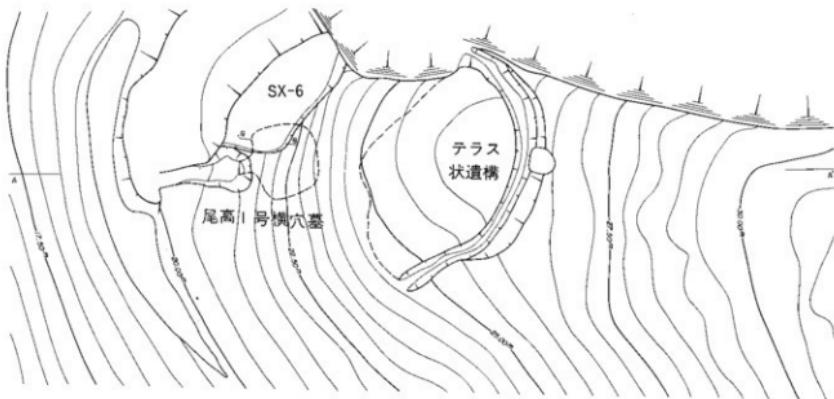


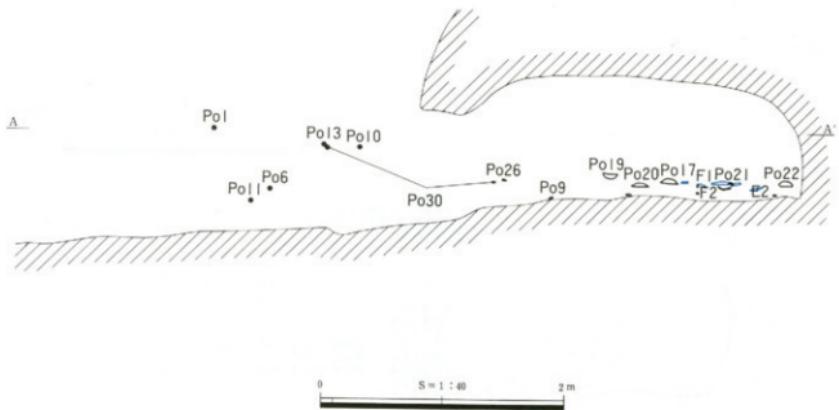
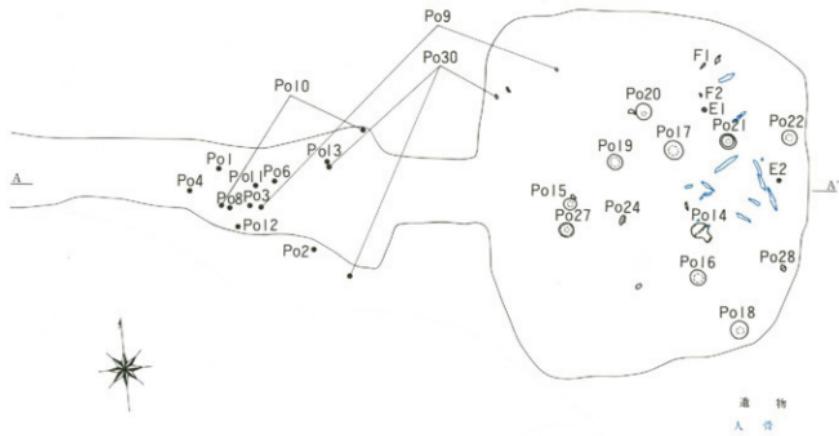
插图20 SX-3 造構図



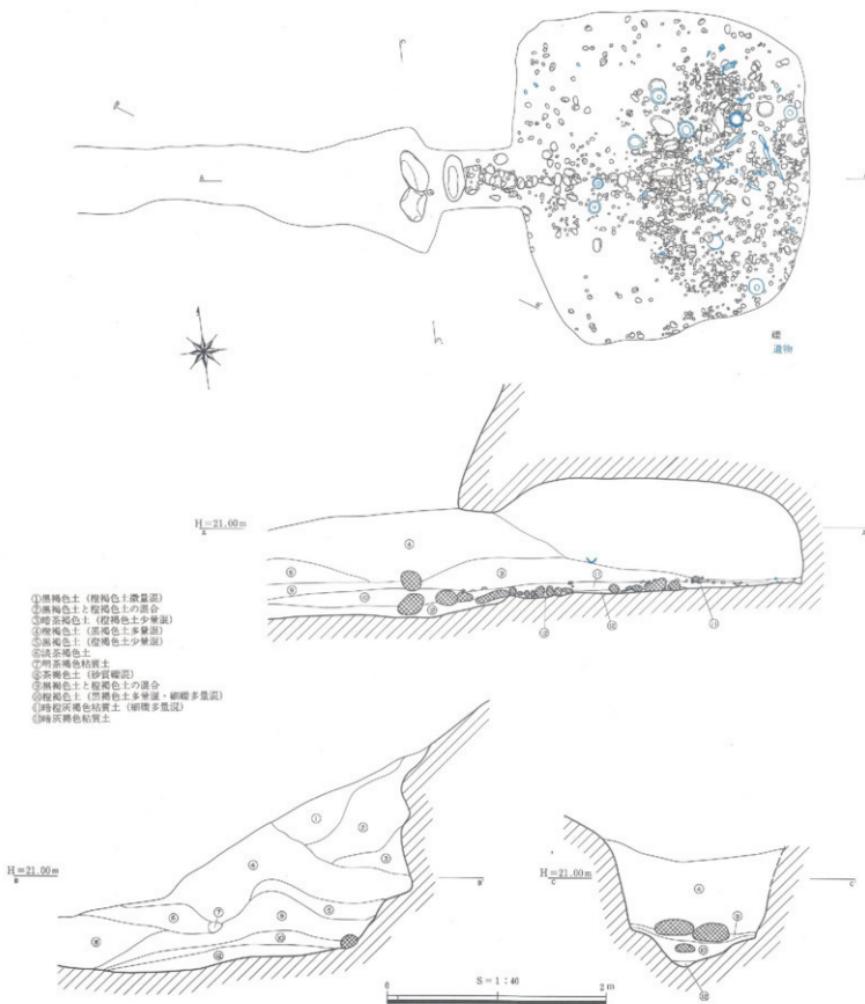
挿図21 SX-5 SX-4 遺構図



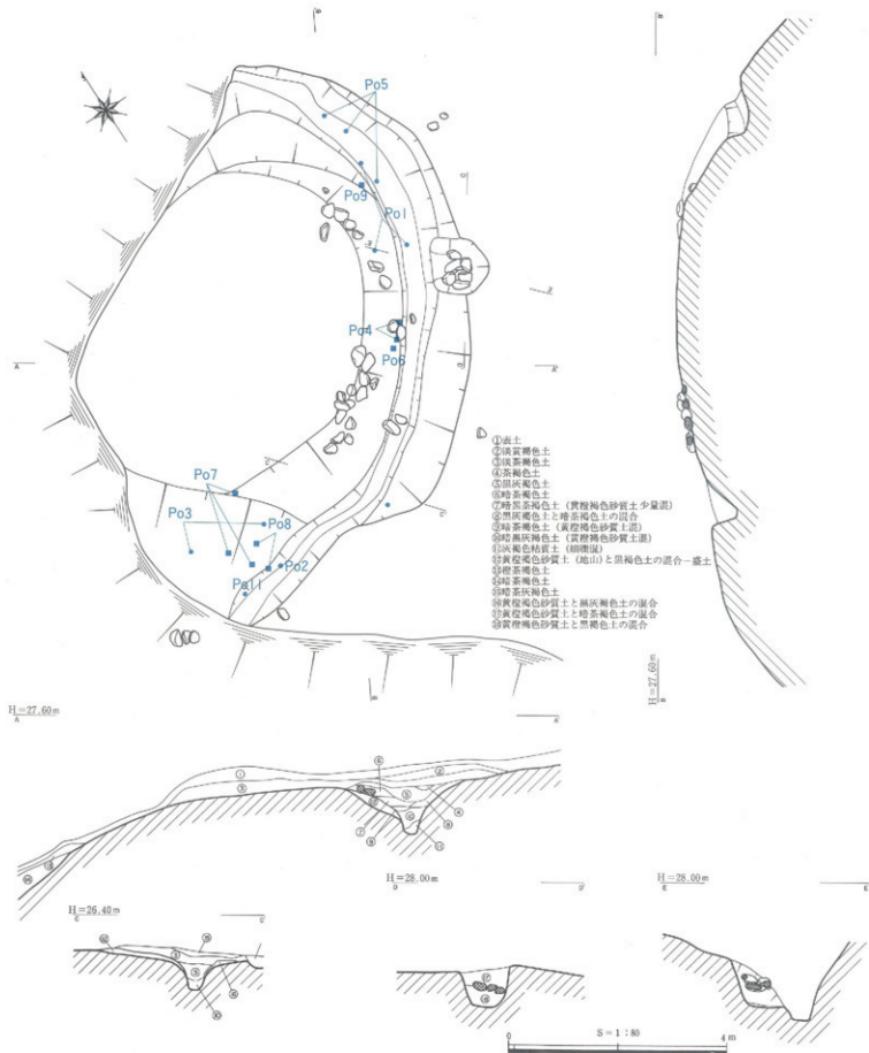
挿図22 尾高1号横穴墓・テラス状遺構・SX-6 周辺地形図 SX-6断面図



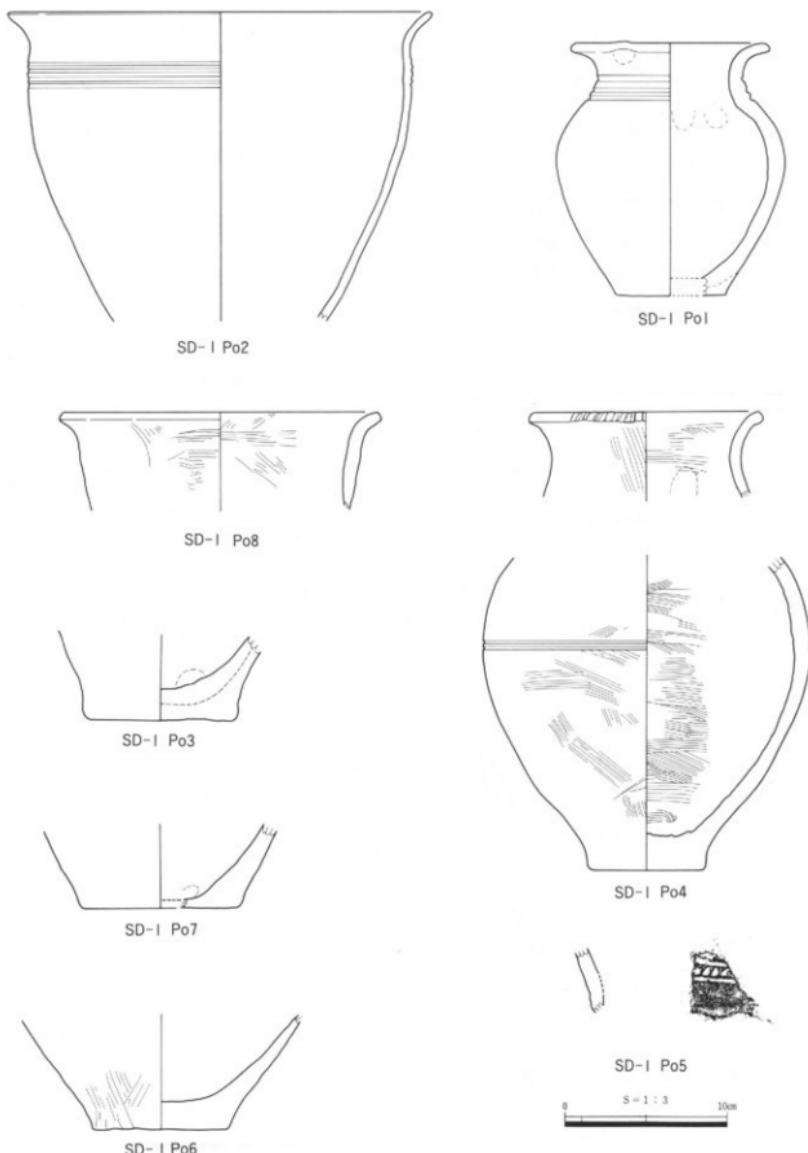
挿図23 尾高1号横穴墓 遺物検出状況図



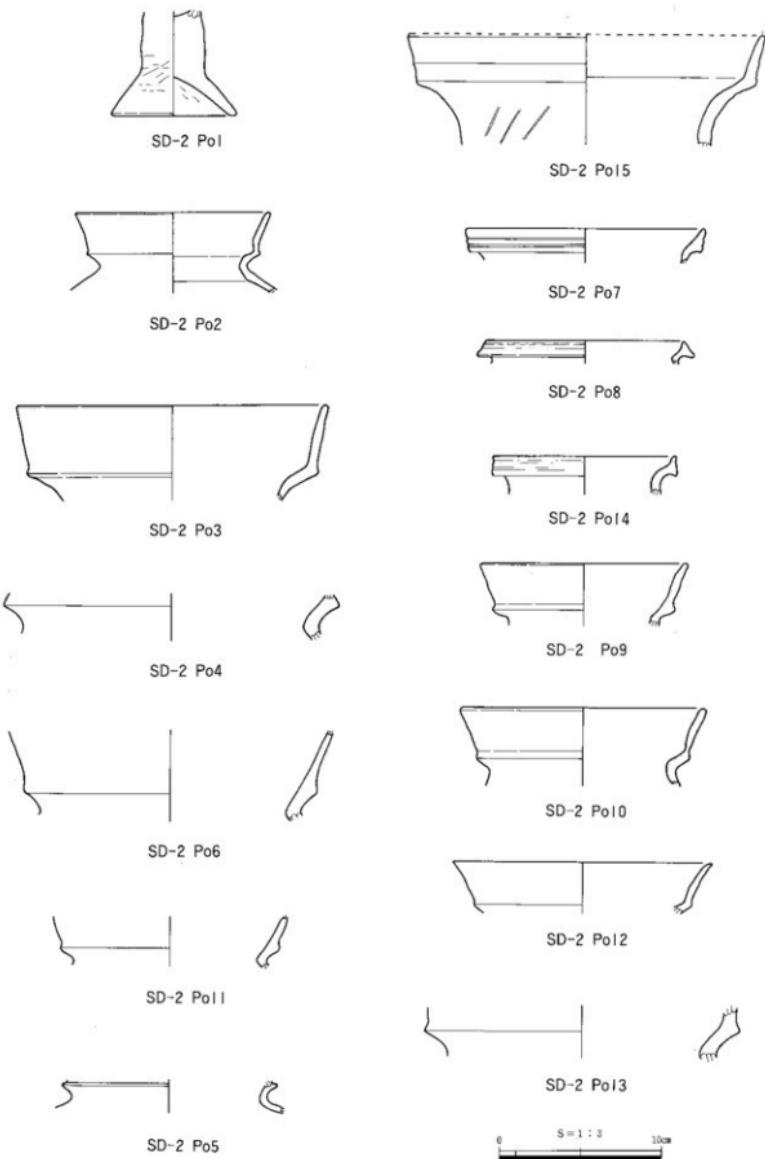
挿図24 尾高1号横穴墓 磁検出状況図 造構断面図



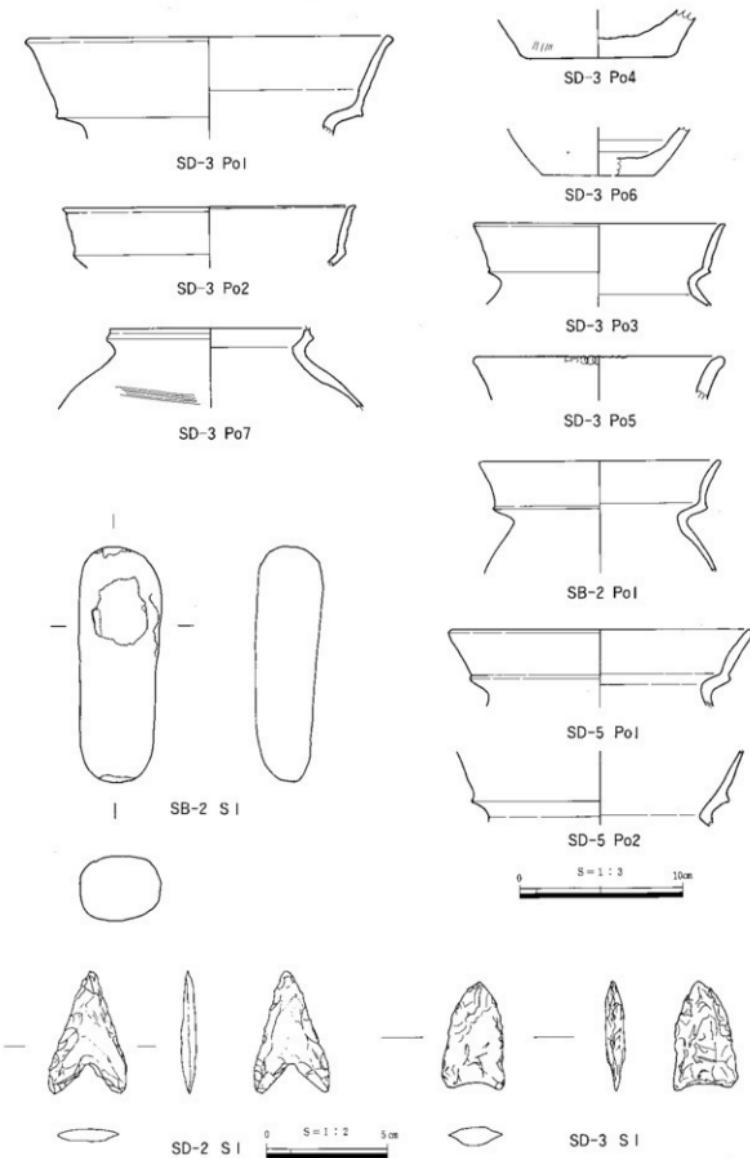
挿図25 テラス状造構 遺構図



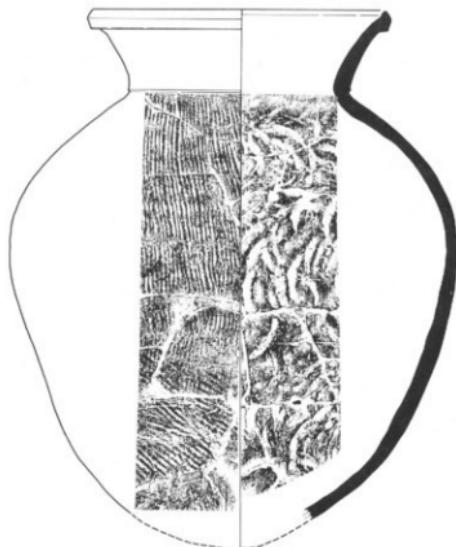
挿図26 SD-I 出土遺物実測図



插図27 SD-2 出土遺物実測図



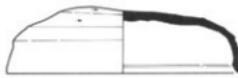
挿図28 SD-2 SD-3 SD-5 SB-1 出土遺物実測図



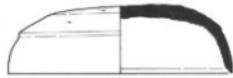
15号墳周溝 Po1



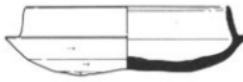
37号墳 Po1



SX-5 Po5



SX-5 Po4



SX-5 Po6



SX-5 Po3

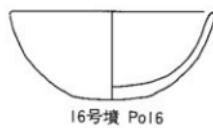
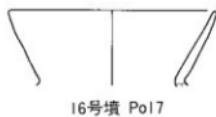
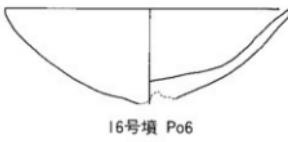
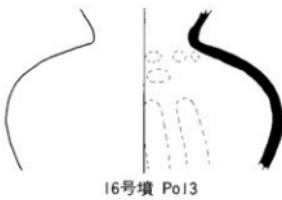
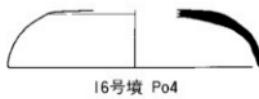
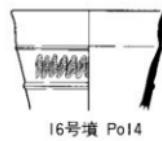
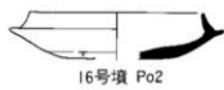
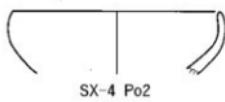
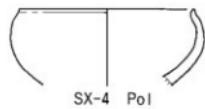


SX-5 Po7



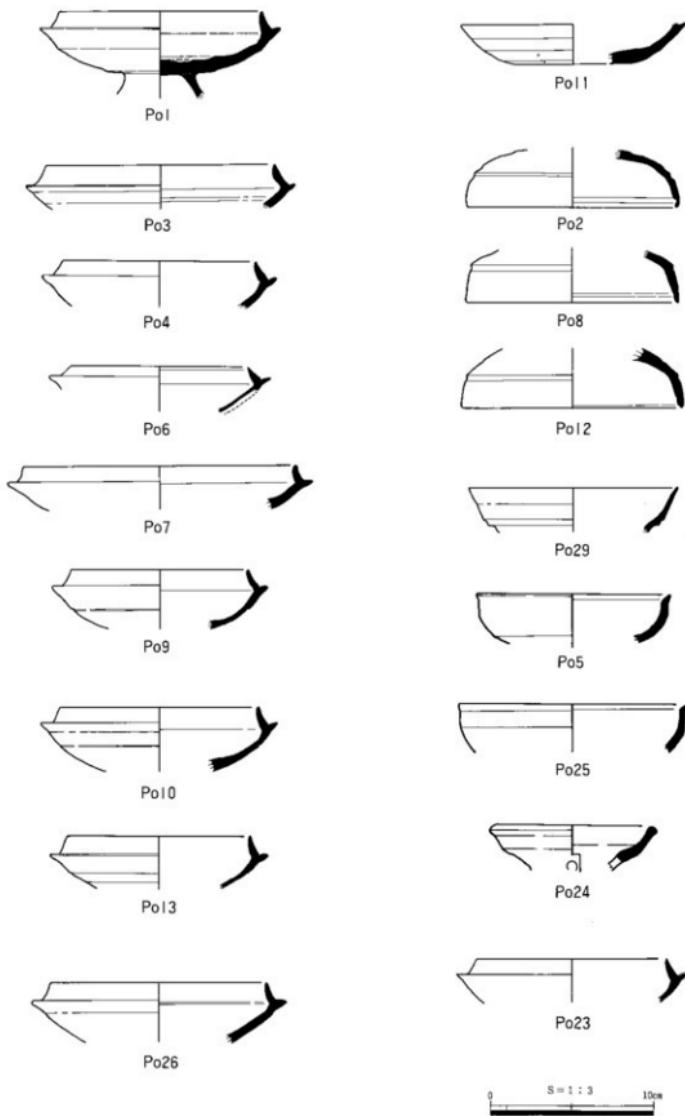
SX-5 Po8

插図29 尾高15号墳・37号墳 SX-5 出土遺物実測図

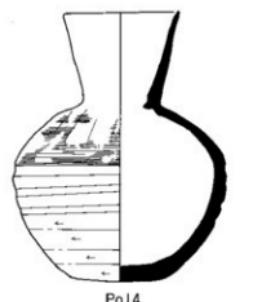


0 S = 1 : 3 10cm

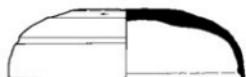
插図30 尾高16号墳 SX-4 出土遺物実測図



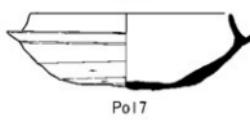
挿図31 尾高1号横穴墓 出土遺物実測図(1)



Po14



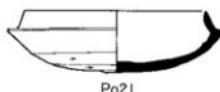
Po16



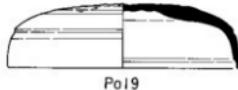
Po17



Po18



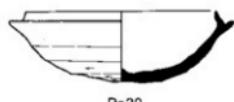
Po21



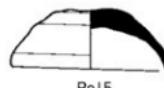
Po19



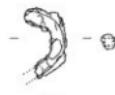
Po22



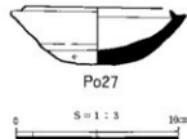
Po20



Po15

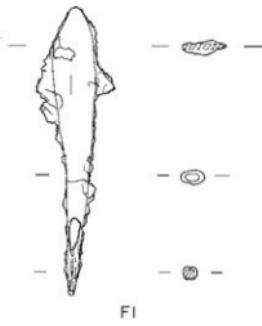


F2



Po27

0 S = 1 : 3 10cm



FI

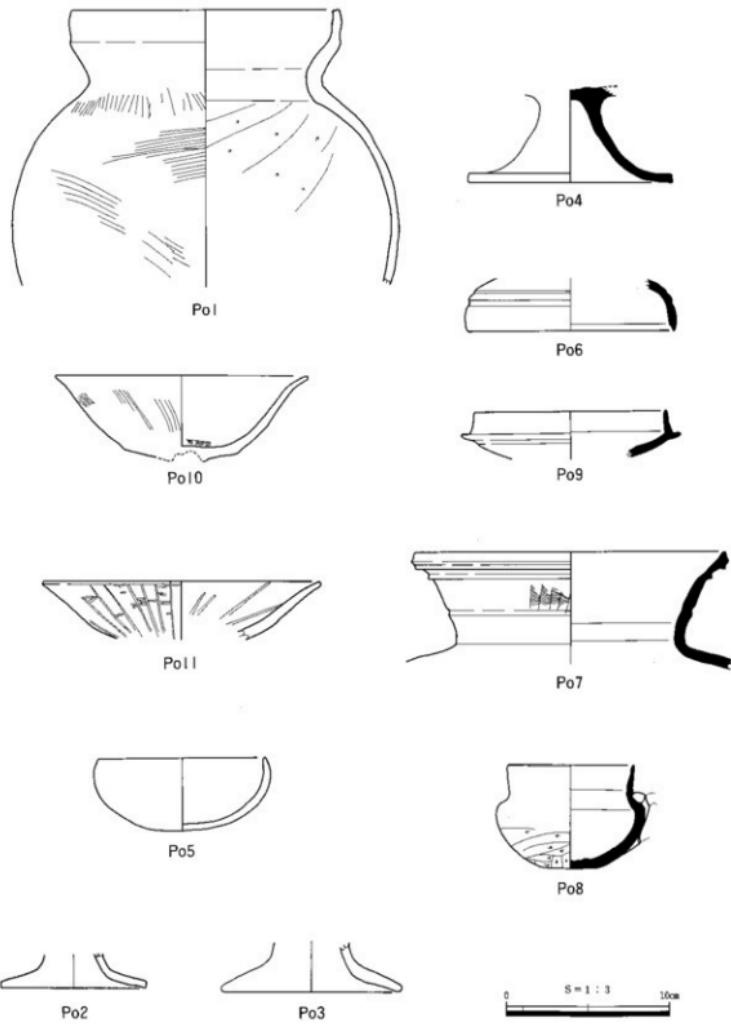


EI

E2

0 S = 1 : 2 10cm

插図32 尾高1号横穴墓 出土遺物実測図(2)



挿図33 テラス状造構 遺物実測図

図 版

図版 1

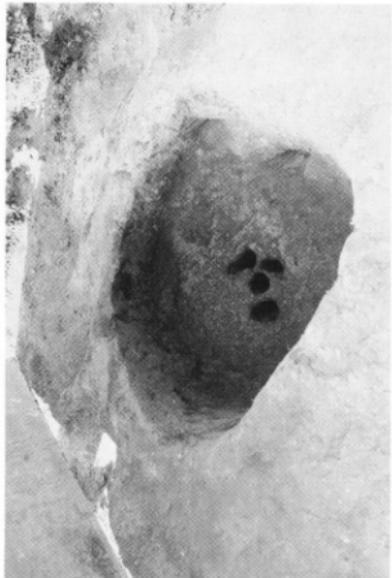


尾高御建山遺跡遠景—中央下の工事部分（南上空より）



尾高御建山遺跡全景（南上空より）

図版 2



SK-6 完掘状況 (南より)



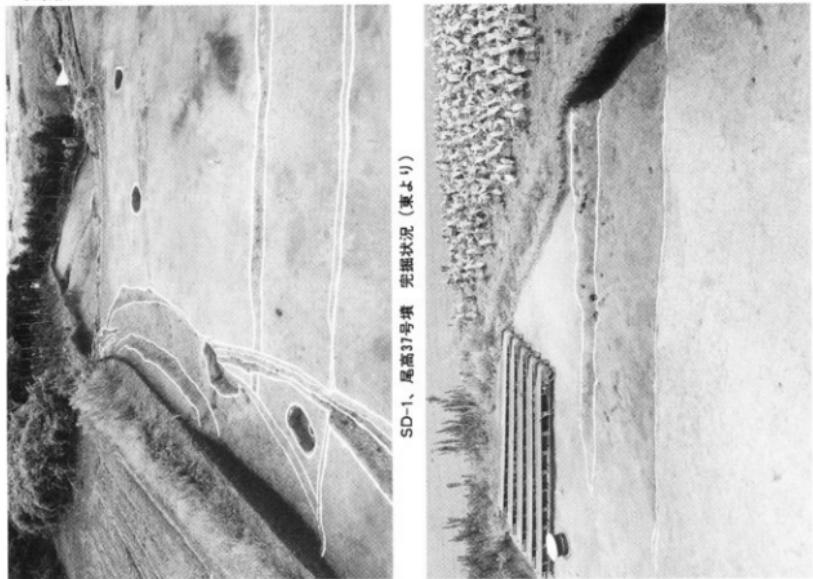
SK-5 土層断面 (東より)



SK-16 完掘状況 (東より)

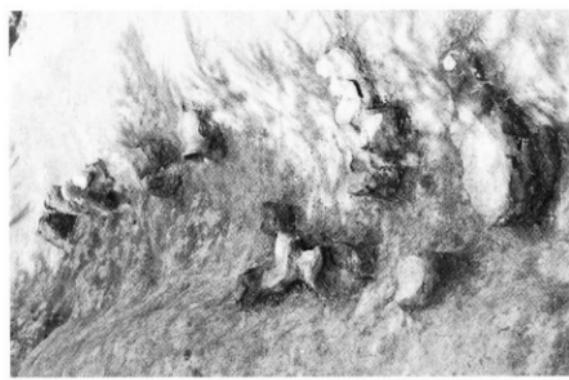
尾根平坦面 遺構検出状況 (南上空より)

図版 3



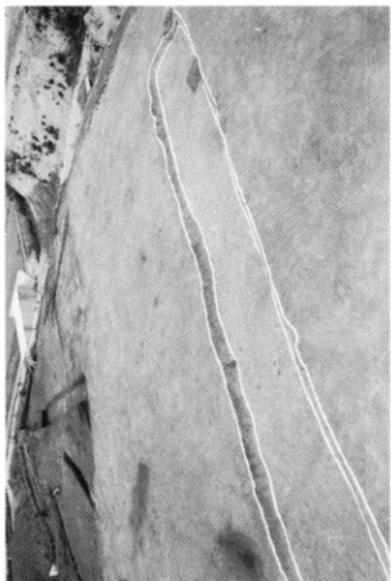
SD-1、尾高31号墳 完掘状況（東より）

SD-2 完掘状況（西より）

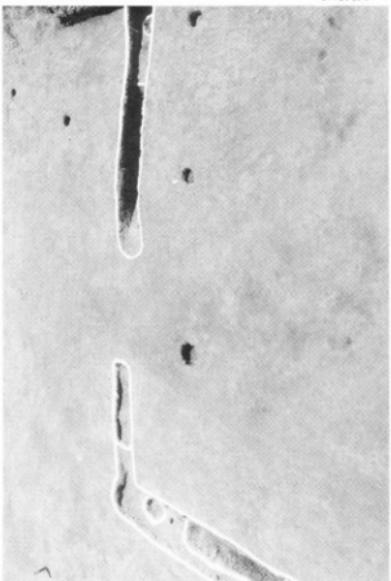


SD-1 遺物出土状況（東より）

図版 4



SD-3 完掘状況（東より）



SD-4 中断部分（西より）

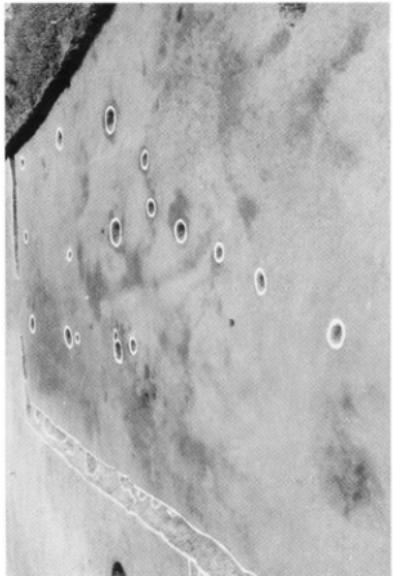


SD-2 遺物出土状況（北東より）



SD-5、8 底面のピット 検出状況（南より）

図版 5



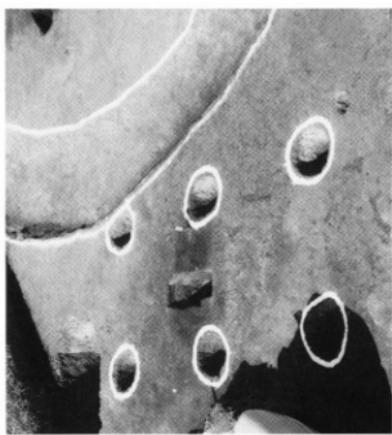
SB-2, SA-1 完掘状況（西より）



北側谷部 土層断面（東より）

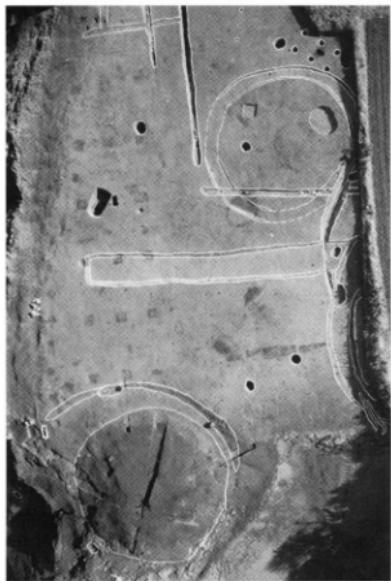


SD-6, SK-3 切り合い部分土層断面（西より）



SB-2 完掘状況（北東より）

図版 6



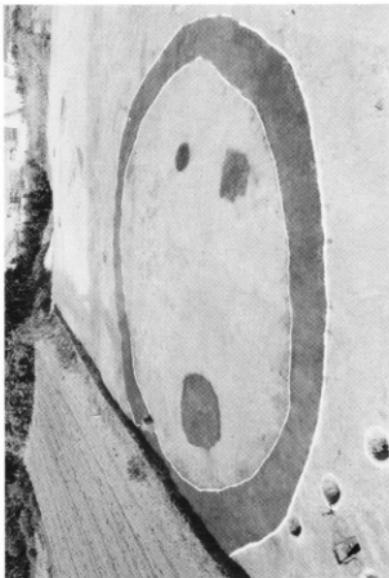
尾高15、16、37号墳 検出状況（南上空より）



尾高15号墳 周辺内遺物出土状況（南より）



SD-10 土層断面（北より）



尾高15号墳 検出状況（東より）

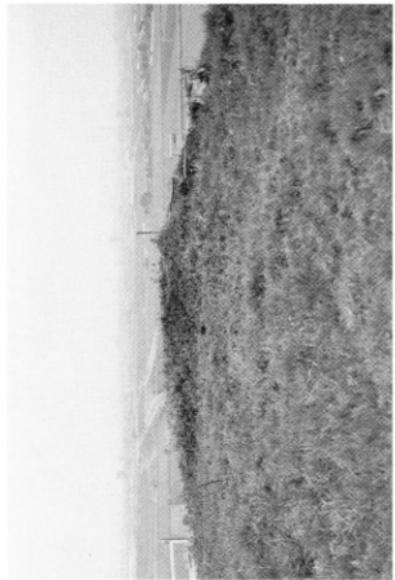
図版 7



尾高16号墳 塚丘検出状況（西より）



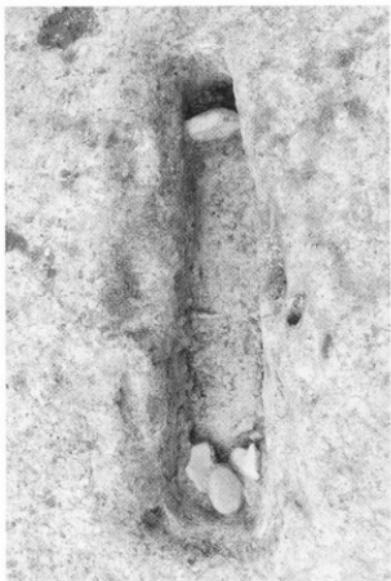
SX-2 完擺状況（北より）



尾高16号墳 調査前（東より）



尾高16号墳 周溝内遺物出土状況 Po6・Po16（東より）



SX-3 底面露出状況(東より)



SX-4 完體状況(北より)



SX-3 上面露出状況(東より)



SX-3 遺体安置状況の想定

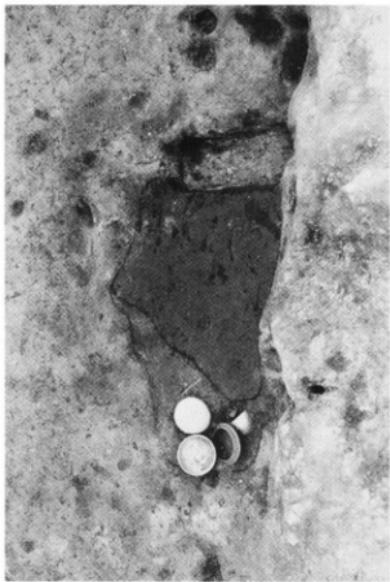
図版 9



SX-5 完掘状況 (北より)



尾高 1 号横穴墓 墓門部 開口前 (西より)



SX-5 遺物検出状況 (北より)



尾高 1 号横穴墓 前庭部 開口前 (西より)



尾高1号横穴墓 義門部～義道部床面溝検出状況（西より）



尾高1号横穴墓 宝室前壁 完掘後（東より）



尾高1号横穴墓 義道部～玄室床面溝検出状況（西より）



尾高1号横穴墓 宝室奥壁 完掘後（西より）

図版11



尾高1号横穴墓 玄室床面周囲の溝 玄門部～前壁南側（北東より）



尾高1号横穴墓 玄室開口時床面 遺物検出状況（西より）



尾高1号横穴墓 玄室開口時床面 人骨検出状況（南西より）



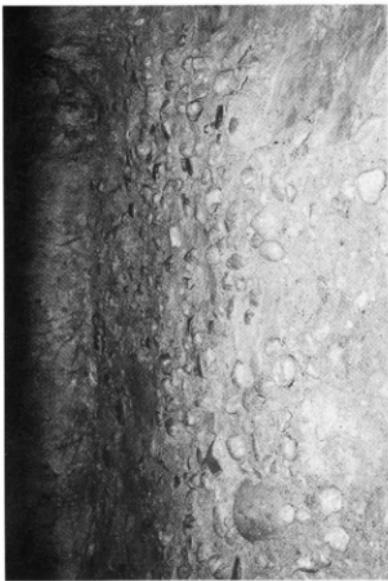
尾高1号横穴墓 玄室開口時床面 遺物検出状況（南より）



尾高1号横穴墓 碓床面 遺物出土状況-E1(南より)



尾高1号横穴墓 碓床面 遺物出土状況-F2(西より)

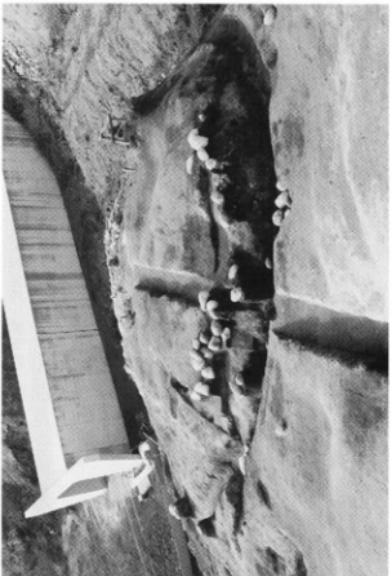


尾高1号横穴墓 碓床面 遺物出土状況-F1(西より)

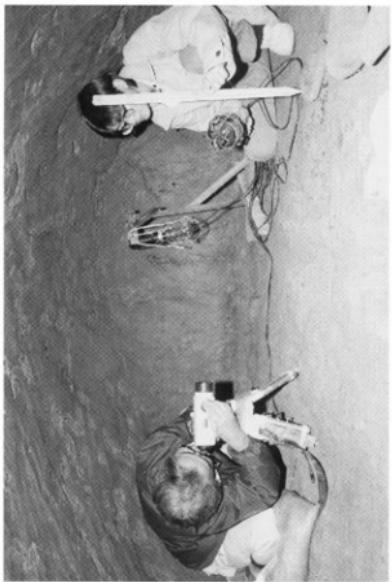
図版13



テラス状造構 遠景（北より）



テラス状造構 完成状況（東より）



尾高1号横穴基 実測状況



テラス状造構 検出状況（東より）

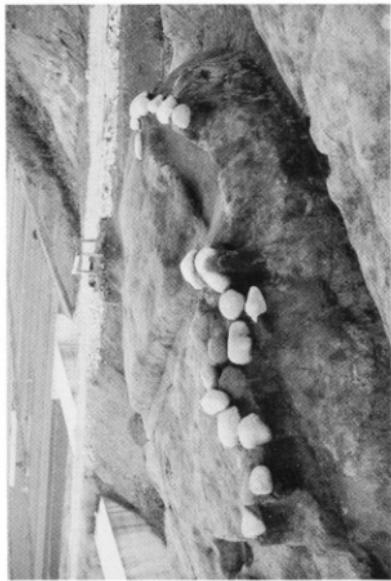
図版14



テラス状遺構 遺物出土状況 -P01 (東より)



SX-6 土壌断面 (北から) 右後方がテラス状遺構



テラス状遺構 周溝完掘状況 (南東より)



SX-6 完掘状況 (西から) 上端がテラス状遺構

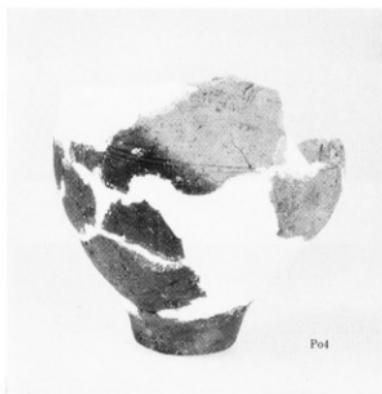
図版15



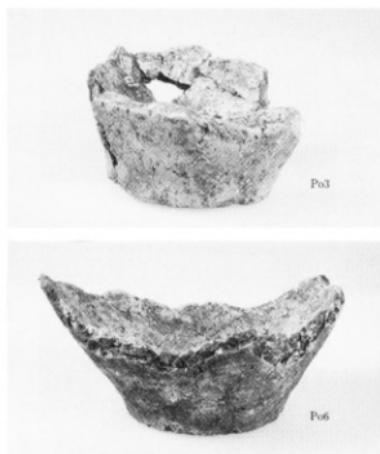
Po1



Po2

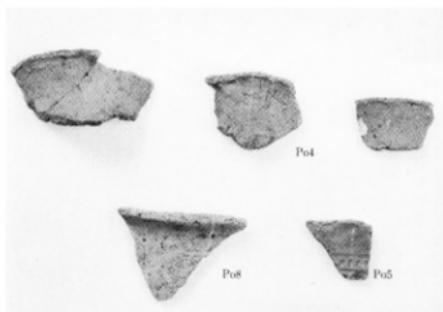


Po4



Po3

Po6



Po4

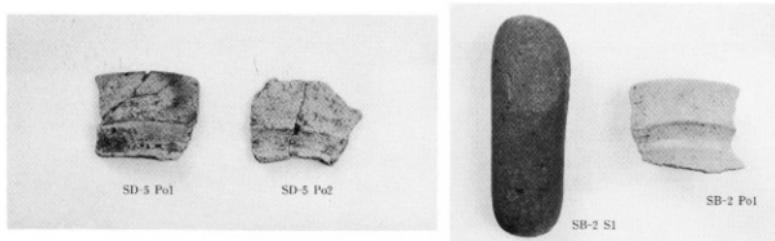
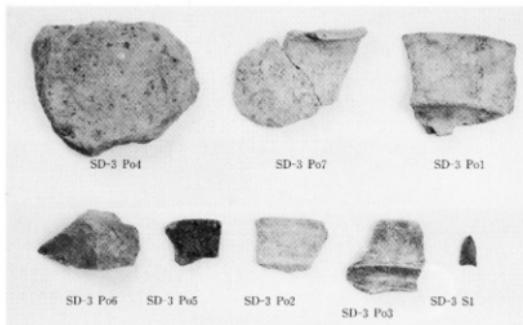
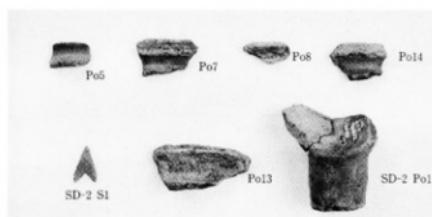
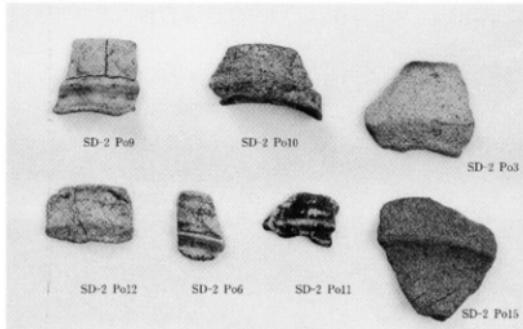
Po5

Po8

Po7

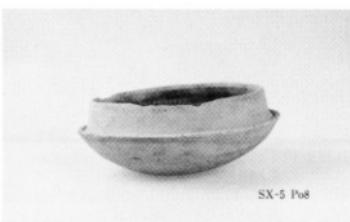
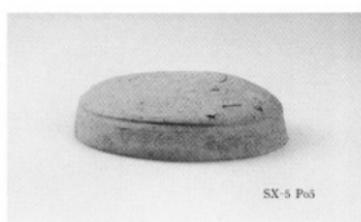
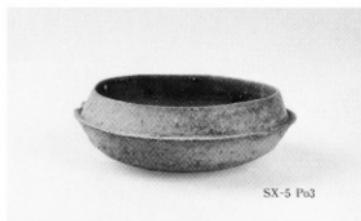
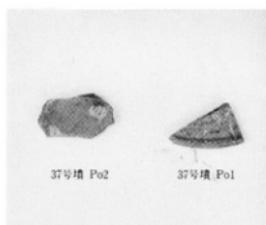
SD-1 出土遺物

図版16

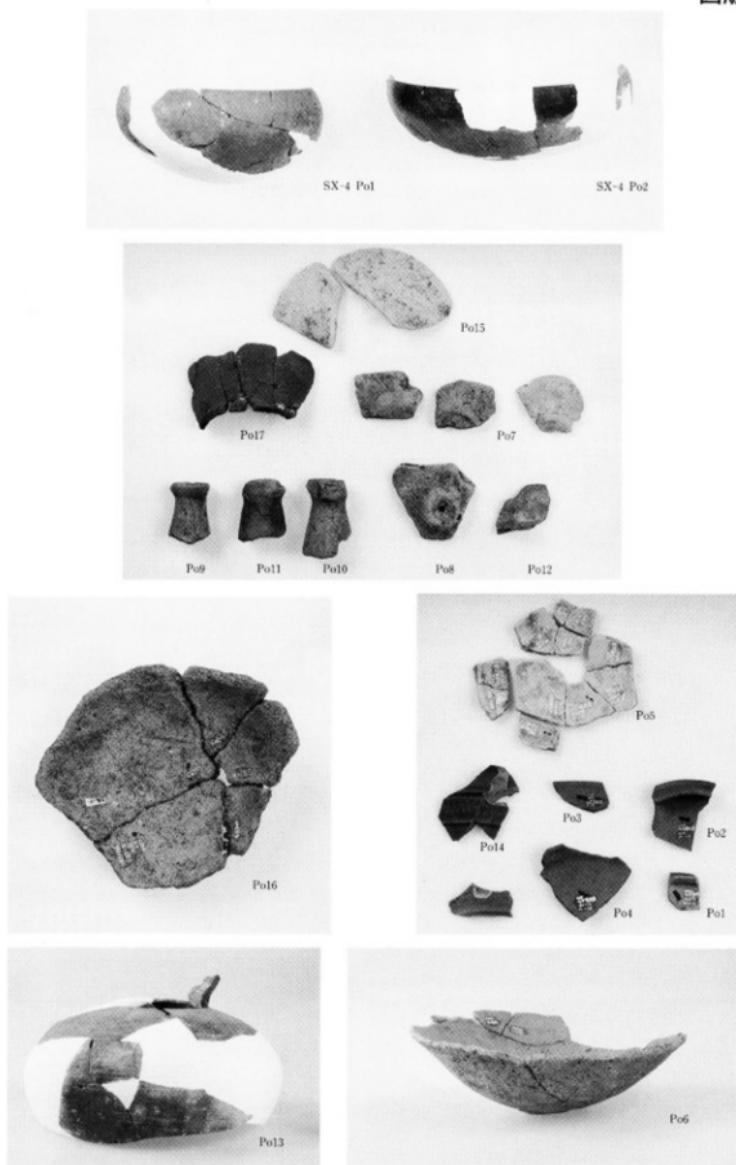


SD-2・SD-3・SD-5・SB-2 出土遺物

図版17

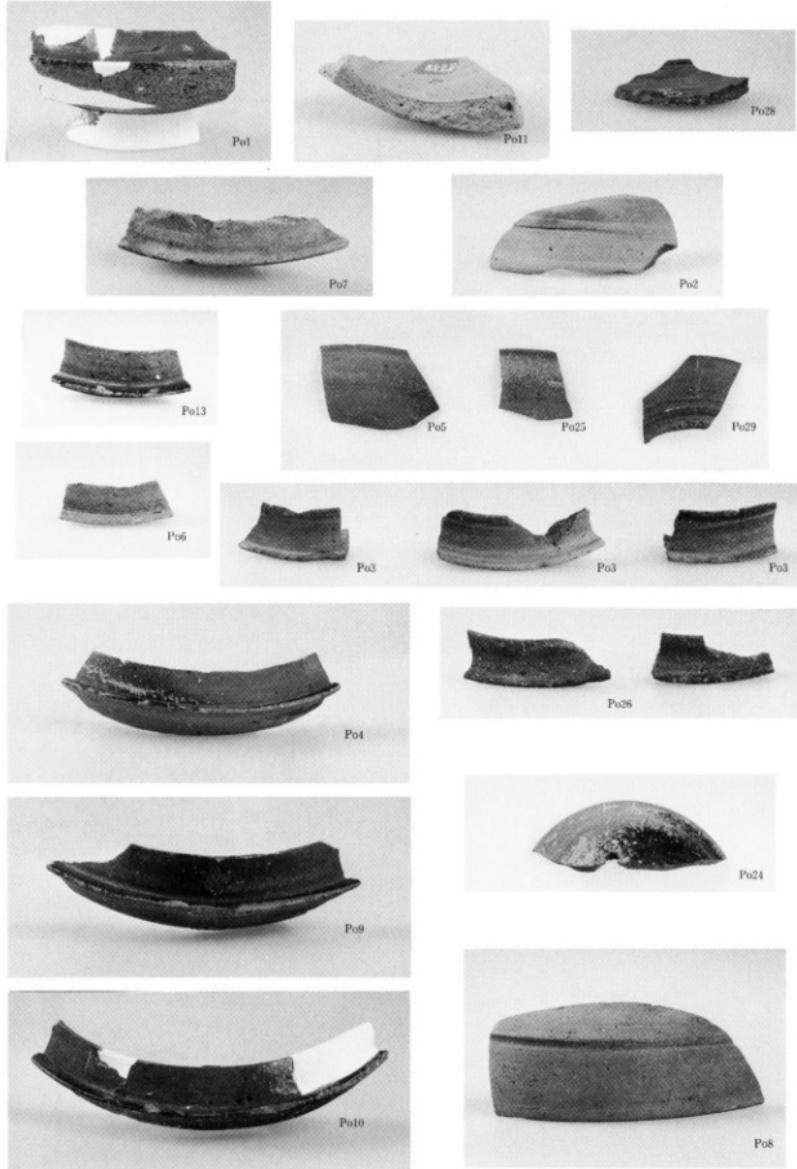


尾高15号墳・37号墳 出土遺物

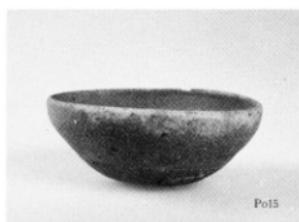
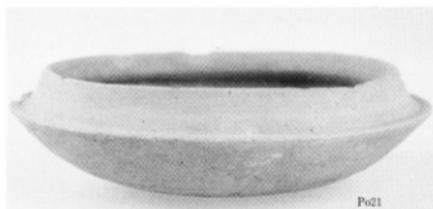


尾高16号墳 出土遺物

図版19



尾高1号横穴墓 出土遺物



尾高1号横穴墓 出土遺物

図版21



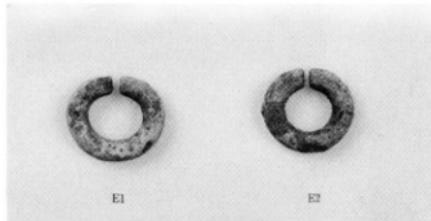
Po12



Po19



Po18



E1

E2

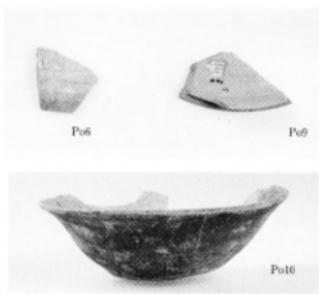
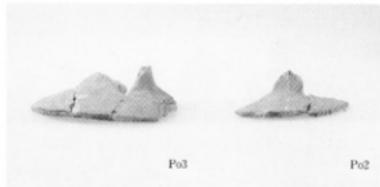
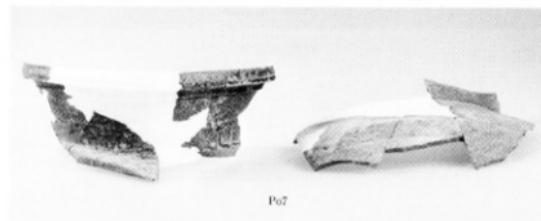


F2



F1

尾高1号横穴墓 出土遺物



テラス状遺構 出土遺物

図版23



現地説明会



発掘作業参加者

遺構一覧表

尾高御建山遺跡（4区）

遺構名	処理番号	遺構の種別	出土遺物	時期	備考
SK-1	SK-2	土坑(落し穴)	なし	縄文時代?	底面ピットあり
SK-2	SK-3	〃	〃	〃	〃
SK-3	SK-4	〃	〃	〃	〃
SK-4	SK-6	〃	〃	〃	〃
SK-5	SK-10	〃	〃	〃	〃
SK-6	SK-11	〃	〃	〃	〃
SK-7	SK-12	〃	〃	〃	
SK-8	SK-14	〃	〃	〃	底面ピットあり
SK-9	SK-15	〃	〃	〃	〃
SK-10	SK-16	〃	〃	〃	
SK-11	SK-17	〃	〃	〃	底面ピットあり
SK-12	SK-19	〃	〃	〃	〃
SK-13	SK-20	〃	〃	〃	〃
SK-14	SK-21	〃	〃	〃	〃
SK-15	SK-22	〃	〃	〃	〃
SK-16	SK-23	〃	〃	〃	〃
SK-17	SK-24	〃	〃	〃	
SK-18	SK-25	〃	〃	〃	底面ピットあり
SD-1	SD-5	溝状遺構	弥生土器	弥生時代前期	環濠の可能性あり
SD-2	SD-2	〃	舟形土器・土師器	不明	
SD-3	SD-3	〃	弥生土器・土師器	〃	
SD-4	SD-6	〃	なし	〃	中断部分あり、床面にピット
SD-5	SD-8	〃	土師器	〃	床面にピットあり、集石あり
SD-6	SD-11	〃	なし	古墳時代以降	底面にピットあり
SD-7	SD-7	〃	〃	不明	
SD-8	SD-9	〃	〃	〃	底面にピットあり
SD-9	SD-10	〃	〃	〃	
SD-10	SK-6	溝状遺構の一部?	〃	〃	埋土上層から疊棲出

遺構名	処理番号	遺構の種別	出土遺物	時期	備考
S B - 1	P 1 - 9	獨立柱建物跡	なし	不明	2間×2間
S B - 2	P 19 - 24	〃	土師器・磨製石器	〃	2間×1間
S A - 1	P 10 - 14	権状遺構	なし	〃	

尾高古墳群

遺構名	処理番号	遺構の種別	出土遺物	時期	備考
尾高15号墳	S D - 4	古墳(円墳)	須恵器	古墳時代後期	封土削平、周溝のみ検出
尾高16号墳	尾高16号墳	古墳(円墳)	土師器・須恵器	〃	埋葬施設削平、葺石・埴輪なし
尾高37号墳	S D - 12	古墳(円墳?)	須恵器	〃	封土削平、周溝の一部のみ検出
S X - 1	S X - 15	土壙墓?	なし	不明	15号墳周溝内埋葬の可能性あり
S X - 2	S X - 9	箱式石棺	なし	古墳時代後期?	16号墳周溝内埋葬、枕石あり
S X - 3	S X - 10	土壙墓	なし	〃	16号墳周溝内埋葬、集石あり
S X - 4	S X - 14	土壙墓	土師器	〃	16号墳の周溝外埋葬?
S X - 5	S X - 12	土壙墓	須恵器	古墳時代後期	37号墳の周溝内埋葬

尾高1号横穴墓

遺構名	処理番号	遺構の種別	出土遺物	時期	備考
尾高1号横穴	S X - 1	横穴墓	須恵器・耳環・鉄鏃	古墳時代後期	襖床と追春面を確認、床面に漆
テラス状遺構	S X - 3	横穴墓の後背施設	土師器・須恵器	〃	周溝・列石あり
S X - 6	S X - 5	横穴墓掘削放棄?	なし	古墳時代後期?	瓦層に埋め戻し

報告書抄録

書名	尼高御建山遺跡II・尾高古墳群II・尾高1号横穴墓							
副書名	一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	IX							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	39							
編著者名	山田真一 鬼頭紀子							
編集機関	鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-01 鳥取県岩美郡国府町宮下1260 TEL(0857)27-6711							
発行年月日	西暦1995年3月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
尼高御建山	鳥取県米子市	31202	3-101	35°20'21"	133°24'41"	19940407	5,274	道路(一般 国道9号米 子道路)建 設に伴う調 査
尼高15号墳	尼高字御建山		3-46			~19941227		
尼高16号墳	閉二		3-47					
尼高37号墳			3-380					
尼高1号横穴墓			3-381					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
尼高御建山	溝 土坑	縄文 弥生 古墳	土坑 溝状遺構 掘立柱建物跡	19基 10条 2棟	弥生土器、土師器 須恵器			
尼高古墳群	古墳	古墳	古墳 (内2基は周溝のみ) 石棺墓 土壙墓	3基 1基 3基	須恵器 土師器			
尼高1号横穴墓	古墳	古墳	横穴墓 テラス状遺構	1基 1	須恵器、土師器 耳環、鉄鏃			

鳥取県教育文化財団調査報告書39
一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書IX

鳥取県米子市

尾高御建山遺跡II

尾高古墳群II

尾高1号横穴墓

発行 1995年3月1日

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

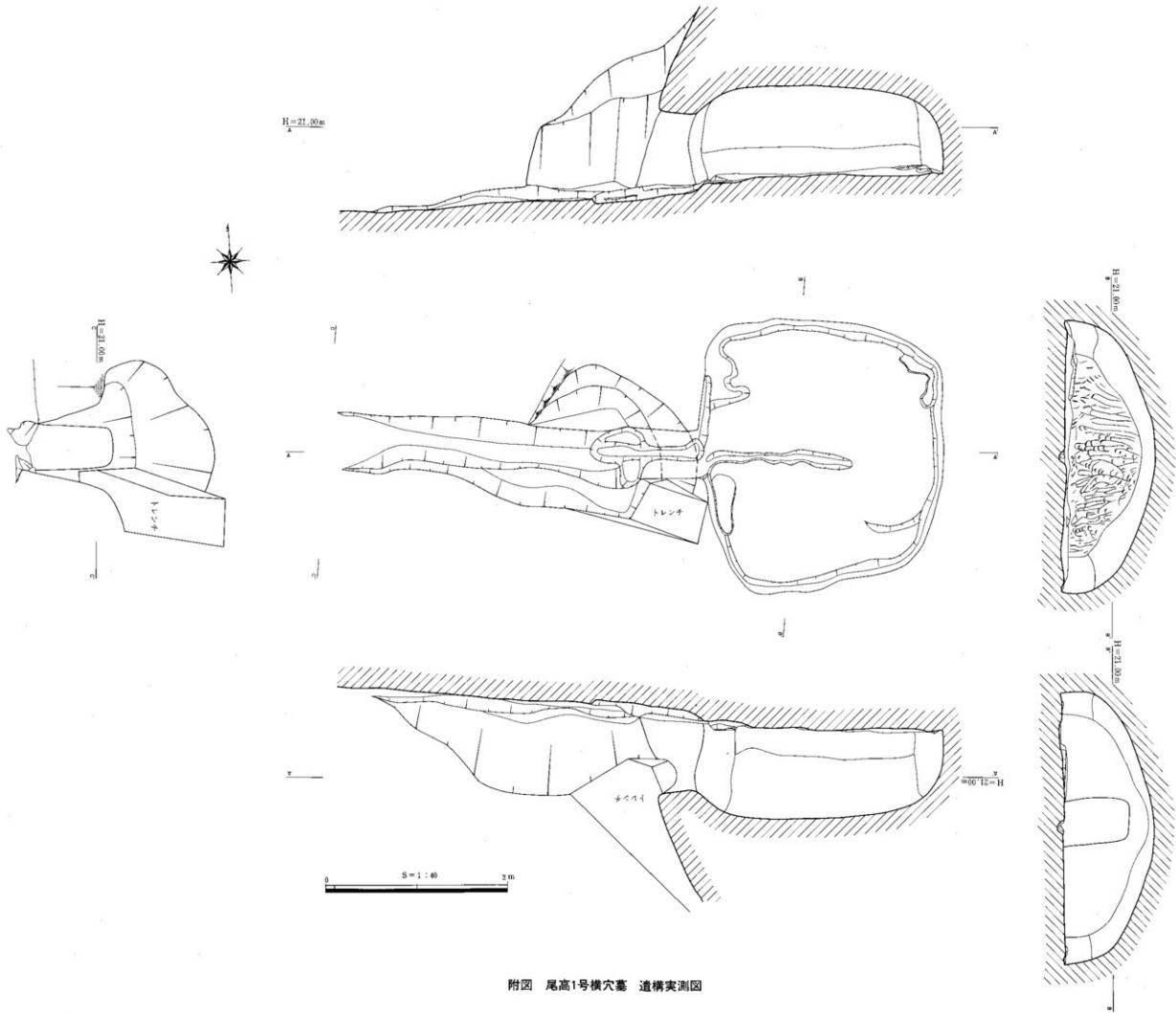
〒680 鳥取市東町1丁目271番地

電話 (0857)26-8397

印刷 山本印刷株式会社

〒682 倉吉市広栄町971-21番地

電話 (0858)22-6171



附図 尾高1号横穴墓 遺構実測図